

鹿児島県史料集
(34)

示現流関係史料

鹿児島県史料集
(34)

示現流関係史料

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料第三十四集として、ここに「示現流関係史料」を刊行いたします。

本書は、「示現流聞書喫緊録附録系図」（当館所蔵）、「東郷重位関係諸記録」（東郷重位関係文書）（東郷家所蔵）、「東郷重位関係文書」（旧記雑録所収）、「示現流関係諸記録」（薩藩叢書所収）をまとめたものであります。

県史料集の刊行は、資料の保存をはかるとともに、地方史研究の利用に役立てることを目的としております。

今回の史料は、鹿児島市維新ふるさと館の宮下満郎氏に編集・校訂・校閲をいただきました。長期間にわたるお骨折りに心から感謝いたします。

平成六年十二月

鹿児島県立図書館長

野 口 信 太 郎

解題

示現流聞書喫緊録附録系図

この書は後書きによると、天明元（一七八一）年に、当時五十二歳であった久保七兵衛之英が著わしたものである。久保之英について確かなことは伝わらないが、宝暦五（一七五五）年の「島津家分限帳」（拙校訂、甲南紀要第八号所収）によると、「京都留守居 一、八拾四石 久保七兵衛 外藏米七拾五俵」が見える。この京都留守居の久保七兵衛は、著者の之英と同一人物であった可能性もある。之英の五十二歳から逆算すると、京都留守居の七兵衛は二十六歳ぐらいになる。

この書は示現流の歴史を系統的にまとめたものである。流派の始まりを、始祖天真正自顯流の十瀬与三左衛門尉長宗に求め、金子新九郎を経て東郷重位に伝えられる。東郷重位が島津家久の指南であった体捨流の東新之丞を御前試合で破ってから、島津家の御家流となったいきさつ。南甫文之に命じて流派の名を勘案させ、観世音菩薩普門品第二十五経文内から、「示現神通力」の一句を選び、示現流と改めたこと。東郷重位の武芸に関する伝承などを紹介しながら、示現流が他の流派より優れているのは、意地と業にあり、さらに味と芸を究めた者こそ達人である、と説いており、東郷重位や示現流に対する久保之英の思い入れが、文中の諸所にあらわれている。

後半は重位の弟子や本家の正統を継いだ嫡々とその弟子たちを紹介しており、東郷示現流についての天明ごろまでの武人伝で構成されている。漢文体で述べているので読みにくいのが難点であ

るが、示現流の歴史を知るにはよい書である。

東郷重位の門人の一人に久保平内左衛門之昌がいる。本文に見るとおり、意地と業に達し、重位に打と伝書を授けられた達人である。之昌は江戸明暦の大火（一六五七年）のときに、江戸の大奥詰であったが、之英は之昌のことを祖先とは書いていない。これに対して、序文の中で、中期の達人久保七兵衛之昭は曾祖父であると述べており、本文では黒丸をつけて紹介している。之昭は寛永元（一六二四）年中福良（現天文館附近）に生れ、東郷家三代重利と同年で家が近く、幼時から重方について示現流を学んだ。背は鴨居より五寸高く、当時の鹿児島で随一の大勇大力の大男であったという。

祖父や父について之英は何もふれていないが、曾祖父の之昭以来、いずれも示現流を学んだと考えてよいのではないか。さらに之英自身も示現流を学んだのであろう。ところで之英が生まれたのは、天明元年の五十二歳から逆算すると享保十五（一七三〇）年ごろになる。享保十八年には東郷家四代の実満（重治）が没し、孫の実昉が家督を継ぐことになった。実満には長子位照があったが、継母との不仲から出奔しようとして日向で捕えられ、大島に流罪となり家督を継げなかった。異母弟の実勝も、位照の子実昉との不仲を理由に沖永良部島へ流罪となり、同じく家督を継ぐことができなかった。そこで家督はこの二人を飛びこえ、位照の子実昉を祖父の重満が指導することになった。実昉が家督を継いだのは二十三歳の時であり、実昉に伝えられた打は、立・双・越の初段のみで、東郷家の示現流はまさに危機に瀕していた。実昉は叔父の伊集院平六や薬丸兼富などに伝授をうけて、東郷流の

再建をはかるのであるが、久保之英が示現流を学んだのは再建中の実助であった。之英の心に示現流への強い思い入れがあるのは、師家のこのような事情があったからであろう。なお東郷重政氏から、善吉和尚と東郷重位に年齢の間違いがあることを指摘されたが、刊行にあたっては原文のままとした。

東郷重位関係諸記録

東郷実満覚書 二編の記録はほぼ同じ内容のものである。享保十四年の覚書は前部の数葉が欠けており、辰十月の覚書は欠落がなく内容もやや豊富である。この後書きによると、月番の家老肝付主殿を通じて藩庁へ提出されている。あるいは各流儀の師範家に、流儀伝来の由来を上申させたものであろうか。内容は示現流についての伝承を、藩主と東郷家歴代のかかわりあいを重点に置きながら述べている。

重位立合之事 東郷重位は生涯に四十八人と立合い、一度も負けたことないと言われる。この史料は三十四件の立合いの記録であるが、一件で二人以上と立ち合ったこともあるので、四十八人に近い数になったのであろう。伝えられたのは写本であるが、文章からみると重位自身の記録と考えられるので、重位の強さが窺えるよい史料である。

重位弟子働之事 標題が示すとおり、重位の弟子たちの立合いや上意打ちなどの記録である。弟子たちの剣さばきでさへ、示現流がすさまじい剣法であったことがよくわかる。最後の二話は重位に関する伝承である。

東郷重位公御代々諸御門人示現流兵法之話 この史料は後書きにあるとおり、明和四（一七六七）年十二月、示現流の達人竹迫

藤四郎が集めた伝承などを記録したものである。数は百四十五話の多数におよび、これらの伝承は「示現流聞書喫緊録附録系図」と同じ内容のものもあるが、独自の伝承も多い。ただ竹迫藤四郎はこれらの伝承を歴史的に位置づけようとせず、話を紹介しながら、示現流の意地や業、示現流の真髓とはどのようなものであるかを伝えようとしている。

文章は久保之英の漢文体とは違い、当時の武士の口語体のようなくだけたもので読みやすく、内容もほほえましいものがある。明和四年といえは、重津重豪の風俗矯正もまだ始まっていず、文中には古い鹿兒島弁も使われており、当時の薩摩兵児の言葉使いも興味深いものがある。

東郷重位関係文書（鹿兒島市史所収分）

同書所収の「東郷家文書」「葉丸家文書」の中から関係分を、東郷重位書状・東郷重位宛書状・東郷家系図に分けて収録した。

東郷重位書状 多くは私信に属するものであるが、示現流についての話題や極意を披露した書状もある。

東郷重位宛書状 2号・3号の島津家久書状によると、家久が示現流に魅せられて、門人にも全てを教えるな、秘伝にせよと述べたことがわかる。5号・6号は江戸で立合い、敗れて重位入門した福岡尚助と寺田勝介の起請文前書である。7号文書は、三代重利に男子がなく、流儀の存続が危ぶまれる中で、染川長兵衛の器用さを見込んで養子相続させることを申し入れたものである。この辺の事情について少し述べると、染川の養子成りは問題がなくて成立せず、やがて寛文十二（一六七二）年七月、嫡子重治が誕生した。しかし父重年は重治若年のころ中風をわずらい、元禄

三(一六九〇)年、免許皆伝のないまま、重治十九歳のとき没した。したがって重位以来の示現流の一子相伝は途絶えたことになる。このため弟子の多くが去ったのであろうか、叔父大蔵兵衛景吉や武宮内左衛門重貞の経済的援助はあったが、家計は極度に逼迫し重位拝領の宅地を去って、一時伊集院郷脳木に移住した。ここで火災にあつて重位以来の貴重な文書を焼失したという。その間に技をみがいたのであろうか、吉貴に呼び出されて、「煎」の打を上覧に入れた。満足すべき出来ではなかったが、重位以来の示現流を復活させるため、吉貴は禄米百五十俵と城下に屋敷を与えている。示現流の正統がなんとか存続することになった。

東郷氏支族系図 天明二(一七八二)年十一月、本田親礼撰になるもので、重位から実乙に到るまでの系図である。久保之英の系図とは若干の違いがあるが、両者をつき合わせると面白い。

東郷重位関係文書(旧記雑録所収分)

「旧記雑録」に所収されている文書や記録の中で、東郷重位や示現流に関するものを、同書の編年順に収録した。これらの史料も「示現流聞書喫緊録附録系図」と重複するものもあるが、同系図にないものも多く、重位の生涯を別の角度から知ることができ。同系図では元和八(一六二二)年に、柳生流の福岡七郎左衛門・寺田少助の兩人と立合い、二人に勝つと、示現流を他国に知られたくないために、以後参勤の供に重位を加えなかったというが、本書の13号文書「島津家久譜」によると、寛永三(一六二六)年、重位は大坂から鹿児島への使者に任せられているので、同系図の説はあやしくなる。

22号文書の「伊勢貞昌書状」によると、寛永七(一六三〇)年、重

位は納殿役として島津家久の留守を預り、嫡子の重方は表方に勤めているので、父子共に家久に重用されていることがわかる。30号と31号文書は、寛永十四(一六三七)年に家久が病気になる、病氣平癒祈願として、東郷重位ら納殿役は、愛甲次右衛門慰廉次を霧島の御鉢へ参籠させたことを伝えている。これも同系図に見られない史料である。

示現流関係諸記録

これまでに刊行されたその他の史料集から、示現流関係部分を拾い出した。

本藩人物誌 東郷氏支族系図以前のことにふれている。

諸家大概 これも本藩人物誌と少異はあるが、重位以前の東郷家にふれたものである。

諸郷地頭系図 伊地知季安の撰になるもので、重利が出水郡野田郷の地頭に補せられているのはこの記録だけである。

三州御治世要覽附録年代記 島津久儒の家来豊田五郎右衛門と東郷重治の弟子伊地知清右衛門とが試合をして、重治・伊地知・豊田の三人が逼塞させられた事件は、示現流聞書喫緊録附録系図は享保年間のこととしているが、この書によれば享保十七年二月であったことがわかる。

称名墓志 東郷重位から実乙までの概略を述べており、墓所以外は諸書の記事とほぼ同じである。

人物伝備考附録「撃剣の部」これも重位以後実乙にいたる歴代の略伝である。

西藩野史 大坂夏の陣に際して、島津家久は徳川方に参加して美々津に出陣中、豊臣秀頼方は島津家に援を求めるため使者武井

理兵衛を派遣したが、家久はこれを描え大坂の徳川陣へ送った。武井護送役に選ばれたのが別所景親と東郷重位であったという。この記事は諸書に見られないものである。伝記の部はとくに新しい記事はない。

盛香集 重位が善吉に天真正自顯流を伝えられたときの上京について義久の上京に随従して上京したとする多くの説に対して、この書は金工または蒔絵の稽古のために上京したとの説をとる唯一のものである。

薩藩旧伝集 雑多な伝承の寄せ集めである。他書に見られない伝承もあるので興味ぶかい。ひよっとすると、久保之英が入手できなかった書とも考えられる。

例言

- 一、本史料集は、鹿児島県立図書館所蔵の「示現流聞書喫緊録附録系図」（写本）を底本とし、東郷重政氏所蔵の原本で校訂した。
- 二、印刷に際して、漢文の割書は（ ）は附して字体を大きくしたが、以外の史料は原本の体裁によった。
- 三、印刷に際して、漢文は当用漢字体に改めたが、和文の記録や文書などは、原則として原文の用字によった。変体仮名はすべて通用体の平がなに改めた。但し、江・者・茂・面については、活字を小さくしてそのまま使用した。
- 四、本文には適宜、読点・併列点などを附した。
- 五、虫くいななど不明か所は、字数によって□で示した。
- 六、本史料集の作成にあたり、示現流本宗家の東郷重政氏に史料閲覧の便宜を与えられた。記して謝意を表したい。
- 七、本史料集の原稿作成と校訂は宮下満郎が担当した。

目次

一 示現流聞書喫緊録附録系図	6
二 東郷重位関係諸記録	57
東郷実満寛書（享保十四年十二月）	57
東郷実満寛書（辰十月）	59
重位立合之事	63
重位弟子勲之事	66
東郷重位公御代々諸御門人示現流兵法之話	70
三 東郷重位関係文書（鹿児島市史所収分）	92
東郷重位文書	92
東郷重位宛文書	97
東郷家系図	99
四 東郷重位関係文書（旧記雑録所収分）	106
五 示現流関係諸記録	116
本藩人物誌抄	116
諸家大概抄	117
諸郷地頭系図抄	117
三州御治世要覽附録年代記抄	117
称名墓志抄	117
人物伝備考附録一撃剣の部一抄	118
西藩野史抄	119
盛香集抄	119
藩政旧伝集抄	120

示現流之大祖十世与三左衛門尉長宗翁者、強明豪傑之氣質也、故參龍、香取大明神之宮社、感動祈誠得劍術之妙用溫奧、至誠、忝大明神現神体、授十二之打、此十二之打、成變化、擊臥於敵之妙用、譬、如四時之十二月以天地之成、功用無窮也矣、或問、業者出神教焉、意地亦出神教乎、曰意地者含其業中、譬上古之聖神見天地二氣之流行、含其于二氣如著述易卦天文矣、當流之業也如此、正大神速者含其業之意地幽玄神活也、長宗翁者識得之安之、幽玄神活之味、以有不及言語之深意也、故採儒佛神之三道德則之句、譬喻之著一二之傳書、授門人而示其階梯矣耳、故讀傳書得意地之蘊奧者有其人也、後世之末弟不通傳書者多焉、不通傳書者不達業也、故或以己之凡庸之心、怪出現之神教、疑二字靈耀之妙、為不能人虛矣、又善此惑說之徒出、益助此說不止焉、將失正實也、故予述此一卷、

當流者、發起長宗翁、是傳金子翁、是傳善吉和尚、善吉和尚是傳授手重位、重位翁是傳授于嫡子重方、以示現之妙用、定翁家適々功業之大綱、是表于系圖、以明白神教之傳來、重之、非天真也現于神教之劍術者、善不能至如此心術之驗也、是明記于譜中、使學士見之、消惑說、欲令興起于當流矣、且重位五高弟之長合場・篠原・大野・兒玉・葉丸氏、亦顯神教之妙用、不使人疑當流之為神教者也矣、至重方之弟子、猶次之弟子有之也、夫當流者天工也、因神顯深遠神活也、故學當流之士者、先守敬義、而以制私心貴果

斷為質也、質非如此、雖求門不能入之術矣、而如此美質希也、故雖聖師使弟子至十之七八難焉、況如五高弟至得方三字磯田雲耀之位者、尤難得處也、是其為人、豪傑之人也、故能顯當流之妙用、其功均聖師、仍於當流是稱君子次之稱賢才、可哉、故統重位翁重方丈羅系圖、譜其功効、告教傳之實于後門弟、兩代以來世々之弟子、雖未及君子賢才、亦盡精神于當流、其業以統君子賢才、名稱于今、學士亦不少也、此學士之輩亦對他流者、雖能師容易打臥彼、廣大天真之神教、令他流恐怖於當流之藝術而、於其現世者、以忠孝廉直被稱之義士也、然漸至經歲霜者、非君子賢才者、或誤師弟之次序、或亡失其業意地之威遠与一世之雄名、恨不傳于後世矣、故又統君子賢才載于系圖、譜事跡而告自他格別之驗、傳其名于後世者也、或初代二代弟子之中、以大勇大力之器量、有其名覆於世、壯士大山綱宗我曾祖父之昭之類、雖無熟于流義之名、非當流如是之盛風力、以不能為弟子也矣、使之立合于他流、知大其雄強、仍為當流之愛子、羅系圖譜事跡者也、凡當流至寬文延寶者、名教正而無有當流異端之萌焉、然近世出氣質偏倚之弟子、因己之心辭、不達傳書之正實、誤考之、以己之工或愛業習熟、然其原以流出示現、猶号示現流有教人者、是名示現而深陷傍布、其已不知傍布、却稱之為正傳之示現流矣、是則當流之異端而、虐人之子也、於此中、或當流悉有變、或以當流合他流有号示現流、又加自作有号示現流、而不止其号于二也、故予画重類傍布之圖、示自他格別之義、而異端之徒亦羅于系圖、粗譜失其正傳之趣、而令載三角

示現流聞書喫緊録附録系図

示現流聞書要錄附錄系圖

香取大明神

延嘉式神名帳云、下總國十一座、大一座小十座、香取郡一座大香取神宮云々、此香取神宮者、天照宮之御時、神武第一也、吾朝武宮之大祖也、事跡委神代卷、故略於此矣、

長宗

号十瀬与三左衛門尉

常陸國大社鹿島大明神之神主、号飯笹長吏、則為号心影流、劍術之始祖也、蓋本朝鎌倉將軍代以前之劍術也、其教法不傳于今、雖劍術之名号多、是皆以長吏為始祖焉、故雖異形業也、意地者皆傍布而同於心影流焉、二代号飯笹若狹守、三代亦号飯笹若狹守、繼父祖之業、流義繁榮矣、故長宗初師三代之若狹守、修行心影流得總覽傳后為試芸之位、立合与師若狹守之処、師弟無勝劣而及相打、於愛長宗、以心影流為早拙之芸而捨之、通夜於下總國大社香取大明神社頭、(傳書者有常陸國蓋說也)、祈誓業意地高妙而日々長鍊純熟不尽之劍術焉、隨重夜其念願益親切也、故大明神感動於其誠心、神体出現於社頭荒薦之上(滿七夜一夜也云々)、持青竹授立双越寸滿煎平安行輕道真十二之打矣、長宗大慶満足立願之成就、九拜於神靈將歸之時、燕翻于社頭、故於二之階拔打帶刀、然不丁飛去焉、因觀念工夫而歸之時、又忽燕飛來、長宗無心拔打之(元師自聞

星于名上者、当流半變而將陷他流之驗也、令載四角星于名上者、当流悉化既陷傍布之驗也、是所以使人々貴当流之正道而、除当流之異端也、將有於当流之弟子君子賢才學子之品而粉然矣、故又不得止告其位以驗也、大小之白圈者、当流得傳心之正統聖賢君子也、關圈者、雖達業不知当流之本義之驗也、大朱圈者、打臥他流之劍術鎗長刀、又誅殺屋龍賊徒之驗也、小朱圈者、無一事之功名、其以常之言行帶占之趣顯不恥当流之意地輩之驗也、有譜無朱圈者、雖有好人之驗、得意地不詳之輩也、羅名而無譜者、傳名不顯与器量之輩也、羅此系圖弟子、初重位終于位照、纔七十五人也、是皆以位照及葉丸兼慶其外古弟子之義論、羅之告學士者也、凡自天正之昔至寬政之今、經二百年之歲霜而為連綿、五代之弟子以千可數焉、於其中有達当流之意地業之賢才學士、而洩此系圖之弟子知多也、然御家之封彈廣大而博知之士亦悉不能知也、故於我之短才只魔都之賢才學士而、恨有洩此系圖之輩矣、然今可問之不知古老焉、宜待後之識者也、雖然、為其芸高傳其名于人口、至今被嘆賞于世人輩者、可知非不載此系圖也矣、系圖既成而望之熟案、二代之弟子者不及初代之弟子、三代四代之弟子者不及二代之弟子、既隔階之有隙矣、治世久故、然与因時之風俗、然与雖当流久不堯起出火宅之芸者、月船之本漸變化陷身船之意識、業亦從失廣大迅速哉、英雄勵志慷慨之淚濕巾、宜尽精神于示現者、今此時為然矣也、寬政元年己酉十一月廿七日、末弟久保氏紀之英攬筆於二官橋之窓眼堂序、

神教可守神教、然此拔打用立、勿疑矣、其太刀丁、燕之頭于真中、燕成二落焉、爰則得心教之味矣、雖傳授當流于神靈、本原因長宗精神之深志、而偶天地殺伐於惡人之真工、託神靈顯之術也、故名曰天真正自顯流矣也、冠天真者尊神教之名也（以号天真正自顯流、長宗翁初修行曰天真流、以彼為階梯、而後祈劍術之溫奧、終得當流、故曰可有天真流者為誤甚矣）、蓋多弟子焉、夫當流自現之術者天帝之真工也、故其意地尤天帝之真怒也、仍述之有不及言語、故譬喻當流之於意地于儒佛神（神道者付和歌云）之極則之句、著手次尊形圖書察見三卷之傳書、以之令悟弟子矣也、當流之本原如斯、故尊崇神教、非其器深秘不傳之也、故推廣神教之心、作數十之業為表芸教初心焉、當流者初地則極也、故表亦其教法似粗密似淺深焉、熟之后、撰其通力之遠器至無疑而傳初段、猶令進位焉、有次第階級存乎、於是當流全備而一毫之無欠闕矣、嗚呼長宗翁如何人哉、於劍術之道、可曰先天而天不違後天而奉天、時乎今甌索傳書、流義業正大神速、仍其意地雖如幽玄神活而登雲、書顯其階梯深切明白而、使門弟不迷道矣、誠劍術之聖哉、以之見之、其平日忠孝之勤亦近賢之人物也、惜哉不傳其言行矣、蓋長宗者當陸國任人也、佐竹家之英士与、不詳、

○金子新九郎

師長宗翁而修行當流、傳云、長宗翁雖多弟子、當

流業意地以高上故、無可傳當流之味弟子焉、然一人金子氏資質豪雄、有將得業通力、通神妙之意地之大器、仍授十二之打与傳書、故得當流心傳之妙矣、則善吉和尚之師也、餘者悉不詳、

○善吉和尚

俗名号赤坂弥九郎政雅、後改雅樂助、

○傳曰、善吉和尚者幼稚之時、其父害于人、故和尚為復讐、自幼少之時師金子氏、修自顯流得其奧義矣、十九歲之時、復父之讐、報切害之焉、而心曰、雖父之讐殺害於人、立身不懷心（或曰、非勇士之本意）、則成禪之曹洞派出家号善吉書記、于時天正四丙子年也、案、猶有深意乎、

○善吉成出家、自住于京都大寧寺、修行佛道甚親切也、故深秘學劍術無出自口、人莫知之、然每日未明、掃除庭上終之時、向塵溜持掃於捨、發句詠吟濁江ニウツラン月ノ光哉、思當流之意地焉、其容貌如鬼神、而寺中之僧見無知之、獨善吉之師而且為當寺之住持鈍吉和尚何知之、而當流之不傳于世、永沈沒終歎愁歎斷久矣、案、善吉為出家之後、深秘得劍術之奧義也、然今吟發句思意地者、蓋滿意地于臟腑、故雖秘之、時而不知己發見面目之間、恐有懷殺伐之氣象之譏乎、一日一度令發見此味之時者、其餘時者隱伏胸中、發見也、或又充滿于一身之意地也、故一日一度令發起為己之樂乎、唯此吟發句之

一事、当流不為「沈没」、永傳于薩隅日之三州令繁榮之原也、

○從「天正十六年戊子七月」至「同十二月」、師「東鄉肥前守重位於善吉和尚」修行自顯流焉、重位請學自顯流之初、和尚一見重位、知其豪傑之氣質、故自最初傳打而令悟意地、故重位數月而得之矣、

○和尚傳授当流于重位之時者、居「天寧寺之寮」曰「善吉書記」、年三十一歲也、后成和尚、為「天寧寺四世之住持」也、和尚亦常陸國住人而為「佐竹家之臣士」歟、父祖之姓名亦不詳、

○和尚者悟道之善知識也、故於今衆僧崇敬其德矣、

○文祿三年甲午九月五日遷化于天寧寺、年三十七也、案、

○文祿元年戊午生、至「文祿三」甲午年「纔春秋三十七」、当流之聖師且持「善知識之才德」、如此早世豈不惜哉、臨遷化之時述一句、

透得宗門第一関 齡平安住萬松山

末期振威喝一喝 霹靂聲中閑又閑

是日「末期之一句」、

○重位

弥十郎、藤兵衛尉、肥前守、後剃髮号「重位」、

○永祿四辛酉年誕生、東鄉十左衛門尉入道休伴二男也、然本家東鄉家流成「瀬戸口氏養子」、号「瀬戸口藤兵衛尉」、後改東鄉矣（安世祿記於文祿元年記、載「瀬戸口藤兵衛尉」然自善吉和尚傳授当流之時者、為「号「瀬戸口藤兵衛尉」歟）、

○傳云、重位為人甚恭敬焉、故崇敬實兄越人、仍此風殘于子孫、禮實兄之家厚矣、故世人以實兄之家思嫡家、然皆東鄉家支流而非嫡家云々、

○天正六年戊寅十一月十一日、於「日州高城川原」、義久公義弘公与「大友之大軍」御合戰之時、重位扈從「義久公」師之、是初陣而于時年十八也、此時以有「藥丸寺岐守於武功、賴之為親分」焉、而敵味方之大軍相拮之刻、老州於敵合之間敷「勝負之塩合」、仍重位雖初陣得「首級顯高名」云々、○天正十六戊子年、重位扈從「義久公」在「勤於京都之御旅亭」也、然重位暇日之折、或徘徊御屋敷近邊、令慰「旅邸之心」也、或日自御屋敷「不遠行程」過「寺町」行々至于「禪曹洞宗萬松山天寧寺」焉、住持鈍吉和尚以「老僧之知識」、覽重位之面目、非常人而識「察豪傑之氣質」、偶重位「異余人也」、重位又知「知識慕鈍吉、得閑暇之時者、至此寺而會不及三四度、既如故知旧識」成「古今四方山之物語」至不知日之暮也、重位者既依有「迷」鉢捨流劍術之懃傳之芸、動者及劍術之物語焉、或曰鈍吉謂「重位曰、子学劍術乎、重位曰、然、又曰、名曰何乎、重位曰、号「鉢捨」、又曰、以名考之劍術未也矣（鉢捨之「二字未免」工之文字故也）、住「当寺」出家有「日善吉書記」者、号「自顯」学劍術而極「奥義」僧也、宜「学」之矣、重位悅甚焉、而以「日捨」我流儀「師善吉」可「学」自顯（自顯之「二字者、難察蘊奧之含義理之故也」答之矣、于時鈍吉曰、善吉深秘、然我可見其證拠、以是「可說善吉也」、仍明日未明来「当寺」、重位堅約而明日未明參「鈍吉」、鈍吉使「重位竊登二階座敷、自窓之

透間望之、重位詰於氣、今哉今哉待善吉之來、然見年頃三十歲計、色白長小、高威之強美、自表庭及奧庭、掃除、而至于一階之下塵溜、掃終也、而窺四方、無人之見、欽、則握掃處之簪於捨、吟濁江之殘句、立矣、其眼色如鬼神焉、重位凜如灘、冷水于惣身、而目不能見善吉矣、重位感心不斜、而述厚禮於鈍吉、飯焉、案、鈍吉者善吉之師也、出家之師弟者如父子、然故、善吉於他人者、雖秘自顯、於鈍吉者不可秘、當流之意地也、故鈍吉雖知當流之意地、詳也、而亦為善吉深秘之矣、然感動重位氣質之豪傑勇猛、不覺所洩以之也、而其夜重位參善吉之寮、善吉閑暇而暫及物語、重位謂善吉曰、貴僧者得曰自顯、劍術之奧儀、之旨聞之、願欲學之、善吉答曰、豈何乎、為出家可知、害人之道哉、其面目声決然難因矣、故重位今夜空歸之時、過鈍吉、述此旨、鈍吉曰、善吉秘之甚深、宜尽親切者也、重位諾飯矣、翌夜又參善吉、今夜者持參菓子煮菜類、進善吉、而良久及物語之後、重位謂於善吉曰、貴僧御落着劍術之儀者明白、而無粉焉、其旨憶聽于鈍吉、我又既見貴僧之立姿也、今更不可隱于我、詳言語見真美之心矣、於此善吉知重位豪雄而正美之氣象、且感尽真美之心、而免重位以知自顯流之奧儀矣、於此善吉問重位曰、子為傳處之劍術之名曰何乎、重位答曰、曰鉢捨也、又問其意地、業、形之次第、重位答曰、曰鉢捨者捨鉢素、立太刀、捨待捨、掛明心鏡、敵之機變、捨此三養、此三也、故名曰鉢捨流、先此述此鉢段、而猶意地、業、形之次第、至

極意一々審述之而告善吉、于時善吉日、是津無里古久里之術而不足學焉、曰、津無里古久里者謂相打之芸也、有十者十、百者百勝、敵之流義矣、可教我子矣、然為我出家之身、傳害人道不可不深秘矣、夜更人自寢靜之頃、可來於當寺焉、是善吉、重位初成師弟之誓約之時也、實天正十六年戊子七月之夜而、善吉年三十一、重位年二十八也、于時重位於旅宿所持木刀一本、今夜此木刀持來于爰、竊置身之側、仍重位俄取此木刀、毫忽之間、為試善吉、無一無三打掛善吉、善吉於津取弓折之定木、脫重位立矣、其威如向鬼神之怒也、重位厲頭于地、善吉雖氣味殘、心劍既打、重位之負故也、不能上、惣身如掛冷水而、只須左摩志故、重位投木刀、厚拜禮於善吉、謹嚴重而告以實也、善吉猶感重位器量之大、則演說當流之意地、直教打矣、自爾後重位有得勤仕之暇、必待深更參善吉、師弟互成、仕手打出不知時之移矣、然重位猶稽古之度每雖、何善吉之透、無可打入非太刀之隙、依之重位思、善吉非稽古之時、而及油斷之時如何、當於善吉送來重位之歸、于回廊下有曲隅、而雖白晝暗、或時重位夜更參稽古于善吉之時、隱置木刀于此暗隅矣、既稽古終曉歸之時、如常善吉無何心採手燭、送重位來於曲隅之所、重位忽右之取木刀、實欲打伏善吉、無心打掛、善吉為掛置此邊、取椽梶等振上、叱已者、(其曰和志也字者云)立焉、其神速如雲耀、其威烈自鬼神霹靂、猶強、重位不覺投捨木刀、三間引退拜禮善吉、身之毛与太智奈滿志幾汗出不止、良失揚首之心矣、(此

時善吉左手持「手燭」、右手探「棕招帶」振「上蜻蛉」怒於重位云、案、是當流二字亦有亦空門之味也、善吉之藝傳「神教」而非「發」天真之怒、豈至如斯哉、於是重位如「見明屋」悟道、心開傳善吉之心、令存「在己之心臟」矣、故欲忘而不能忘、而增「長練」熟意地、業于日々夜々、自「深至」深自「速至」速者也矣、而同年冬、重位將「越」于「飯國」之時互惜「名殘」、時重位述「言外之情」于發句曰、

稀ニアフミネニツモレル空ノ雪

返シ

善吉

鳥ソナクフトコロ清キ雪ノヤマ

是日「暇乞」之發句、此發句有「當流」之深意也、此日也實天正十六年戊子十二月十六日也、案、元師長宗翁自「幾弟子」之中得「二代師金子新九郎某翁」一人傳之、某翁亦自「幾弟子」之中得「三代師善吉和尚」一人傳之、是皆盡數年之精神可至此也、而善吉者十九歲遂出家、無有一人之弟子也、夫當流者高上深遠而非「明敏強直」之質、雖得「意地」與「業」不至得「流義」之妙蘊奧、而不能「發起」流義之妙用也、然無學「當流」之詮、表名「自顯」裏與「他流」位同、畏及「相打」或取「後焉」、故長宗翁「金子翁撰」弟子之器、嚴密而傳之為「難所也」、故當時善吉之外雖「初段」二段無傳之人物、況於「三段四段」哉、(案、善吉和尚者金子翁為「末之弟子」無疑者也、於「初弟子善吉」天正四丙子年十九歲而成「出家」、今年天正十六戊子年善吉三十一歲、經年纔至「十三」也、然金子翁猶雖「及天命不惑之齡」、勵「流義」弟子亦人數盛時也、然此時既善吉之外知「當流」之人

物無一人也、以之可考之也、且以之于天下少「豪傑」之士可「識察」也、然善吉至「沒」、當流之「太刀筋」都沈沒將「永斷絕」矣、善吉雖「出家」也得「當流」之妙、豈不「歎」之哉、然不計得「希代」之人物重位一人傳之、故善吉又盡「心心」傳之、故重位自「七月」至「十二月」纔六箇月之間得「當流」高上之「意地」與「業」正傳、不疑而「飯國」矣、此時授「善吉」於重位之傳書三卷也矣、所謂「尊形・問書・察見也」、業數凡傳「四十」、所謂立・双・越・寸・滴・煎・平・安・行・輕・道・真・加・橫指「十三」矣、余者悉表之業也、予此傳以「重位」五世之嫡孫位照與「重位」四世之高弟葉丸長左衛門伴兼慶入道「活慶」正傳之物語「記」之、實正以「疑」也矣、若雖有「他說」後世之英士以此記為「實」、而以「他說」勿「疑」之矣、案、暇乞之發句重位歎「稱善吉」胸中之高上而難「及焉」、善吉亦歎「美重位」器量之深遠、以其心作「發句」纔以「三句十七音」、述「義理明白而無」限余情焉、後世自然補「意地・業」成名句、故「當流」秘此句「処也」、共可「日」不及「庸才」処而已、案、重位於「非豪傑」者、鈍吉不可「洩」之焉、而重位亦以「聞出家」之一語自顯之「二字」、流儀之「林段」識「察高上深遠」矣、斷然既為「惣傳」捨「鉢捨流」不可「起」欲學「自顯」流之心、若難「望」之猶予而應對不及如此矣、豪傑之士者以「一言」知「事理之善惡」、知「善惡」則果「斷」之氣象可「恐」矣、

○愚謂、重位自「窓之透」覽「善吉」帶以「捨吟」濁江之「眼色」如「鬼神」凜、如「澱」冷水于身、不能「覽」二目也、於「愛益知」自顯之尊、起「欲學」之志甚親切也、然又至「成師弟」之約之時、重位不「恐」善吉而忽打「掛木刀」何乎、蓋思「于心」

吟濁江之時、是當流之意地起于善吉之心之時也、及打於不意者如何故至試之、然善吉取定木、脫重位立其威如鬼神、重位屬頭于地、恐懼倍濁江遠矣、故重位弥知當流之高上、盡精力于當流修行焉、然於廊下重位取々木刀、絲忽之間打掛善吉何乎、蓋重位思于心成師弟之約之時者、未聞當流之意地、未習當流之業之時也、於今者聞當流之意地、習當流之業、至今雖善吉有如何疑、為試善吉之不意、又如是、于時善吉掛置此邊、取棕侶箒振上、吐和志也字立焉、其神速如雲輝、其神武如霹靂也、重位不覺捨木刀三間引退、三間引退者、三州之古士對君父師謝過之時、以三間引退乞免許過、為至極法也、拜禮善吉良忘揚首、身之毛立濕汗流矣、於愛實親切得、心當流高上深遠處、限者也、重位不止豪傑之氣象可思計矣、雖凡人用勇猛果敢、如重位致難致之輩者、則豪傑之氣象自是可發起、故善吉之性常好酒也、故謂于重位曰、我死吊、靈可幣酒也、故重位如師命、至子孫亦祭善吉之靈以酒矣、（重位發足於京都、離別于善吉之時、重位對善吉師恩厚遠述、難報謝、愛善吉以是答、不詳）、

○重位販國以後經一二年、自善吉和尚送深秘心底抄一卷、根抵此一卷、而有出數卷之傳書、故、

○天正十六年戊子十二月、重位發足於京都、翌天正十七年己丑正月頃、着於隅州國分之内鳥越之屋敷（此時供奉義久公為飯國欽、不詳）、於京都自善吉得心傳、當流自顯之意地充滿胸中、而雖欲忘之不能忘束之間矣、

然元來無可語、當流意地同門弟者、唯默然思之耳、業亦相手於誰、可為修行乎、幸於屋敷之園中、難抱迴有大柿木、昼無見人擊之、夜者雖雨夜着、蓋立打明之、不握木刀之時者、熟覽傳書思意地、自天正十七年己丑中春頃、至同十九年辛卯、晝夜三年打明於大柿木（此三年不可以三十六ヶ月、只可知年大數也）、得業之妙用矣、柿木為之結枯矣、此時戰國而人々嗜武芸尤盛也、故自然重位之名高而、於三州有志之士無不知修行重位自顯矣、然其器凡庸不思自顯之二字、高慢已傍布心影之類、芸者、或大男大力勇猛之盛風力之輩、立合于重位為試己之業者、多于四方、而立合此等、雖及四十余度、無有向重位者也、元來三州之武士者有、卑下土方他邦之武篇兵術之偏、故打臥重位、傳自上方、自顯流之名、而欲高三州之劍術之名、或於戰場顯武功數、大刀早業之士而、打臥重位、欲高三州之戰術之輩也、然立合重位之士者、豈於三州超越勇猛于衆人不士哉、而今如斯遇重位、無揚首者矣、（立合會與他流、於打臥者、捨己之術、以打己芸者為師、任旧法、被打臥重位之輩皆成重位之門人也、而至今盛風力之勇者大山綱宗之外、無被稱名之人物矣、於林捨流惣伝芸術之士、長谷場伝兵衛尉聞自顯之二字、師重位、盡精神修行之、無程間、桐之葉落、落着當流之溫興焉、稱當流五高弟之隨一耳矣、且長谷場傳兵衛尉、篠原傳内以下多弟子、立合諸流、打臥達芸、又若干也、於于此自顯流之名益高于三州矣、如是經歲霜、既十七年

至慶長九年甲辰春、于時三州之太守少將忠恒公御年二十九、壯年之勇將而殊從以前好劍術、御師範東新之丞（又号小太郎）、無昼夜之界、執行鉢捨流、既得上達而殆崇敬此流矣、然同年二月、御家老平田太郎左衛門尉增宗（誅、增宗、慶長十五年也）告公以重位得号自顯流劍術之妙用焉、於此、公召重位（此時猶居住于国分）於本御内御城（此御城跡今号大龍寺屋形、当上之山御館者慶長七年御繩張、同九年甲辰三月自本御内城、御移徙上之山城、然慶長九年二月迄居本御内矣、○案、當時戰國而專吟味武術之時也、然重位如斯今於本朝、無并劍術之名、人、居義久公御城下、立合于四方四十六度、其名雖震于三州、不見十六年之間、至是初達貴聽焉、非望名利、求便者、知国君可知難也、況乎不合于時、儒學之類而、不求名利、雖正言行于草庵、一生潛龍而終豈不尤哉、於小板屋（案、光久公以前者有大奥有表耳也、而雖無今之奥小板屋者如今之奥相似）使新之丞与重位立合、上覽芸之勝劣（日者不伝也、立合之時刻者朝辰之中刻則五時也）、新之丞者依為御師範、兼日誇御寵遇、今日衣服等用華美、驕慢焉（伝云、著羽三重之小袖、縹子肩衣袴云々）、重位者著淡染布子上布上下云々、列公之側、武功勇壯之勤士、眼見開詰、氣望重位之業、重位參小板屋致立合之砌、至左良左良立合之席、握木刀於横指、脱新之丞立不動矣、新之丞者握木刀於無一劍掛于重位、既雖及打尺、重位猶不動矣、新之丞於是為持掛振上無一劍之木刀、將強打込于重位、切出之形見不見之間、

有必至必至之声、勤士之輩見、歸重位之木刀于未来之徑、新之丞、匍匐、匍匐、木刀折二、柄者落于疊、身者穿御障子、飛入于御泉水、新之丞良暫不能揚首止矣、而後新之丞手見麻痺、重位之木刀知当左切右切、折以木刀之処、知丁于鐔涯、而各重位之業如稻妻不掛于目之感、神速矣、而重位者提木刀、佐羅佐羅退去御前、數間而畏焉、公者不與而入御座之間也（御座者則奥也、今之大奥也、此時代常居奥、但御殿狭而甚程近）、重位自小板屋退控之容貌安閑莫異平日、公御覽重位打臥於御師匠新之丞、無造作而安閑、生憤怒、御自身可有御立合之旨被命、召重位於奥、故重位參奥畏末席之処、公御憤怒之余、以御手打為打果重位、御攬御腰物、烈声曰、藤兵衛是木刀持來、是木刀持來、召重位于御座之間、再三之嚴命也、故重位不得止持木刀、參上御座之間於末（或說、重位不持木刀、參上、仍木刀投掛于重位、拔御腰物、向于重位云）、于時、公御拔御腰物、向重位、重位取木刀於捨、謂和上者脱、公立不動矣、其眼色如鬼神、公不覺御體身縮御尊林、退立御座之間、角曰、不知主人、於愛重位引退三間、奉拜禮、公為畏敬、至厚矣、而不覺流儀之意地、奉忘却御主君之段述之焉、公於愛美見重位芸術之勝、御感誠深而察、当流之向上、則以重位、永定御劍術之御師範、祝之御銚子被召上、忝小君御杓賜御土器于重位、（小君則義久公御三女、俗号国分御上様是也、今之世或此時疑小君之御杓焉、是忠恒公之御心中与時世之礼式、

為不知之而御夫婦之間聞御不快事、故催此疑也、然及御不快、自慶長十三四以來之事而、此時迄者御夫婦之間甚快然也、案、戰國之婦人者替夫人守城、或與敵有戰、故戰國之婦人雖庸夫無嗜武術也、況覺於婦君蓋亦小君可傳初段一段焉、小君在國分雖及御老年不離御身、御腰物大小與當流之木刀一結以為被召置可見之也、於重位弟子本田親純妻知當流之意地、近代黑葛原可山妻知打、以此等戰國之可知風俗矣、故實崇敬於事時者、使妻取杓祝之常之礼式矣、且使御褒美以氏房作御脇指頂戴于重位、(無銘而有八幡大菩薩之切文守、長一尺五八寸)蓋今日奉傳授當流之打與意地(而後退)出御館矣、爾來公晝夜脩行當流、心傳自顯意地、業之與義矣、重位成立合至今東氏、四十七度也、案、與主君之御師匠及立合強擊出血或及絕子如何、於御前可強過乎、重位此立合如此不可謂得中焉、後世至善吉、重位之地位聖師者可為規範者歟、重位奉對公者為俾勳木刀、自然二字亦有空門之味出、故公不進業而至呼不知主人矣、善吉、重位其機一而至學當流學士、可識得尤猶重位傳神教、堯天真之怒實理者也矣、此立合之終始當流為繁榮長久之原也、故密始末而記之也矣、實慶長九甲申歲二月某日朝辰之中刻而、公御年二十九、重位年四十四也、(東新之丞者奉始、公御國一統之雖師範、立合於重位被打臥于重位之后、難居於鹿兒島移于福山、凡半年計居于此所、其後亦移于莊內、居凡三年計、其後出他

國也、居于福山之時有弟子、故舁捨流伝福山云々、東氏者元來肥後之住士也、而來于蒲生居住焉、舁捨之上手也、故忠恒公召鹿兒島命御師範矣、東氏之師者肥者肥後國住人丸目藏人入道鉄斎也、

○忠恒公慶長九年甲辰三月、從本御内城御館、當御移徙上之山御館之碩、公適以御出、撰上下之士可參稽古寄宣之地、使重位居屋敷拜領之矣、(今御城二之丸下去東三町、今小松氏之宅地是也)、仍重位去、國分鄉島越屋敷、來于鹿兒島居住此拜領之宅地者也、

○家久公拊脇差之時、以御書問寸尺于重位也、有言上曰、當流脇差之長以一尺三寸為法也、公仍雖有一尺五寸、貞宗銘之寶刀、摺上于一尺三寸拊之矣、重位就流義、從義久公、義弘公度々蒙御懇之御意且頂戴御筆者也、

○義弘公召重位于御前賜玉盃曰、忠恒公修行自顯流之後平日之御行狀亦進于善、仍甚思召御満足也、以來猶以宜致出精御指南之由有命、來國光作賜九寸五分之寶刀矣、述重位謹而謝頂戴寶刀宜盡臣之精神之旨退出矣、

○家久公(忠恒公慶長十一年丙午六月十七日、改家久公也)節々御入重位宅有之、統光久公亦節々御入重位宅有之也、

○家久公御代、正月二日御稽古初有之、依命重位致同道諸弟子登城焉、公自被遊御詰、稽古始相濟之後實之、進御銚子而賜御土器於重位、賜御通於諸弟子矣、

而後各賈之爲「下城」也（綱久公御代迄如斯也與云云）
○家久公命「重位」曰、正月五日汝宅「稽古初相濟之時者可揚」
「夷雄之聲」於「御城」聞此聲、只今知爲「稽古初之首尾」
能相濟、可有「御安心」也、故師家代々連綿用之、至今
不廢者也、或曰、公者「稽古初之日被遊御正服御座」
於「殿重焉」稽古初濟之後、重位持「參稽古初御祝義御樽者」
登城、奉進上之矣、每御機嫌甚快然、蒙「御懇之尊」
意頂戴御益爲「御暇」也云々、爲「御家被建立御稽古所」
故如此也、

○家久公畏「重位」於尊命焉、盡精神「褒美教導弟子」繁榮
流義、賜御高千石于重位矣、然重位頂戴四百石爲己之
領地、殘六百斛者述過分之由、以奉返上也（伝曰、重位
此時頂戴四百石者、美兄東郷十左衛門此時領四百斛、故
重位領地不欲超「美兄」及此）

○家久公使「重位」免受領名、稱「肥前守」（稱「肥前守」元和年
間也、於「江戸」至「寛永」以後、以「藤兵衛尉」稱「重位」、響者
初名猶聞東上方高爲本ノマ、補坊泊之地頭職者也、家
久公令「拜領長門・和泉・肥前之三受領名、自此三之內」
從好嫡々可名乘之命也、故重位号「肥前守」、而隱居之後
此名讓「重方」矣、

○重位翁告于當流門弟子輩曰、刀之長可用二尺三寸也、
至一尺五寸猶善也、脇差者可用一尺三寸至一尺五寸
者猶善也、過之者非達者者、或遇急事之時者、有不
應業矣、故當流之字士以此寸定當流定指之寸尺矣、
然延尺可因其器量也、

○家久公、夏之頃於「加治木」（加治木者、家久公御二男島津
兵庫頭忠朗領地）令成「重位」於油斷、爲「御試」、公新出
浴室、召「御湯衣、隱置木刀御後」召「重位」於打尺、仍重位
無憚「御前蹲踞俯行進奉」近三四尺計之時忽打掛木刀、
重位以「琉球扇子」打右之御手首御拳、又退三間、奉「畏敬」
述過如例、時、公以「味之勝」御感不斜矣、而御手忽腫
無出入御袖口至痛甚、然猶御歎賞不止也、至此
公尊崇當流之厚可知也、此時之御愛妾鎌田播磨政重娘、
取膏藥之藥奉介抱、無程御平愈也云々（政重娘者御子
兵庫頭忠朗・市正・忠弘以下御男子五人、女子四人之懷也、
然古老物語者以曰萬山之御懷考之、產忠弘入道萬山
懷之、元和六七年頃爲「御試」歟、不詳年月矣、

○家久公或年御上洛、山州伏見川御登之時、公者召小船
先御召船諸御供船、并進淀川、仍小船重位并本郷伊予
守義則付御船頭一人・小者一人乘之処、有子細御船頭
切流加藤肥後守忠廣（或曰忠廣之父主計頭清正）家土
川船之引綱之時、加藤之家士持拔刀、引寄御船岸邊
忽爲「及危難焉、然彼家士等窺公之武烈、見重位義則
之剛強之氣象、忽消失怨怒暴惡之心矣、而屬無事」（事
詳「夷略錄」故略于爰）、此時重位帶細身之九寸五分一本
矣（則頂戴義弘公所之九寸五分也）、而今夜於伏見御
邸、催八月十五夜月見之宴焉、召重位有御意曰、重
位事於當流落着者雖非有御疑、及聞數十人之敵
九寸五分之業如何不離御念遣、仍以御秘藏之大業物關
押定御脇差（長一尺六寸計）賜之旨有貴命而令頂戴之

之故、重位頂戴之後不離身帶之者也（隱居剃髮之後是讓嫡子重方、復帶九寸五分云）、重位某盤割之時用此脇差也（某盤割事詳喫緊錄）、此一儀又年号不詳（案、寬永三年丙辰八月十九日、公在於洛中任權中納言叙從三位、依之考之、同月十五日奔於淀川着伏見、今夜催月見之宴歟）、

○元和八年壬戌春之頃、重位在勤王江戸、于時將軍家光公於御旗本有柳生流劍術上手之聞、福町七郎左衛門尉・寺田少助兩士度々雖望立合于重位、以為將軍家昵近衆、遠慮重位辭退、及再三猶強乞立合、故以御家老伊勢兵部少輔貞昌（或曰比志島宮内少輔國隆）窺公之處、以有免許、或曰於重位旅宿（重位旅宿平屋也）立合與兩士矣、兩士之木刀少不出、而重位容易打伏兩士不能揚首而矣止也、故兩士大感心於當流成師弟之誓約為誓詞血判、而後厚礼歸矣、福町氏者重位木刀強于胸、故折胸之骨三以呼吸之息扇胸之皮焉、重位體正見之、於重位之心中雖痛之、於福町氏猶勇壯而面色不衰、於爰流石重位殆感其武勇云々、然福町氏者歸于宿所其夜痛死矣（或三日目曰死矣）、于時重位年六十二、至此重位為立合四十八度也、而是立合之終也、福町・寺田氏之兩士者、家光公御師範心影流上手柳生飛彈守宗頼一二之高弟而近仕家光公、常致御打出隨一之輩也云傳者也（師曰、此兩士誓詞宛書者有東鄉肥前殿、又曰、血判經年及久遠消失血色者也、兩士之血判位照幼君之頃健見血判之跡、然及今血判

之色悉變云々、位照翁聞之、明和之初頃翁七十有余之言語也）、重位者其夜依命則發足江戸、急々使下向御国矣、是使當流不洩于他家為也、故其後御參勤不召列御供焉、寺田氏者鬱憤打臥于重位、閑居一室斷飲食數日、后因諫妻女追於重位至大坂焉、既成乘船故不為對面空滯云々（此一件又詳喫緊錄機月意地、仍而略之）、

○將軍家光公盛好劍術自諸国召劍術者之時召重位、然家久公以既死去言上矣、

○家久公有嚴命于重位曰、門人之内業雖勝、非為秀有正實之士者不可傳打、於總傳可蒙御免也、至家來其心正道而勝業深、志者於有之可有傳方也、至町人者一切不傳打者也、

○依君名勲上意打不可勝數矣、多知於世処也、故略于此、

○依家久公命、於甲斐川原誅上意打於橋口小藤太時、同役鎌田左京頼打初太刀于重位矣、仍重位隔一丈余相也、既左京出來、向于橋口謂上意掛手于柄徑、橋口早拔出鯉口五寸、仍重位自隔一丈余之所撈布之拔打而不掛、橋口氏之膺之迎一打切離、橋口氏成二磨呂遍里也、此刀者今度賜處之則光也、長一尺六寸、言上為切之勝公、故公稱美則光令返上矣、用傍布之拔打有傳也、此時重位既曰老年矣、然不詳歲月也、

○功成名遂身退天之道也、重位年既老而嫡子重方芸均重位矣、故奉願辭家督讓諸弟子中之指南於嫡子重方、

家久公免之、仍重位隱居爲剃髮号重位、此時自
久公爲隱居料賜高百石、且自以前命納殿役動仕
于奥焉（此時代太守公常在干奥、故納殿役動仕太守
左右、勤表奥之御取次近習第一之役柄而、不小身者
多兼補地頭職矣也）、然因剃髮之姿、止大小又例帶
九寸五分一本也（因帶九寸五分一本、高第大野正右衛
門尉有懇切之詔、略于此）、

○当流之意地・業高妙而有伝書幾聞書・察見二卷耳（手次
之尊形者只目錄且伝事之證文也、案、於本家有別卷之
秘書狀、免弟子此分也）、而此聞書・察見之二卷者文字
少而意地玄妙矣也、雖有學才俄難通焉、況於庸才哉
故至末世恐意地艱難陷傍布、故重位編集十卷之伝書、
加于一卷爲十三卷之伝書、使後生不惑于意地矣、
所謂尊形・燕飛書・聴書・察見・聴書抄上卷・中卷・下卷
（是曰三卷書）、直之書・切紙問答・御戸之欲・共尊和・
重位伊呂波歌也、且自長宗翁伝勉之表稽古之業數二十六
品也、重位加燕秘・蜻蛉捨・蜻蛉初手打・長寸之振掛・
長寸之越・振掛長寸・七打振掛之中品合三十三也（案、
重位押広表業增加七品、精審伝書、增益卷數者元和
之末寛永之初歟）、

○慶長・元和之頃、猶武道盛而當時之武士就武方得覺急
也、家久公深秘当流、故号自顯流及久遠者免起
豪傑、聞自顯之二字以恐于当流之意地矣、故因博字
之僧于文之和尚（濟家宗出家、住持大龍寺、既定四書訓
点）使改名号撰文字、仍文字於觀世音菩薩普門品第

二十五經文内撰示現神通力之一句、自此一句取示現
二字以窺公之処、公善之、重位亦善之、故改自
顯爲示現流矣也（案、示現之二字、弟子請師之教示
自顯通神力顯心光文字、而全教法自他流又雖窺
当流通奥之位名、而且以同音之唱改之所也）、仍伝書
皆用示現者也、案、雖君公改流義之名号者至重処也
矣、家久公爲御家永尊崇当流、故名又改之如此也、仍
重位雖臨老、尽精神難令通開示伝書業加、難令
達之令熟業、故当流充滿于三州、御代々君公連綿尊
崇之至于此、満家久公之御厚志也、然当流者御
当家流劍術而曰預東郷氏可乎、

○或時重位編伝書之時、自昼始而入于夜、高第一二輩
侍於側雖明其夜不知其明、又其日雖入于夜不知
知夜、又其夜雖明不知明、又其日雖入于夜不知夜
矣、然其夜伝書卷成而明焉、於此日各知夜之明、而初
消燈開室戸出焉、実思明夜一夜、而不知謂明夜
三夜矣、蓋昼夜五日之間、室戸閉明燈心師弟四居而吟味
著述当流之意地文字、飢食渴飲而美如不重昼夜焉
適雖出戸外望昼天、思意地向敵之心也、故心不
通爲於書者歟、夫編集伝書者以君命著述味之蘊
奥也、故於此時弟子不能面談、況於家人哉、案、
重位爲後世欲著述伝書、至考意地發出于意地胸中
如流水而不止矣、体氣亦快然不倦者也、兩日而夜不
知昼夜者雖及數度、及昼夜五日而不知昼夜之界
者一度也云、是編集何之伝書之時歟、如是尽精神之

書也、然今之學士見之粗略而不尽心力焉尤也、不通當流之意地矣、案、為編集伝書思意地如是、況取木刀於向、打出之氣象哉、況取太刀於向敵之氣象哉、可思計之、噫嘻強明哉重位之氣質、噫盡心於當流哉重位之精神矣、愚謂、重位案非不并晝夜也、不成就一事者不止之氣象、可知如是也、

○重位及四十七度成立合、其相手之士者、大半以一劍術之流義鳴于世士也、而此輩皆成重位之弟子、學當流、故外之劍術自然衰廢、立一流之名、無有集弟子之家矣、然猶家久公以御深慮、令除無用之劍術矣、故於御城下之諸士者、一學當流而猶更無有他流也、

○重位者雖得寸之打、於稽古之時、重位之木刀無深掛、而大概以切先一二寸、打於太刀、鑢、長刀之出頭、妙也、而當所無、日不折也、以木刀先五六分當之、當處之打出之木刀類必以鑢如穿而為欠失、是等誠妙而非及、処言語云矣、(案、是辟易重位之威、打出之業不出為也)、

○古老曰、重位翁於居間有窓、明有三寸、而打一寸角之格子焉、然重位入木刀此明三寸之處、曳声掛一者格子一本折、曳々掛二声、格子二本折、曳々々掛三声、者格子三本折矣、此等妙也云々、

○重位及老蚌之後、成稽古甚希也、而來、何日謂為重位稽古時者、非高弟賢位之弟子、當其日稱否、無出其日之稽古云矣、是取重位於木刀、其顏色真之如生幽靈鬼神、声音如迅雷、而漂身之毛与太地心殆恐懼故也、以之案、後世之學士雖如慕重位、然重位再來必為難出、

其稽古之席乎、

○重位之資質恭敬人焉、故雖及弟子數百人、對之無闕略於礼義也、殊來于稽古弟子雖幼若、為退出必送之至于玄關而矣、五人十人離々雖退出有遲速、一々如是無略也、故弟子非異有急事者無退出、而稽古終之時皆一同述礼為退出云々、(以此一事、當世之礼義士風、可察正矣)、

○家久公、以重位之容貌令画像于狩野家、使重位詠歌流義之意地、公書此詠歌于画像之側、而是賜于重位命曰、是製掛物、每年々頭稽古初之日掛之、可使無窮之諸弟子拜之也矣、故重位於摘流永々如尊命者也、其詠歌曰、

天地ヲ吹ハカツ風ニ置露ノ色見シマソ我安ナル

○重位者、骨太、長余于鴨居、大男、眼小而光強、眉毛黑、角面、天庭広、顔色赤、頤骨張、口大而紅鬚髭多、胸手足之毛亦多而毛筋太、体直而胸之辺少如掛手前、足少外鴨而常之步行貌如重足、步足之運自人並遲云伝、而從若年之時為立腹者、必手足之毛立而如針金矣、元來其氣質非常人云伝矣、落着當流之后、其眼色容貌可察之也、

重位自居住于国分之時、於看經所為座禪之夜者、必來狐狸、寝于重位之膝下、明夜歸原野焉、重位見之如犬猫、隣所老若為希代之一事云々、

○重位年十八、六月十六夜、立待於月祈一事之願之時、以強守氣魂祈誓之云々、重位常謂于人曰、雖聽

明氣魂為衰微不能成事也、雖氣質不敏氣魂強盛而不為退屈于心身者、無不成就事矣、重位者自若年之昔、慎飲食、壯堅臟腑矣、救一世氣根強盛、而任于心、雖勵勤事業、精力無勞役不倦事也、故當流之外多成、就事、嗜歌道、傳古今和歌集三鳥三木之秘訣、点茶之湯、窮奧儀、尤以為戰國之武士、達御家之戰法、弓馬鉄砲之芸、鎗薙刀之草藥矣、猶有得寸暇、好寫書籍、及重位一世之寫本、太本之卷冊千余本云々

（重位不學當流之以前、嗜技藝多、既得組打及鎌之手之緣、弟子多而於此弟子之內、有免許與義、故或有伝其伝書之家矣、）

○重位者信仰廿六夜之月、每月待之焉、而實待出月之間、使重方与藥丸兼陳於稽古、然雖兩賢及子之刻以後、閉陰氣不寒業而温矣、于時重位一成稽古而補陽氣、兩賢望之、如夜明向東日、忽散陰閉之氣、業及如白日矣、如此數年而後、兩賢之業大長至、無晝夜之分焉、閉陰氣又非名人不知如之位也云々、

○重位、於當流是譬山岳者、全備嶽中麓矣、然重位者以高嶽為過高不居之、以麓為過卑不居之焉、以嶽与麓之中居之矣、故弟子雖明敏魯直之資質、皆得有因學當流之便、仍重位因弟子器量之高卑、導之、故進意地弟子殆多云々、

○重位曰、當流氣質上品之弟子者烈過有不乘數、下品者雖示意地有不通、故中品為第一矣（愚云、上品者專意地略業之有過缺、案、聖賢之道、從周后礼樂六

芸之業、而只殘道義耳、故終不行聖人之道于天下矣、況於一技能哉、不至全與之業者、意地因何為免矣、

○重位至臨于極老、常語曰、昔思出見善吉和尚之立姿者、每凛然身之毛立、冷水如澌、慙身、雖盛暑如當寒風矣、而此一儀存、在於胸中、不能断然也、案、經歲月及久遠者、痛傷恐怖之情衰也、常人之常也、然重位及極老、歎賞善吉之立姿、熟思至此、可知其人品之高矣、

○重位置木刀于左右、常握之思、意地、此木刀当指処、以擊如握大及達也矣、是曰握木刀也、

○寛永二十年癸亥六月、痛哉、重位羅老病之難治焉、而予知死日、則斥廿六日、而如其言、及廿六日、甚瘦矣、然廿六日、光久公聞召難平愈、重位老病、為御暇乞御成于重位之宅也、重位雖大、切病、腦為成、行水月代正服、然不能步行、仍拘出、授席于御前、而御目見、至蒙御懇篤之貴命焉、今日重位動不殘奉、傳授當流之繼與、公落着當流之意地焉、重位奉存、公之御恩之忝、余為如其形見、奉進上信國之脇差矣、重位可確平見精神也、而不待於明日、知没命、詠辭世之発句、

ケフノクレ風マツ露ノマカキ哉

○其夜之深更、終為結跏趺坐、而没矣、則六月廿七日之曉也、年八十三、法諱号能學俊芸庵主、葬南林寺殿、

○家久公每日嚴命重位曰、尽精力於示現流、使是繁昌于御家中、為御家致忠義之第一也、故重位及臨終、猶以此嚴命、遺命嫡子重方、嫡孫重利矣、

○重位及病中出青黃赤白黑之鮮首多矣、故非器量之弟子者、不能參看病也、是為國命、殺害人多、為流義痛傷人、多故歟、希有之次第也云々、

○家久公

公脩行於當流、盡御精神次第、御信心之功效、見重位請中井喫緊錄、仍奉略于是者也、

○光久公

○重方

藤兵衛 後号肥前

○慶長十二子未年誕生(案、重方生年重位年四十七也、重位没年重方年三十七)、

○古老伝云、重位翁作燕飛之時、重方年十八也、而評之曰善行、燕飛業者當流從是可盛焉、學之誤者當流從是可衰矣、而難捨被之鉢、重位善從之云々、

○重位翁曰、予芸者數年來之間、依稽古林捨流之小芸、広大於業、如不及于重方焉、重方生而示現流也、宜學重方之業矣、

○案、重方者勇猛果斷之氣質也、故發見當流悟道・業・意地之蘊奥、處至烈矣、

○重方曰、于野于山有當流之味云々、

○重方曰、臨立合擊之者未也、不擊有不使敵之首上之意地矣(重方以有名人之名、為見立姿乞立合雖多劍術・槍術、皆不及動戈而為平臥兮)、

○重方講傳書之時、必含其意地于胸中、出于其席、其面

色如鬼神、而聽聞之弟子不能揚首矣、

○重方翁之時、門弟中誘曰、雷神与重方翁之木刀者、落于何処、當于何処不知故怒令、重方翁稽古之時者大半殘意地、而使門弟子尽打出之業也、故弟子鎗・長刀、長木刀早捨尽、精力雖打出矣、然無不當其透焉、十二打応變出、而人不知之也、案、普賢毛孔出山河之教法也、

○重位之高弟葉元兼陳謂重方曰、當流者高上也、故非上品之氣質者難落着焉、重方答之曰、如此者非一術也、雖下品之氣質、親切執行之、無不為上達也、是當流一之術為也、案、師弟之語以仕手之位述之、故其語共有適當焉(愚謂、重位之語者戒上品之過也、重方之語者進下品之惰之訓也、故表雖齟齬、要之其趣一也)、

○古老曰、重方者資稟高上而芸亦高矣、故雖謙猶如居山嶽之不免有氣象也、仍弟子或過或不及、而使弟子至當流之蘊奥、終不及重位云々、

○又曰、重方者鎗留之時、雖上段之鎗、木刀真堅打合于鎗柄、其形打属描摹、不令動鎗如雜属也、當時至此重方人而妙也、且重方芸長及不借目匡、夜消灯兼陳二人留鎗・長刀焉、自初重方千百無不留也、兼陳者初自十度之内、未及一二度之時、或有不留、然積闇夜之稽古之后、兩賢無勝劣云々、

○又曰、重位於當流一無欠皆秀衆矣、重方者意地・業講義雖同位于重位、導形・画・木刀削不及重位云、

○重方者、強固鯉口、採鞘雖振身、如不拔帶之云々

○重方者、明老莊之學、通五音、能閉塞、秀開田勸農之才、今世人知歟、故詳不記矣、(重方開新田三萬四千石余、仍為御褒美、賜御高二百石矣)、重方依願蒙光久公免許、建立龍學寺、安置善書、重位之位碑於當寺也、

○重方或曰雨天之後、行道路以溜水之故、行左之屏庭、然自後右之方呼肥前殿肥前殿、其所又以有溜水行過於爰、可省左直至地面、而立向左直成、必答焉、或人問之、重方曰、守歌法而已云々、雖一言一動慎教法、可見矣、

○重方者於龍學寺之近隣有宅地焉、自四十余歲之時、讓當流之師範于重利、問居于此矣、

○重方之時、於攝州大坂有三線彈之名人矣、世人以稱名人矣、其身亦思名人也、然彈我三線令聞名人芸之人、其人以稱名人可定我芸之位思矣、而求之不得久矣、或年來肥前長崎、是長崎者以群衆和漢外國之人之地也、然無有芸能之名人也、於于爰於薩州号劍術者東鄉肥前、間有名人焉、故來薩州求旅邸于下町、求使己之芸聞重方之耳之便、今重方者有千石之勢、因富家自下町有出入于重方宅、達所帶方之用町人、而蒙重方之恩者也、此者望重方之來駕于己之宅有年矣、故一日重方任望行于彼亭、仍饗、應重方、盡山海之珍味、于時三線彈聞之、因亭主切願彈三線聞重方之耳焉、亭主肯之、故今日來控于此而待時宜、然座興半而日既為晚、仍亭主肯重方以是、重方免之、仍於次之間成調、纔及一二撥之刻、重方

聞之謂亭主曰、是者天下之名人也、曰不及聞一曲呼駕立座、時三線彈不覺躍、躍出重方之目通、御聞知我之芸以名人免之、謂忝三拜重方、今重方汝者曰三線彈名人則乘駕歸矣、古老雖云此物語、重方則立於座不知婦之心也、案、重方之心者常光明而不曇也、然三線者婦聲也、以名人之故、重方之心亦為如為曇也、故聞一二撥、徑立於座、婦勉也、此義明白而無疑者也、為重方也慎如此可見芸之高焉、

○万治二年己亥八月七死、年五十三、法名雄山州英庵主、葬南林寺殿、

○長谷場傳兵衛尉

○長年于重位翁一二歲、初修行鉢捨流、既為上手焉、伝重位翁於當流為婦國之後、聞号當流之名天真正自願流、而察勝于鉢捨、捨鉢捨流師重位修行當流矣、長谷場氏者強明之資稟也、故疾伝打及示意地、聞桐之葉落之一首悟道當流之意地、終至雲耀之業矣、

○或時、大山三綱宗來重位翁之宅、欲見弟子之稽古、重位免之、仍綱宗寸刃立置床之上、居高座、驕慢已之勇猛、見稽古之鉢頭為嘲、睨于心之面色、長谷場氏見之曰、雖重位不居于此、不立役長財棒立置床、居高座見稽古無礼也、下座慙慙而可見稽古矣、綱宗聞曰不立役長財棒、大怒躍出庭上、拔寸刃乞立合、大山綱宗者雖盛風力、大勇大力而早業既至、絲忽之位、故綱宗髮立成血眼、吹青武員振三尺有余真劍、其氣色如夜叉明、然長谷場氏及兩度無造作打臥、後

度者及「絶子」(此奇足打勉当流之秘訣也)、自是長谷場氏名高于当世、被称至于今焉、是綱宗於三州古今希以大勇力士也、

○本家並古老伝云、長谷場氏至為「稽古」者、使「人心寂寞」靜專也、雖「白昼」衆人出席之稽古場、長谷場氏一篇稽古者「人心忽至」如「座」深夜幽谷、唯聞「高山之松風」矣、如是使「人心令感化」也、豈鬼神不恐之哉(案、長谷場氏其資質蓋沈勇也、故見其意地至如是)、

○慶長四年己亥十二月八日、床内安永合戰之時、長谷場氏一人切「入于敵軍中」、切落鎧之預首如「弘」蘆葉而、其勳如「鬼神」、向于長谷場氏之敵忽為「長谷場氏」無不殺焉、雖持「砲弓」之敵速逃去其場、遠隔間隔「筒先・矢先」射「長谷場氏」如急雨、故長谷場氏為「矢玉」終戰死、年四十歲、又四十一歲歿、豈不惜哉、如此表「当流之業」、沒命名于後世、又天命歟、

○篠原傳内

○篠原氏者為「勝明敏豪雄」之氣質也、故自「修行当流」之始「忘生死之界」而向于打出故、無為「打出于篠原氏」士焉、故重位賴「長谷場氏」常令「成打出」矣、而十六歲之時「伝」打「示」意地之時、聞「四序之初汀江放船」、則悟「当流之蘊奧」、業至「雲羅」速也、十九歲之時、雨天之朝為「通路」岩崎口处、忽躍起「數十人之伏襲」自前後切掛、其勳如「鬼神」大半切臥之、故恐懼悉北去焉、雖持「弓」雖不能引又逃去矣、然起「後薄家部之中」、雖計「篠原氏」手本無透、自後持「長刀」、一波根波「根篠原氏」之背、不能波

奴留「一波根」而逃去兮、雖然依為「深于」而自是不進業、杖「刀」立而、喜多奈者共叫「与連与連」、其声如「雷声」、故雖不能見、後而北去矣、篠原氏立俟而沒也、故世人至今曰「篠原氏」之立往生「歎美之」矣(古老曰、篠原氏宅冷水也、今夜宿「号」別府小三郎「美少男」之岩崎之家、夜明飯之時也、冬天雨降、伝内着「大広袖」踏「高木履」冠「竹皮笠」帶「三尺三寸刀」也、前年於「都之城」伊集院幸侃家中之若士立合悉打臥、自頂令「飛血」属「天井」矣、為「散」比遺恨「成」讎也、慶長二三年之頃云々)、噫、当流之高弟而不幸短命哉、使「当流」士「永淚滴」中矣、

○本家并古老伝云、篠原氏之稽古者使「人心活発弘毅」也、深更雖至「乏」人心之時、一篇為「稽古」者忽吹「來大風」如「折松柏」之令「生氣象」矣、如是使「人心令感化」已之雄雲之驗、嗚呼至哉(案、篠原氏者其資質蓋勇猛也、故見意地「処至」如是)、

○大山三次綱宗

○立合与長谷場氏「於」被打臥「察」当流之勝、其日則改寸短刀「持」參兩種「謝」失礼、師「重位」修行当流也、然氣質過「強烈」而不「乘于教法」云々、古老曰、綱宗者三州第一之勇猛而大男大力也、故御城下之若士羨之、為「耗」綱宗猛氣之勝万人、夜中令「怒谷山第一之人突牛」、以「船之綱閉」属綱宗之門、及「夜之明頃」急々呼起綱宗、使「綱宗開門」之戸、故怒牛進欲突綱宗、綱宗押「多良之鐔」吐牛睨矣、牛恐之折「前膝」兮、從是勇猛之名奮于三州、泗川新塞之時、綱宗一人切「入大軍中」、敵恐「綱宗

之勇敢開闢、故綱宗向先知「行路而縱橫切廻、切落首無際限、故以綱宗今日之為首重焉、以之可察資質勇烈早業也、惜乎、有子細、守義輕死、慶長五年庚子八月廿二日於大坂切腹、年廿七(大山綱介幸綱之弟也、天正二年生、法名勇情誠忠居士、御家武功衆四十三人之一人也、在陣于朝鮮國七年也)、

川上因幡守久國

○久國者重位翁惣伝之弟子也、位照丈曰、久國著述伝書四十卷也、而於其書中曰、当流者長宗翁自「心影流之内」為考出「流也、以名人考出、其雲勝于他流」遠矣、是一言当流之本原既誤也、不知「当流之意地」故也、且書載善吉和尚之弟子數千人有之於其中、勝重位翁一人于衆弟子、故得為惣伝也矣、將軍家光公勝好劍術矣、故自諸國召名劍術者也、雖然、皆心影流而無有超于柳生家者矣、於有善吉之弟子數千人、雖未及于重位、豈無次于重位之弟子乎、而彼必召於出者、打臥柳生家無疑者也、然皆心影流而為非「示現流、無至是者也、是重位如家伝、善吉之弟子知為重位一人證拠也、久國考誤事跡甚也云々、愚謂、久國者、家久公御家老而、雖有預國政之才且數年在陣于朝鮮國、馴於戰術、於「当流」不能拔于衆、何得惣伝哉不審矣、

伊勢兵部貞昭

○貞昭者、家久公拾四男也、然為伊勢兵部少輔貞昌養子、此時御子以下雖一人、無不學「当流」矣、然貞昭一人於

今有「名于当流」、仍其雲知「秀于余人、故羅之、

●木場鍊之助(木場氏系因藤原姓滿生氏族、初実名貞往、慶

長十七年八月十六日生、寛永廿年癸未二月、

於江戸光久公拜賜忠之字、是以鍛冶鳴四故也、

仍忠往天和三癸亥三月十一日卒、天運清參居

士、年七十二才)

○木場氏者業達者之上手也、重方者得「滿之打」、然木場氏或時打「出旦捨于重方、時重方翁以式之寸留之、以此一事可察木場氏業之勝也(木場氏者刀鍛冶也、是亦上手也、古老曰、木場氏五月之頃、着「アカ子染之チハン」、帶者用「芭蕉之紐」、於鍛冶屋成細工、于時西郷八戸左衛門帶三尺三寸之刀而來于此、乍差寸刃成物語、故障木場氏出入焉、因鉄之助所持以鐵、曰不立于役長財棒打「切目」是、擊寸刃之鞘末、西郷大怒曰「來鉄之助、於鍛冶屋戸口涯振三尺三寸甚急而、立其所梅之下枝払之、散梅果如雨焉、鉄之助以鐵留之、如古奈須三子童矣、其外留鎗長刀之成、無造作之名高而於今多知世人歟、仍略于此)、

久國家來藤井四郎兵衛

○夷川辺衆中、奉「公于久國、終殉重方于久國」矣、当流上手而數被「歎美重方之打手也(工夫記、詳業之部、仍略于此)、

古老曰、藤井者殉「死于久國之時、以久國下屋敷之隣所故焉、於「正建寺松山」自殺、此時為「見臨終之面色」群集人、藤井腰肌拔於鐵腹、擲曳声以「扇子」押廻于腹、

徑介錯勵矣、容貌安閑諸人褒美云々、藤井者有「容色」、故
久困寵愛之云也、

●春田主左衛門尉

○春田氏者國分之住人而為重位之弟子久矣、此時三州中能
語盛而無不調此學、春田氏熟此諺焉、于時新諺之
本下於薩州、重位自筆雖得書寫之、於「節詞長短高
下不能知分明之、且疑有誤而為待來春田氏于重
位宅矣、然春田氏於國分有含不得止之意趣、及
刃傷立國分鄉之士切殺二人、將為切腹之時、於重位
翁多年之以有師恩、暫延時、如飛驅馳越來于鹿兒
島、為今生之暇乞來于重位宅、先賀平安、其言語
毫釐無異平日、雖重位之眼力不至察有變事、而
及諺本之物語春田氏肯之、以朱筆點諺節之長短詞之
高下等難通之分、其筆先如流無滯而点成焉、而春田氏
告重位以「夷有云々之言語、成今世之暇乞立座、又
如飛驅馳歸于國分為自殺矣、重位惜春田氏至深憫々
然不止也、且深感春田氏安死為從容言語容貌之靜至
如此矣、於春田氏点諺本者、為形見秘藏之、及重
治之時猶深藏文庫為珍書矣、位照及此物語于每歎
息春田氏之勇敢、見悲歎之色矣而曰、位照歸自大島
之後求之、終無有而紛失也、雖家人尋至無知之人
也云々、

○春田氏於庄內陣至顯武勇戰功者、有世人之傳言故
略矣、

○藥丸如水師春田氏諷諷、如水及十四歲之時、告春田

氏于重位以氣質之勝、仍重位為取於弟子如水令學
当流云、春田氏知人之有識哉、

○本田半兵衛尉親純

○初号隼人佐、渡海于朝鮮國數年在陣矣、親純者業聞之
上手而意地善矣、故重位御師範之為名代久在勤武江、
光久公御若年而御稽古之時、成当流之御指南矣、以此
一儀可察芸之位也、雖然飯國之后、久猶不授三段
四段之打矣、故光久公命重位、令免許親純於当流
之惣伝焉、雖然重位固辭而不奉旨矣、親純而如是可
子細也、然光久公名代重位、奉指南公之御稽古
久而勤勞焉、以此勤勞於不成惣伝、必於三段目
可有免許之御意也、故以重位雖不放心、畏尊命
免許三段目矣、親純以不為免許四段目不足于心、
及重位翁死去之後、作号紫觀貫書、大田鏡知等伝書
而授己之弟子、遊親純之門末流、業小而有齟齬於本
家、故世人不日示現流号松浦流焉、而正徳・享保以
後、一向之松浦流斷絶矣、(親純為重位名代下向於江戸
之時、光久公御若年之故、折角御待有之而親純出府于江
戸、參着御屋敷其首尾有、則光久公親純旅支度之俸
而御目見被仰付、直留鎗之御意有之、自御言葉之下
御側勤士黒葛原周左衛門、天流之上手而槍提來立合親純
焉、親純追打木刀必至々々、鎗柄左右三十打又十九打
打、鎗少不出矣、光久公大感之云々、○親純者馬上亦
達人也、此時代者自新橋至吉野橋之間、添堀之上手
植茱萸木、因之垣以一尺廻以上之木於三尺間一本

宛立、有「横貫」二矣、親純乘「馬成真之駈打」之、於數町之間「不廻」一打云々、如是之業親純之外無一人也云也、○業丸如水壯年之時、參親純「望平之打」、見立老人「奇特喜、成可來」明早朝之約「販焉、翌朝參親純、如水成打出一篇打平之打、此時親純新為「洗沢」着「帷子」之處、平之打一打打之後、汗出及「如瀧」水兮、如水以是及老年「感親純之思入」云々、○親純誠示現打也、故一家化之、親純之妻女知「当流之意地」、故此婦人臨終辭世之一首詠「心不去不來之心」、「吹イル、紙ノ袋ノイマサケテサラスキタラス岸ノ松風」云々、此外親純之吊追善之歌冠「法名、以当流之意地」詠「歌多」云々

△伊勢松浦之丞

(後改「有川」也、世人以名為「流義」之名、

有川内藏之丞

田中喜之助

(後剃髮号「傑山」、自「伊勢氏」免「許惣伝」之後、立合与「愛父田中雲右衛門」早拔之芸、喜之助業少而「不能出被」打臥也、仍捨「松浦流」一向執行父之芸「早拔得之矣、然自「松浦流」為「伝授」於「伝書、深秘」藏于家「不為見他人焉、雖其子喜伯「不見」之也、最初者世人号「早拔、后為「拔寸刃」曰「大刀流」、自号欵、不詳也、傑山以「一芸鳴于世、故世人亦曰「傑山流」、惣伝之弟子有「四人、皆多「弟子」矣、所謂和田源太兵衛、大山角四郎、大脇主右衛門、野崎次郎

左衛門也・本原雖「同流」、各至「立一家」者「隨于心々」少々業・形有「替云、独於「野崎氏」守「傑山」手筋「不加自作」云々、傑山雖「我流惣伝、無有一卷之伝書」云、正説也)

田中喜伯

(喜之助入道傑山子也、茶道坊主也、業能云々、此時有「蟬挺打」之業六、自「傑山」之時「作加之欵」不分明也、此喜伯死後、其子喜伯祖父傑山為「自「松浦流」於惣伝」出「伝書、令見」祖父之弟子高弟之輩、故見之輩大悦之、猶又作「広業」曰、号「田中雲右衛門」也、傑山之父者与「重位」互成「誓紙」、伝「早拔于重位、自「重位」又惣「伝示現流」、其子傑山惣「伝之、吾輩又自「傑山」合「示現流」令「惣伝」也矣、故其世代近正伝正而無闕、本家者重治幼稚而後「父重利、故以「日有「欠迷」世人、成「当流」之異端」矣也、猶許「磯田工夫記業之部」略也)

□和田源太兵衛

□大山角四郎

□大脇主右衛門

□野崎次郎左衛門

肥後

柏原市右衛門入道幽柄

初和田源太兵衛師於幽柄、曰「学「松浦流」矣、

○大野正右衛門尉

○業・意地共至「於当流之至極」高弟五人之内一人也、重位翁及「極老」之后剃髮改名重位、帶「九寸五部」一本焉、重位

者多、讎之人而既及極老、且讓流義之指南於重方、故遠于業也久焉、故大野氏以短刀於心、忽劇之不意如何成疑矣、故以是諫重位翁也、重位翁忝之曰、有誰無及之處、子獨至如此誠懇切也、然於重位者持扇子一本者、雖鬼神不疑也、況於帶九寸五分哉、故適雖懇切不改之云々、於是大野氏御落着於至如此、以致安心述之、竟々遂閑話而歸矣、重位送之欲至玄關、于時大野氏神速置於廊下之回角、取長刀、毫忽之間打込重位之本首、重位拔鞘共九寸五分抑長刀、曰「正右衛門殿不止男立矣、于時大野氏不覺退三間、拜重位翁焉、是擊重位為可帶脇差、潛持來長刀、隱置于是處也云々、為門弟之內打掛木刀于重位者大野氏一人也、自是大野氏之芸長進而可無餘蘊矣、此外就流儀雖多、言行意地業、事長故略矣、(至「光久公御代、召重位弟子于御城上、覽稽古、故師重位為學、當流輩不殘登城備稽古于上覽焉、重方者御前不快故不召、上覽終各有御褒美、而令下城之砌、藥丸如水參重位宅、祝今日首尾能之一儀、于時間芸之秀為誰于如水、如水答曰、煩中症雖非昔如手足、大野正右衛門以勝諸弟子矣、時重方開掌令見如水、如水見之書大野正右衛門於掌中有之云々、煩中風之後如此亦其芸可見為勝矣、)

○兒玉筑後守

○至業、意地共當流之至極、高第五人之内一人也、

○或曰、重位退出自御城、來稽古所向諸弟子曰、今

日依黃門君命、於御前立合与鎗之處、不留而為突於我身矣、雖無念更無可如何、然非指南于人云也、仍則斷師弟之誓約之由也、諸弟聞之各忙然無言、于時筑州速立席、拔脇指削銳突刀之先、進立稽古所对衆投出之曰、雖鬼神之鎗先不可向于當流之意地、曰「取是可向于我立矣、其眼色凜然顯不疑當流之色、于時重位向筑州曰、先言為試、各落著之程也、突鎗先少不出矣、然孰暫見疑惑之色之處、子一人不疑當流、為明白不動其言謂至如此、深歎賞筑州矣、(案、依「家久公命重位留天流之鎗突、(原伝左衛門之鎗之趣、載由緒書、此時之鎗留歟、不詳)筑州者先重位病死、故重位謂如失左右之手、痛惜之深矣、

(国分士号鎗田某為勝壯士、而違国政有可被誅之罪矣、仍命筑州令誅之也、此日雨天也、於町待某、某出來悟之、直以為私差傘投掛于筑州、切掛筑州、投掛傘共切屬某、筑州初太刀切除傘、以二之太刀欲切屬於某立、為某可被殺、然如此動能察付也、諸人稱之云々)

(此一ヶ条本書首書、然因見惡書入爰、以下貫之)

○久保平内左衛門之昌

○師重位學當流達意地、業焉、故重位翁伝打授伝書數卷、手自削立合木刀一結令得之、(延宝八年庚申正月十二日大火之節焼失伝書、故不分明打之伝數焉、木刀者幸免火災、至于今格護子孫之家、知世人処也)

○之昌者、不入寢室之時者常端座、一生之間雖家人不見怠惰之容、故役納殿役人、及于宿大奥、屬眠者、当小刀額座至旦、其勤行嚴如斯矣、

○首書、明曆江戸大火之時、之昌以右勤、在勤于江戸大奥、今日大風如拔、木火災急劇也、故在勤之輩各惆悵無不失色而感為歟、然之昌一人不駭如常、故令任今日之事、仍之昌為出令不滯、無一事之後、無一人之怪我、而速御免與於御屋敷、免火難勝諸家矣、故光久公感之賜時服、小君褒美之賜卷數矣、案、是亦当流榮托目之味也、

●市來惣兵衛

○師重位學当流、達意地、業稱世人歟也、(古老曰、市來氏者愛甲次右衛門同年輩而元來心友也、而友出精当流互思及相打之芸也、然令市來重位授、仍愛甲氏疑之、至市來氏乞試、市來氏曰、於芸者元來無勝劣、然我受、伝者、我亦思如何之、且試芸者亦立合也、立合者師之禁也、既誓詞戴不能破之云々、愛甲氏強乞之、于時市來氏火、子破誓詞向于我不得止而可破之、拔真劍可出于庭也、愛甲氏驚曰、何及如斯乎、以木刀為可試也、市來氏曰、於当流之意地、業、生死之涯非為以真劍之時者、不分勝負芸術也云々、愛甲氏為辭謝、歸矣、謂于人曰云々、以之考之、市來氏芸勝于我、遠乎尤也、師重位授也、將曰、于暗夜自後難切、獨市來氏也云々、

●愛甲次右衛門

○師重位學当流、不劣市來惣兵衛擊手也、愛甲氏者勇敢之士知世人歟也、寬永十五年戊寅二月殉死于家久公矣、(案、慶長十六年辛亥生、至寬永十五年二十八、法名虛白、無居士云、惜哉年不至四十令殉死矣、

○又案、愛甲氏成弟子而盛稱古者、自元和末可至寬永之初八九年、然讓重位指南重方之頃歟、然愛甲氏乞試于市來氏之時、伝授之師付曰重方說有之、亦難一向之非者歟、○古老曰、大野・久保・市來・愛甲外加二士六人、作學講所于平宅地、出精字文武芸矣、勝器量于衆、故時之人稱英雄之六士云々、

●稻津伝弥左衛門

○稻津氏大胆勇猛之士也、師重位學当流芸拔衆也、○於關東上方、関口流居合方名師、有号水野流滴者、此者高慢己之傍布之心影流、於薩州聞示現流之盛、不知示現流之意地業、故盡至寬永之末下国于当国、窺時節居矣、此時当流之稽古意地盛業勵、而懦弱之士者倦學之、如此之輩潛師水野學居合之士纔三輩有之、余悉家來、町人・寺門人之奴原也、學当流輩惡之矣、水野者亦望見当流之立姿也、或時出會于稻津之序水野曰、望本家之立姿久焉、稻津答曰、如其方者先下手示現流之見我立姿可悟道云々、水野立腹真欲立合、双方置於五六間之間、立向焉、水野一步踏出不踏出之涯、稻津一飛飛來一打打、屬水野頂上于地、流血如滝、悲痛迷惑而免足於鹿兒島出他邦也、以有此一事、稻津氏學当流之名殘于後世歟也、(古老曰、此時平田監物傳

殘「伝授」、追「水野」過「横井」、伊集院「至于市来」乞「遂惣」
伝、水野固辭不肯、然因「尽」親切、水野不得「止」、於
市来「漸令免」許惣伝矣、再后平田氏一人独執行成「居合」
之上手、己之家来有「曰」永井源太左衛門、此者成「平田」
氏稽古相手、又成「上手」於此永井弟子「曰」佐々津助市・
家村角兵衛・有川五郎左衛門等有「弟子」而立「一流」各取
弟子、自「宝曆」年間「被立」劍術之師匠家也、

○兼丸大炊兵衛兼陳入道如水

○兼陳者「与」重位「居」住並屋敷之隣所焉、且以「祖父」考殿守
有「頼」親分之恩、殊兼陳氣質英俊、而知有「自得」当流
之器也、故重位為「求取」弟子、自「十四歲」学「当流」、十
六歲而伝「二段目」之打焉、与「重方」同年故昼夜出「精当流」、
悟「道」当流業・意地之蘊奥、与「重方」成「不分」勝劣之芸
矣、

○兼陳廿歲計之頃、於「重位」屋敷近辺「深夜」大集成「立吠」、仍
重位謂「惡氣催」、使「重方」兼陳「殺」之、而士出容易殺
犬、雖「犬」一切兩斷脇指如「出研」焉、切「犬」雖「一切兩斷」
学「当流」為「達業」、因脇指不當「于地」、仍不「属」疵如此、
而士悅則以「之告」重位、重位不「悅」然曰、是日「於下」者
也、汝等謂「未知」当流、而有「座中」切「碁盤」、切「通碁」
石・碁盤「奇麗切」込根太「太半」止矣、而人於「于此」落「着」当
流之意地矣、

○或時重方来「臨」于猿渡氏宅、(号「勘左衛門」勤「御使役」)
門弟衆從「之」、兼陳亦在「其内」、于「時津磨屋某」(号「惣左衛
門」)以為「天流」之鎗突、堤「鎗来望」当流之「立姿」、兼陳立

出持「掛」于中段、踏「属鎗」之「鵞首」、津磨屋氏「平」伏于地、歎
賞「当流」不止矣、(愚謂、有「中踏」鵞首者「放下」之業也、
如此「疑」工夫「可見」当流之意地矣)

○兼陳在「勤」于肥前長崎之時(於「御家」光久公御代立「長
崎」、仍公使「兼陳」命「御附人」在中「勤」于長崎、兼陳者「御附
人」之初也)、或時諸家附人与有「会」合茶屋之「二階座」焉、
時日「籠取遣」(則「奇棒」是也)之名人者(名俗惟不知)持「来」
籠取於「座中」望「立姿」、兼陳追「取窓」之突張、打「一打」立脱
於籠取遣矣、籠取遣捨「籠取」属「頭」于地「良平」伏焉、兼陳業
神速如「稻妻」、威之強如「鬼神」、座中之輩各無「不為」感
心驚怖焉、兼陳属「于座」之後、籠取遣初述「拜」如此「強勢」
理、深感心厚謝礼出矣、新作之籠取之「奇六落」矣、以「松作」
処之突張少疵俟而無「折」也、見聞之輩頗成「奇妙」之思矣、
(此一事於「薩州」無「伝」之處、及「吉貴公」繼「豊公」御代、
使「伊集院」仁左衛門久矩「命」御附人役、在「勤」久矩于長崎
之時、或日及「八十」有余町家之極老通參「久矩」之宅、委成
此「立姿」之物語、我其頃雖「幼若」因為「茶屋」之近隣、能知
此事、而為「後年」之證拠、述「落奇六」之内「漸求」得「茶屋主」
于「今所」持之、而自「巾著」出之令「見」久矩、久矩見
之初当流之業知「至于此」、深感「概」当流之意地矣、飯国
之后委又物「語兼丸兼慶」者也)

○綱久公或夜召「兼陳」問「当流」之意地焉、于「時」於「御座」之間
于「垢羅」御茶釜、仍兼陳曰、譬「此茶釜」可「述」意地歟、
曰、宜「然」也、兼陳曰、入「於水釜」起「炭火」煮之、隨「煮」
水漸變成「湯成」熟湯、甚如「噴湧」出来焉、烟火熾而久者則

釜為之燒、變色如紫如紅、于是釜變火焉、於是物屬釜者釜無不燒之、是當流之意地也矣、綱久公聞之御落着當流之意地矣、而曰、述當流之意地、明審而盡也、為御褒美、賜以金居十文字御紋、鑲之御縁頭、其外以如此之類、頂戴御自筆之画度々、而今有子孫之家矣、案、是水落當車輪之意而、意地者、火也、釜者我也、變釜燒物者、積我之修行、意地与我成同一鉢、勉也、

○兼陳落着於當流於門弟中、稱無並、頃或人間、重方曰、雖兼陳之達芸、師於見之者有、難乎如何、重方答曰、於業者不及之芸也、於意地者、充滿之余有矣、於他人常雖達業、以不足意地為難至、兼陳之位者、却以有余可難乎矣、後隨芸為、熱消除此難、成誠之心芸云伝也、以之兼陳可見芸之高矣、

○兼陳取弟子、必示之曰、當流者以不頼刀為第一、頼刀時者有時疑惑心、無刀時以拳行敵之頂、成微塵、勉可落着矣、

○兼陳雖及極老之後、兼陳稽古有之、免曳聲時者、肥前燒之茶碗者、必聲之響破矣、故兼陳成稽古之時者、必是為伏置於盆也、予若年之時、從見之人、聞之、實正勿疑矣、兼陳性好酒焉、然為嗜、當流一生不飲酒也、雖家人皆以思忌酒之人、然及極老夜為助寢、以大天目、二飲酒快為寢、至此雖妻婦初知好酒也云々、

○兼陳如斯雖至心芸、教子孫與弟子者、以相打令稽古矣、以相打令成無二無三之稽古、(當流者以相尺

難留、以長寸安留也、長寸者業為遲也、然我芸不達之時者、有恐長物之氣也、故強所制也、至意地、業大半之界、及意識、不勳心之芸、後令成早捨以上之稽古、早及長寸時者、任手打出其成、用捨、當流之意地自是漸陷、傍布、再赴、于當流之意地、難故也云々、(慶長十二年丁未歲生、重方同年也、元禄二年己巳八月五日、予知死期、為結跏趺座合掌死、年八十三、法名昌岳院殿藥翁情性大居士、葬于南林寺殿、○兼陳者嗜和歌、能手跡、尤委御家之旧記、多正知御家中之武功忠勤之士云々)

○重位弟子、初者長谷場氏、篠原氏、中者大野氏、兒玉氏、末者葉丸氏、落着當流之繼與、仍五人之美、稱高弟者也、(長谷場氏、篠原氏者、今其家不知為誰也、大野、兒玉氏之子孫皆字他流之劍術矣、獨葉丸氏代々學當流於世々、高其名焉、人知勉也、雖不及意地、業于如水、然伝其正道、雖本家、不能輕之伝、太刀筋、意地矣、高弟之子孫如此、況於五高弟外之弟子子孫焉、故本家亦對葉丸氏、禮儀異於他弟子也)

(首書、兼陳二十有餘之頃、在勤于江戸、往來山州伏見之時、趣于洛中見物、四條川原之涼老若男女群集于爰、以万可數乎、于時兼陳列之輩謂兼陳曰、子雖得示現流打之名、白昼於衆人之中、殺害人以為試焉、兼陳曰、白昼雖衆人中、無疑者也、害無咎之人者、謂不仁也、雖不肯強之再三、而不肯者、業以不及、有思固辭之色也、故兼陳為流義、不得止曰、子之輩以我言、疑歟、

可不疑之驗、但切臥人之油斷者似切死人也、勇壯而有為男立者、子之輩行當之、彼竟念怒欲及刃傷子之輩之時、我切臥之可見子之輩、列之輩如其言、兼陳飛掛一打切臥彼、有為敵者叫寄々、其近辺騷動人々逃走、其間兼陳之輩早退其場、馳而帰伏見之旅亭、雖一人無宿難矣、於愛同列之輩卷舌感歎兼陳之業焉、此刀兼陳家重代、宇野津作大業物、長二尺六寸

胆良善介

○慶長之初頃在勤于伏見之砌、或夕暮切害人為試武術行京都島原（此時無今島原商女町、古人之咄之俚也）、欲切為往來于此處之壯士、夜人頃不待之、然年之頃見三十歲之前後男自島原出來、長面色白長高而坊主津婦里、津婦里衣帶二尺計之脇差為突杖焉、善介為幸、己不逃掛言葉、掛刀柄於手進寄之涯、男見之日、汝推參者雖打果善也、謂助命而脫善介抑拳從容而去行矣、善介思殘念潛附行、持拔身自後切掛于男、男又如前靜行過、善介切害人雖多無如此、故善介甚雖思殘念、不能為如何飯伏見矣、其後婦國之夜先參于重位宅、雖深更遇于重位、及兩度為男被抑拳焉、業神速威甚強矣、兼從重位打拳者聞無他流之教也、然如此者如何、重位翁曰、是予弟子弟有曰某者、予參善吉時年漸十五六也、今日可及三十歲、而語合容貌之処、雖長年大概一也、於是重位曰、是氣質敏者也、今其云可及如此焉、此者實於向子者何敢得向于彼哉、此者寺町近隣之商家之子、而雖成

天寧寺素給仕、以善氣稟令勤重位表稽古之打出矣、雖不伝打、以為善吉之弟子其云可及如此也、此者春秋三十歲而早世、聞其旨于薩州伝焉、依不伝打無弟子云々、

田中氏

○師說曰、山伏而當流之打手也、然述伝書有誤云々、

○東郷与介

△右重位翁弟子十五人、以長幼雖羅之、於不詳知年令之輩次第不同載之、此外於當流有雄名之輩、待後之識者矣、

○藥丸刑部左衛門兼福

○刑部自稱曰、我芸相打善介也、然謂善介取弟子嘲善介矣、（善介者斥重方四男之善介也）

汾陽四郎兵衛

○師兼陳積數年之稽古、故有示現打之名、于爰有曰上原貞右衛門士、彼者當時豪雄之士也、而慢己之勇敢不學示現焉、或時与汾陽氏試刀業及相打、（此相打者一度者勝、一度者負、謂不分勝負之業也）故參如水述此事、雖學示現歎無其詮、而始及涕泣矣、如水曰、上原者當時豪雄之士也、子以學當流至相打者也、勿歎之矣、

○黑葛原主左衛門入道可山

○可山者其氣質至強之士也、如水外孫而初成兼福之養子、以兄為早世歸本家焉、故素立藥丸氏、自幼少學

示現、生質善故達於當流業、意地、業大而意地有余之
芸也、故世人於今歎賞其芸、稱其節義矣、

寬文三癸卯年生、元文二年丁未四月十二日死去、年七十五
法名実元院殿道開祖翁大禪士、葬于南林寺殿、

黑葛原周左衛門

岸良清右衛門

木脇仁右衛門

○上原貞右衛門尚盛

○尚盛者當時於御城下以豪雄被稱之士也、曾而門友與
河野氏某（安左衛門后号一貞）語合曰、於安死者謂不
及學劍術、而不執示現也、於朋友無不學當流、
於中汾陽年令長而有示現之名、故或時與汾陽試刀業
之處及相打、故乞試業於如水焉、如水免之、于時
如水七十二也（或曰七十四）、尚盛者年十八也（或曰二十）、
而望尚盛於如水之立姿之處、心屈伏業亦不出焉、故甚
感悟示現之高尚、則師如水修示現親切也、數年尽精
神之后、芸進稽古早捨也（可成上原、汾陽、黑葛原皆
也）、仕手打出共不為用捨而打出無二無三矣、於此
各及相打（當流謂稽古之相打有伝可工夫也）無留
矣、故尚盛乞留早捨于如水、如水免之、則尚盛打出出于
如水、倍常尽力當為打出頭、曰今一又打出也、此
度不能見如水之眼色、俯伏於頂屈曲焉、早捨少不
出如水押置之矣、長谷場氏立會與綱宗而與擊所、一
般而打処當流之秘訣也、尚盛見此立姿落着意地、有

可山亦于其座見之落着矣、尚盛年二十八也、如水八十余
之時也云々（此一時詳記別錄）、及執行尚盛於示現曰
河野曰、汝雖有梅花之含于胸中、不得開焉、執示現
梅花心可開、然河野固陋而終焉不悟、不修示現止矣
尚盛於岸良打殺島津國書久竹家來時、于手之掛追
取火之伽擊之、于一打家來頂上破也、佐津佐武而立所
死矣、尚盛於言行之間不叶于心、而致工夫有未
自得、為之揚大音雨涕泣矣、夫加修行求果斷如
斯、豈曰非豪傑之士哉、（案、系譜曰、上原佐太右衛
門尚盛、寬文元年辛丑四月六日誕生、加治木早右衛門友
尚盛為山奉行座筆史、元祿元年從伊藤舍人（山奉行）
到隅州串良柏原時、島津國書久竹家來田中慶右衛門惡言
因与楠元早馬（山見廻）俱召慶右衛門詰問其事、慶
右衛門太無礼頻立座、尚盛怒而立擊殺焉、其父甚右衛門
含憤自尽矣、依之國君諱以尚盛之短、同六月十
二日賜死自殺、年二十八、法諱知心宗覺居士、○古老曰
時人謂尚盛撥切腹于十文字、摺出腹死也、尚盛辭世
之詠歌曰、シモヒキヤ身ハノ火ニクヘテケサノ嵐二
灰ハハフ々々、謂不及自身于切腹、而從容賴西仙左
衛門於介約死矣云々、惜乎、幼名曰袈裟松、古老曰
尚盛自殺之時、為暇乞黑葛原可山行、尚盛之宅、尚盛曰
于可山、為今世之名乞可誦座頭之歌、可山曰、及
臨終者以靜為善、無用可然哉、尚盛感深切之心深為
善從之矣、

○藥丸長左衛門兼慶入道活慶

藥丸新藏兼雄

伝如水以來示現之意地、於業師重治、共与位照・大重・美代・家村等積多年之稽古、至留早捨以上矣、○延享之頃、來朋友之輩于華慶宅、待座兼雄・兼中于同座、于時雷神霹靂而隣家之落于原田某、忽起雷火及騷動焉、此時於客之士者無一不属于疊、而藥丸氏父子三人如常笑語無滯矣、座中之輩以希也、案、是聞当流之意地故乎、○兼雄當時博學第一而尤長兵学矣、

藥丸長左衛門兼中

本家五代位照為弟子、令伝授十二之打示意地矣、

藥丸正右衛門兼富

○綱久公

○重利

藤兵衛 後号肥前

○寛永元甲子年誕生矣、重方者氣質豪雄也、重利若年之時氣象不及重方、故重方叱其下地之不美而令止稽古也、重位翁聞之、於看經所（六帖敷有之也）重位翁成打出潜令稽古三年矣、業意地共上達矣、於此重位翁使重利出稽古所成稽古、重方見之始復美重利之上達大悅喜矣、三年看經所稽古之内、或召御城、光

久公指南重利之稽古、故公以重利思召御弟子也云々、○將軍家光公御代、慶安四戊戌年、重利在勤于江戸、于時家光公被問召其名、察為重位之孫、有可上覽芸之旨命、光久公応之曰、未成年焉、重位子肥前在于薩州、召之可備芸于上覽也、然家光公先欲有上覽重利之芸、既及定日限、而不計家光公御不例終竟御止此事矣、然有此命疾聞于薩州、門弟數千人各欲打臥相手、願文及數千通、然重方曰、於重利既悟道当流之業、意地、雖未熟於打臥相手、日無疑一点不動心也矣、而願此有上覽肥前云哉、不及打而有不揚相手之頃、物美存在我胸中、于時重利年二十八、

○島津市正忠守（後号鷄云市正忠弘子）招請重利物語之序謂重利曰、弓者可留欵、重利曰、名人之弓者免無色、強弓者速難見其無形也、故雖聖之位為難処也、於常人之弱弓者賢之位亦或有留矣、時忠守曰、我家來有嗜射者弱弓也、子留之焉、我望之有年也、重利以不當位再往雖辭之、忠守強之再三不止也、故不得止持小太刀、座假而隔七間（或三間）從容而留二本之矢也、矢先為來左之袖之涯、保多々落于疊、而一向小太刀之出口不見於目焉、忠守其業感奇失言語不覺退三間拜重利矣、

○弟善介謂重利曰、当流之意地者、譬春駒踏迎片足于牛崖鼻、伊奈鳴之氣象也、重利答曰、否非然、春駒於春野波知々々打擲尻尾喰春草氣象也、然善介終不悟此心

也云々、

○依「光久公命、相勳、綱久公御簪古之御指南」焉、故綱久公數度御成重利之宅、蒙難有御意多焉、殊宝刀賜備前兼光作御脇差也、(長年于綱久公ハツ)

○古老曰、重利通運氣矣、(或曰、重利美弟酒匂氏、或夜出、夜話、子之下刻頃、婦之時、於荒田川、俄氣乏、凜然身毛立、不能行而踟躕焉、時亦大來、如何見之、犬悲鳴、自丸木橋、落川水、而溺矣、然自其跡來一人、是亦如何見之、為烈然、發一聲、無一足之滯、而渡橋來、酒匂氏聞此一聲、則氣充憤發、勇氣忽消、恐氣、且此人知為重利、之怪其人來、酒匂氏之前、呼重利、歟、果重利也、仍述心事、重利問、發一聲、重利曰、聚阻氣也、故發真之聲、令散之矣、重利行、酒匂氏為婦宅時也、是又通運氣、曰一端歟、仍註于此、)

○重利者自「年令五十余歲、煩中症、右之半身痠痺焉、然猶成稽古、折屬右之指于握、雖採蜻蜒、及打出者、右之手離、以左之手而已、雖打丁、之木刀無不折矣、然隨經年沈痛痠痛、指南嫡子重治、不能、尽十分也云々、

○元祿三年庚午五月廿四日死去、年六十七、法名天柱明真庵主、葬于南林寺殿、(于時重治年十八)

○於他國、當流之名甚高、而以号「東鄉肥前・東鄉藤兵衛」無不知、為「示現流」之師匠家、故「光久公」於「他國」名乘「東鄉肥前」者、依于時、遠慮令到來於支賜「早川」名字、仍於「他國」重利名「乘早川肥前」者也、

○重利亦御參勤御供被「命」數度、尤不替父祖賜坊泊地頭職、其后於「方々」外城地頭線替有之、且令勤役兵具奉行吟味役、仍勤勞有年矣、

●酒匂大藏兵衛

○重方「男也、成酒匂氏養子、(重方代、光久公光儀重方宅之時、以御太刀進上、御目見時、名賜大藏兵衛焉、是不成養子、以前重方「男之時也、○酒匂氏居住萩原天神宮之西方、然及大藏代、極火難、今之移中村之地也、

●武仁兵衛入道玄機

○重方「三男也、成高城氏養子、酒匂氏・高城氏、但于世有雄名之士也、

●東鄉善介

○重方「四男也、寬永十九壬午年生也、于時重方年三十六、○万治二年、愛父重方死去之時、善介年十八、故後于愛父之后、經數年、雖達于業、未悟意地焉、故重利欲令悟意地、待時節、或時兄弟出、魚釣、及當流之意地、忽重利打倒善介于釣舟、於此善介悟意地矣、

○或年善介在勤于江戶、然重利弟子外城土何某得「惣伝」、為在勤出府來矣、而述此事、願善介之打、善介消燈与角与、角立向、一々蜻蜒打撃、何某之本首、而于一打、每于每一打、是謂立之打、是謂双之打、打通十二度於本首矣、何某為惡拘打之形也云々、

○善介者文盲而暴惡之氣質也、故於「江戶」夜々出外切殺往來之人多、而曰、拔離刀之鯉口於堅切人時、必手一束

之幅切進也云々、案、当流者仁愛人之余不得止而発之云也、然善介如此、畢竟有不通徹于当流之本原矣云々、○善介勇猛有余而無才也、故其教法或過猛武、其流弊或有變暴惡也、(曰、当流之暴惡者歎嘲示現之教道、善惡去嫌不用之、任己之心開大口、日不用作法之稽古也、如此者數年雖打擲不長於芸、是亦当流之異端迷人多矣、○延宝六年戊午七月三日死去、年三十七、法名了山龍心庵主、葬南林寺殿、凡三年計之煩長病終死矣、有聖師非導之者、礼儀兼備而難達意地、能變暴惡処也、

○黑田納右衛門賴春

○免許四段目也、故弟子有、然羅之弟子無也、

○三原七郎左衛門

○有意趣、憤矢野氏某焉、某咄合吉田右衛門次郎宅、三原聞之、至吉田氏自庭乞用干某、某所自椽下、飛掛二刀切於同所、矢野氏落成二矣、三原則切腹、(古老曰、矢野氏者重利之弟子而業越三原、然下自椽之時有油断、故至如斯云々)

○三原・黑田兩士列立參稽古、善介雖病中謂可打出、取長刀出庭上、則立出三原氏、自椽下不下之涯變、當致長刀投突矣、然三原氏見事留之焉、黑田氏又同于之、于此善介褒美兩弟子、謂勿忘此意地而終及惣伝也、非本家正統者、雖二男不免至己之弟子於惣伝之

法也、然此時重利者病苦、重治者幼若、善介亦羅雖病、故為御奉公於此兩士、從善介令惣伝也云々、

○東郷与介

○元和二年生、居于国分、重位翁親類也、重位翁死去之時与介年二十八也、後于重位後受指南于重方、猶更上達於業焉、冬嚴寒之頃、或夜於重方内證于囲炉裏、爭論意地而不止、重方取火起打倒与介、成脇差之韜于一飛、於于此悟道与介示現之意地矣、

○藥丸兼慶曰、与介取木刀立時者、如蜂巢雖突破与介之胸、不見可死之氣象也云々、

○或年於国分有講中庸士、与介聽聞之、及講上天之載無声無臭与介曰、子者雖講無声無臭、於子之心実不可知有無声無臭之心林矣也、此与介者於口者雖不能日之、実知無声無臭之心有于胸中也云々、

○藥丸兼慶毎々語予曰、与介翁常々曰、当流之稽古者捨蜻蜒而落也、於長物者実勝負之時初而打也善矣、案、初向長物有打臥敵之伝也、然於今之世不知之、一向学捨蜻蜒耳者、不達業不開意地、(意地者斥示現之心体妙用日也、而為敵可擊也)、

○兼慶又曰、与介毎日子之輩之擊者、過多津幾而不離切也、当流者過多津幾而不離切甚嫌也、胸与胸与合雖打、為離切打出者也、伊佐謂為出而擊而見之、於捨打者大踏出於右足、合於胸雖打木刀寒打破志加志矣、望之則如悟、仍雖打數十篇、日不是不是以善不免、

經年後免以善希々有矣云々、案、是飛彈山之味也、

○宝永二年乙酉四月十七日死去、年九十歲、法名号、郎彦活心居士、葬于南林寺殿、(万治二年重方死去之時、与介年四十二、善介死去之時、与介年六十三、重利死去之時、与介年七十五也、藥丸兼慶之輩師与介盛為禱占頃者、与介年白七十六七至八十之頃也、以兼慶之語、老益可考、勇壯之氣象矣)

於与介弟子者、家傑之子多焉、於中藥丸兼慶当「本家衰微之時、代「本家」指南諸弟子、令不失当流之勢、蓋与介之力也、

与介雖「重位翁弟子」、后受「指南于重方」落着当流、故「羅西所」矣、此末羅「西所」者習之、

○藥丸長左衛門兼慶人道活度

延宝元年癸丑年生也、兼慶者其資質勇義和靜不見「喜怒」之人也、当流之業專「広大」至「密細」矣、常曰、見「脇毛」非「打蜻蛉」打処不「徹焉」、守「師法」不「違意地」而留「長物」、甚以為「非也」、

○兼慶者「伝家伝之打」矣、又師与介亦伝「打也」、然本家重治亦伝「打」、辞「三段目四段目」伝「授初段目一段目」矣、吉貴公御代、兼慶勤「仕于物頭役」之時、有「違御国政」之罰、而召之士、然此士藏于土藏而不「出也」、時使「兼慶」属「肝煎足輕」捕之、其外御目附、横目多人數從之、免「御城」之誣、兼慶者有「承御家老來密旨」之義、留于「御城」、其余之輩者疾行「向于屋籠之屋敷」、或屯「于門外中門」、或

知「籠于藏」真似不「知而徘徊無用」于屋敷之砌、兼慶出来、真直不「脱草履」速通「横座納戸」入「土藏」、脱「屋籠」之士曰、不「出御用者重罪也」、早々可「出」、屋籠之士聞之、雖持「拔身之刀」居「二階氣屈曲」持「拔身」下「自二階」于土地、時兼慶進「攬」右手「徑肝煎某出兼慶腹下」、取「左手」自「藏」引出矣、自是兼慶之雄名著于鹿兒島、至于今「世人称美之也」、(兼慶曰、至如之時、宜脱「草履」古人以譏謂心騒也、故雖「土」之座中不「脱履」而至「于藏」也)

○兼慶師与介「行当流」之時者、定「稽古」所于兼慶宅、及「年中敷度」、与介自「国分」来「鹿兒島」滞在于兼慶宅、同「門弟之輩持」米飯料、夜具、而同与介滞在于兼慶宅「久矣」、而無「晝夜之界」尽「精力」成「稽古」及「多年」也云々、

○本家四代重治、享保十八年病死、此時重治嫡孫実防(二十三歲)重治四男実賢(二十五歲)若年而未「熟于当流」故欲「及衰微流義之砌」、以「古弟子之吟味」奉伺「吉貴公」、使「兼慶代」本家成「諸弟子之指南」之処、依有「免許」建「稽古」所于兼慶宅、自「享保十八年」至「寛保二年頃」凡十年、代「本家」令「指南諸弟子」、然讓「誓詞血判」本家不「受也」、時兼慶既年自「六十余」及「七十余」之時也、

○兼慶常々告于我「学当流」者雖「三歲之童子」實教勿「慢」之、雖「鬼神」勿「恐」之、有「慢童子之心」必有「恐鬼神」之心、為「善吉」重位于父之「誕生疑惑之心」不能「打之」也矣、又曰、黑僧而令「匍匐」於和尚処、兼々可「工夫」矣、又曰、以「忍」之一字可「処」万事、犯于情「怪癡」喜怒者必有「悔矣」、予此等言語毎々聞之故記之、就「中饒」于旅

行者必以忍之一字焉、此數言不恥其言行之人物也、

○宝曆八年戊寅九月十七日死去、年八十六、法名義勇院殿活

岩道機大居士、(血脉有殿大之二字、然嫡孫兼中過善除

二字、故今於石塔者無殿大之二字也、○兼慶以氣力

衰知難遇此冬、仍以今月廿五日招請于親類欲催

名殘之宴會焉、然至十六日異氣力于常、醫師川口伯

耆療治之也、予今日晚至川口宅、伯耆曰、以今日之

氣力考、不免今明日之間、廿五日宴會以不達為殘

矣、樂翁極老雖心術容貌正明、以此一言既知及老衰

也云々、予初聞不快則參兼慶、座于布团言行如常

及示現并歌徘徊之咄、亥中刻飯矣、待兼中于側耳也、

而今夜子中刻及大切之段告來、仍馳驅參活慶既死去也、

於此伯耆甚歎賞心体之正明、稱誠之示現流打矣、今

月十三日頃呼兼中丁寧有遺誠、依事長略之、

●伊集院仁左衛門久矩

○久矩者勇武大智拔衆之資稟也、而尽精神于聖賢之書全

言行無欠闕之士也、故今於薩州稱學者以久矩為

隨一矣、夫為人如此、故於当流亦意地業不劣兼

慶之打手也、

○古貴公使久矩為御守役宗信公也、然公未御幼若

之時而、久矩者既老病死矣、人無不惜久矩之死焉、

公長之後、稱久矩奉教公之言語則之多、久矩御守

役而久在勤于江戸、或年令飯國之時、於西海筋或難

遇逆風乘船將破覆、舟中之上下恐怖無不失色焉、独

久矩從容笑語、如常座煎茶呼洪谷氏某、(加納右衛門時

御小姓役、後御近習役)曰、是命也戰死野闢城攻、報

國恩同一般也、勿驕為今生之名殘、靜心可飲茶、安

閑煎茶焉、洪谷聽此一言座久矩之側欲安死也、既

去逆風舟中無恙矣、歸國之後洪谷述此事、美談久矩

勇敢之勝兮、故世人及今稱之、為不及今之學者、延

矣、久矩一世嘉言善行甚多、一々不暇記之矣、

小倉治左衛門

又執行鎗術名高于当世矣、

●黑葛原周右衛門入道可水(正徳三癸巳年死去)

○重方或時謂周右曰、於当流有成就知乎、周右曰、当

流無限之云、然為成就之者如何、重方曰、如子言

当流無限之云、然要之、一生之間嚴務君命無違國政

守礼儀廉直焉、以之為本而旦夕修行当流、煉業思

意地不怠矣、而亦以太業之刀是如不溜水研濟、附

大称多刀不鏽豪釐、固鞏留而一生不用之、既至

極老臨病死之節、置是刀于枕本讓嫡子、是謂当流

之成就可乎、案、黑葛原氏者過勇猛之氣質也、故重方

以此言戒之歟、

○黑葛原氏者日々幾度雖出入於家宅、而大小之刀于袋

結置於緒焉、而告子弟曰、於門前雖有喧嘩、自

袋出刀之間決了簡欲馳出為也、驛卒馳出臨于其場

者或猶予、有蒙職名也、案、是亦戒于子弟之至要也

矣、然隣家於于志岐某宅、夜中忽起喧嘩之時、周右蹴

破境山迅速至其座、既欲及刃傷拔刀之後、取鎮之

属無事矣、雖居志岐氏同室之輩、踟躕狐疑不能救

之涯敏速如此，以是可察果斷之速也。

●篠崎角左衛門入道正心

○正心者自若年之時，學當流，盡精力之雖不怠，其實質為不善，修當流，稽古少不進也，故重方數度謂正心曰：子者非學當流之氣質焉，止當流之稽古可學外事也，如學當流於學外事之一芸者可為上芸，雖承正心於此言，然不及述答而歸矣，而朝告之，昼又来稽古，昼告之，晚又来稽古，不倦憚，出精也，然芸猶不進焉，正心之慈父何某亦依為門弟，希參重方宅，仍重方或日之來會以之告，茲父某，故慈父以之告正心，切謂止當流之稽古，正心答曰：於落着示現流之義者雖重方非知之処，謂有我一人之胸中不止矣，而猶更不怠稽古之処，其後俄正心之芸令長進，於門人之中，爭一二之成，打手焉。

○重方者五十歲已後，讓門弟之指南于重利，閑居于能學寺隣所，故重利自二十六七歲頃，指南諸弟子，時重利與正心成，早捨留之穿鑿，正心不用重利之言焉，故重利誘正心夜明頃行，本田親純問：是是非，親純述重位已來教戒云々，以重利之言尤為是，然正心猶不肯，仍重利：正心共參重方以早朝，重方未起，重利因告之，重方乍寢曰：角左出于庭，正心如言，重方飛下于庭，謂出角左留之，其鑿所如重利親純之言，於此正心悟，道早捨留矣，而正心被打于重方，其所不愈之闇，隱于袖內，不見于人，尤一生不告，打処于人，也云々，打処長谷場氏同為打綱宗処矣，當流秘密之処也，此

時重方留正心之早捨不及一言，又寢焉，其后如正心者不及言聞，直為打之見可矣云々，案，古人意地強打而不見者不解疑也。

○正心者勤仕于綱貴公御側廼，然公止當流而執行卿生流也，仍御側廼之士大概成卿生流門人焉，卿生家繁來御屋敷御稽古尊也，正心因知無用之劍術常數之曰：御器量以劣，三公遠當流，不立于役學劍術，費御隙矣，或曰卿生家來臨御稽古有之最中，正心於御次數之余嘲諷之曰：哀使，我立合與卿生家哉，我不採木刀以拳容易可打臥卿生家也，聞之勤仕御次之輩忿怒以告公，公曰：於彼非常之者云，促而置焉，不可取揚有御意也云々。

●久保七兵衛之昭

○寬永元年於中福良生，與重利同年，近隣而素立故自幼若學當流焉，之昭者大勇大力而長高，鴨居五寸，當時於鹿兒島隨一之大男也，此時代上下打込之才也，仍或日上下之若士群集遊，追手口之序，有追手口御門以持上於吹喇叭欲校力，勇壯之輩數人而雖欲上戶口不上焉，時之昭立寄一人而容易持上片口，故上下之若士以不及力量免之昭矣。

○之昭知音之美少年在于加治木，故每夜自宵通行于加治木，翌朝歸矣，時之昭未因若年，普代之家來恐危於中途欲留之，或夜登白銀迎之稍，之昭為通行之時，鳴似妖怪之吹物，之昭聞之可生捕，自言押廻三尺八寸于後徑登來其木，家來恐早述以矣矣，志善仍之昭

容之一言不吐也云々、

○寬永之頃、于谷山牛嶺鼻有「大古松」覆出于海波之上十間余也、而四五間之間者如「丸木橋」而於四五間之末生「枝葉」于左右、其如「筵」然焉、高者自「今牛嶺」高也、然此時代雖多「大胆」早業之壯士、步「渡五六間」至「平所」吹「天吹」之士、獨之昭耳、而外無有「一人」也、會「合三才」衆于「爰」每、之昭必至「松之平所」吹「天吹」矣、人以「大胆」爲「不及」也、而呼「此松」号「久保松」焉、其後及「延享・貞享」之頃、牛嶺之鼻崩落、此古松俱落枯矣、之昭吹「天吹」於「久保松」者、寬永・正保之頃也、之時迄牛嶺下之通路非有「如今」及「于遠千河」之時人得「往還」矣云々、學「當流」之士「大概」守「教法」雖「不滯」寸刃、至「之昭」者常帶「三尺八寸」振之「輕麻骨」、故自「十八歲」及「三四十」之齡雖帶「之、至走山坂、校飛登木無不成自由、故雖一人以之昭常帶寸刃無難之矣、

○此時代諸人成「狩自用」也、故鹿犬多、每家而此內有「人喰犬」焉、然多「吠懸」往來之「于人」、於「之昭」及「老年」遇「于大之昭」打「込尾」退「門內」矣、是又人「不及」也云々、於「江戶」者稱「薩摩」之「今升慶」稱「美有」武威之容貌、氣質善而多年勵「當流」達「意地・業」、故有「武威」至如此狀、且「之昭」者能「射芸」、東鄉重尚五人高弟之一人也、如此有「器量」能「而忠直」有才也、故「光久公」綱久公殊秘「藏之昭」、仍賜「御筆・武器」之類多矣、（之昭者氣勇決、而體力他大而業迅速也、故於「常之稽古」甚「滯心不鈍」業者、相「手畏」及「怪我也」、用「心于爰」成「稽古」、却知爲「流義」之

害焉、故早止「稽古」不怠「獨稽古」耳、且一生無「刃害」於人、故打「當流」之名不「富于世」也云々、

●丹生弥兵衛

○丹生氏爲「勤仕于物頭役」之時有「屋籠」、以「弥兵衛・種子鳥次郎」右衛門「令召」之、此時代於「不畏召者・速誅殺」之「国法」也、然此屋籠使「令於物頭」雖「召不応召・夜中爲打消燈」、依「暗室於屋籠」無「侵入者」、故弥兵衛「不及令」属役、徑「切」入于「暗室」、忽「切」殺屋籠矣、初「切人」之時、依「暗室」切「先障・棟梁」、徑「手」負「右之肩先」、薄「疵」故早爲「愈矣」、其成「右手於自由」、不「似昔而失業」、雖「然弥兵衛」一生因「無洩」此事、雖「子弟妻娘」莫「知之」、況於「他人」哉、其「后經」數十年、弥兵衛「年老既臨・病死」、呼「子孫」初洩「此事」、告「子孫」曰、人「畏服弥兵衛之武偏」、畢竟以「有當流之業」也、露洩「此事」、人於「知之者」武名從之「衰行之緒」也、故「片言不洩」之也、今告「之」所以「戒汝等」也矣、此時種子鳥後「干期」、故諸人之「評判」多云々、

○丹生氏者帶「長一尺二寸之刀」、殆「緩鯉口」少「揚鞘元」、身則拔「出矣」、諸人以「謂無用心」難「焉」、或人以「之告弥兵衛」答曰、我雖「絲忽之間」不「離心于刀」、故「強固」鯉口「無異焉」、而曰、鯉口於「如此者」、至「拔合」与人「時我疾也」、既「拔放爲持・蜻蛉」有「勝云々」、案、善介雖「異与覚悟」、是亦一之「嗜也」、然於「當流教法」者、以「善介之覚悟」爲「本也」、

伊藤隆右衛門

伊藤氏者蓋「重方」之末弟子而、自「重利・伝」書「欽」、然「重利」遺「命于重方治」、於「阿字觀」之秘「伝」自「伊藤氏」令「伝授之」、

故押尊伊藤氏羅之矣、自此一事外無云云之言行矣、
山王下廉士或曰是也、

●山本宅右衛門

○山本氏、以時代考者、為重方弟子無疑矣、後年詳實跡、可羅重方弟子也、其苦之位亦有重方弟子之風也、宅右者大胆無欲而殆發明士也、為廉直所帶方貧窮、住西田山王刃荒屋矣云々、

○或夜山本氏行知音古朋友之処、枕肱為閑話時、古友之子某來于其座曰、某事此數年稽古鎗術不怠也、故得伝授少越人焉、然未可然向劍術者試鎗術之位也、幸今夜子來于爰、願留鎗見我焉、未言果其父叱之曰、宅右久隔歲月、邂逅來會互閑話、可期他日云々、宅右曰、於鎗留非隙取也、突刀者雖牡丹、棹者削鏡之、謂可伸比留於先、不動頭乍枕肱一言述之、遂閑話不滯也、有暫某以唐竹棹如教抱灯來于庭、是告山本氏、山本氏謂木刀、隨木刀不及灯、謂消其火令打消灯者、不見前後暗夜也、時山本氏飛出下庭、伊佐曰可突、其声凜然寸左磨志而、某為可突山本氏不出、先如打込磔、業神速打比忘久鎗及兩度、而山本氏突者連業也、上手鎗亦謂難向太刀業入座、又枕肱及閑話、其言行容貌不動声色矣、古友初見至于此、父子共大歎賞之也云々、

山本氏發明之言語、胆勇之行狀雖多、事長故略矣、
●日高与一左衛門

○日高氏或年在勤于鹿籠金山、時有暴惡者、無理切害

於人馳登小高所、成後、捕於松柏如猪之猛而、振廻血刀扣焉、金山中之上下為誅殺之、持拔身雖群集其下、迎皆恐彼之形勢、敢無進行者、日高氏居邸者去自是遠矣、仍知之有隙而來于此、於中途諸所告之者皆謂日高氏曰、早到於彼所、然日高氏不駭、如常步至山下衆人群集人所、不日他問人殺之居所耳、不滯一步進行高所、日高氏依山中帶脇差一本、長二尺計也、未及打尺、賊自高地飛下佐磨、以蜻蜓打切、附日高氏之頂上、日高氏拔合脇差切交于彼、古知刃切離大袈裟、賊成二磨呂比矣、衆人無不歎賞之矣、古老曰、日高氏自此働、於御城下帶長脇差之士多出云々、案、宝永・正徳迄多羅指多、元文・寛保之頃迄帶之士有而、其後一向斷矣、日高氏山中之因、旅動帶多羅差之替脇差、於日高氏業此時雖帶短脇差、於殺害賊可替無也、然習于日高氏、他人帶長脇差亦近無穿鑿乎、古人為帶刀短、為脇指、長是号太良差、

●伊集院主水久明

○久明者寛永九年生、重方末之弟子而、重方讓弟子之指南于重利、明磨之頃、久明年既及廿五六、芸勝于他人、其後師重利至、當流稽古、芸日々長矣、故重利秘藏之弟子而免許一子惣伝之密旨矣、

○久明留鎗者、令離牡丹、十者十、百者百咸打打、屬于地、妙也、重利門弟中日、使久明為步立者、雖三本之鎗、勿論不能突於久明之業也、使彼乘馬出十文字

之行路自三方可突之乎、然我無謂可突久明人矣、以此言久明之芸可考察也、

○久明者為京都御留守居役、老後在勤于京都多年焉、然有田中氏某(藤次兵衛)士、在勤于江戸度每修行雲平流之鎗術、或年得惣伝為飯國之時、自江戸用意突刀來京都于久明之邸、望槍留於久明、久明答之曰、以日老後日場所柄久不手習不肯、然田中不聞弁再三望之不止也、久明然留可見、於如此儀者曰、後之難說、呼筆史橋口善兵衛為證人、令有其座、燈蠟台于數所、最初打屬于堅、後打放于橫、木刀当突刀、徑当斷處、更見如無前後、田中之鎗不出少也、而久明日田中日、我於久明以示現流鳴于世、然及老後於留損鎗捨名是恨也、故今夜留損鎗者、則切殺子窮為切腹矣、然令迷惑老人令闕上之御用矣、子者未年若焉、謹已後可乎、田中俯頂閉口矣、(案、久明者不疑暗夜上手也、今夜燈置數所非為見出口、令證人明見打處為也)

○重利死去之砌、遺命于重治、使久明為後見焉、仍重利死後久明指南重治之稽古、十二打之伝授等都自久明伝于重治矣、

○久明業之神速對本田親純之業也、黑鷺原可山者業大也、久明者對可山業小矣、久明者業迅速也、可山者意地有余矣、不分勝負、同品之兵法也云伝也、可山者氣質雖不學示現勇猛果斷而、令人畏服之氣象也、仍案、使可山在勤于京都者、田中氏可不能望槍留者歟、

○正德三年癸巳十月朔日死去、年八十二、法名覺翁院殿本源淨心居士、葬南林寺殿、(重方死去之時久明年二十八、重利死去之時久明年五十九也)

意地、業共全備而無虧闕者聖之位也、悟道意地業者至十七八者賢之位也、雖然悟道意地者真之時究心光矣、至究心光業從于是莫不至也、故示現者以伝意地為伝、是示現之伝異于多流也、於久明聞有業未不聞意地矣、案、久明之業者甚勝、故意地從業起矣、以無業字士以業導之時者、為不達業意地從而惑也、

○本家四代重治

○藥丸兼慶曰、吉貴公曰、東鄉氏之示現流之伝授、至重利迄善吉、重位伝心之要旨全得、伝矣、重治者生而自幼稚之時、父重利煩中症、心虛軀癢痺久焉、終以此病死矣、伊集院主水以成惣伝是雖伝于重治、心伝之要或謂有闕缺、故自重治其芸或聞有不及于三代矣、伊集院兵右衛門久金入道紙用

●救仁鄉善兵衛入道伯水

○伯水初師重利、學当流、重利死去之後受指南于久明、伝打、故羅于此焉、伯父為地頭代、在勤于高岡之時、或夜乘酒氣其所之士歟、進折田樞五兵衛立合之、為醉之故雖留折田之大木刀、余纔當頭、故於本家卑下之、似久明業之小所為小業也云々、

○伯水後勤役、吉貴公之御供目附、然伯水於同家有欲報父之讎、幼若之士、名号救仁鄉某、(号友治云)年十

三也、伯水或日之夜明頃、与某共至「鎌之宅」、忽切害兄弟之讎、皆壯年之士也、其勳非「伯水」雖「壯士」不能之業也、況於「十三歲之某哉」、然為「披露」以「某之名耳」、而隱己之名焉、衆人以謂「伯水之助太刀業也」、仍使「糺明奉行」問「実否」、伯水答以「日非己矣」、公聞之曰、「伯水於成、難打之助太刀者、以「実者」可「善焉」、豈何隱之哉、為御存知之伯水、其后、公召于御前、直問之時、伯水於御直問、何謂可「偽落涙」為「言上」以「実矣」、公雖「惜伯水」對其職士有「不直之罰」、仍託「伯水之望」、退役令「願隱居矣」、故閑居于吉田郷鞍掛谷矣、改名号「伯水」、自壯年終一生於焉、豈不「惜哉」、

伯水雖有「好」示現之名、不通「示現之教法」、故心變替而或以「虚或以「実也、

重年公

奉称「兵庫久門」、在「加治木家」、御若年之頃暫學「当流」之時、被命「御師範伯水焉」、(自學「公当流于伯水、伯水之弟子為「繁昌」云々)

弟子多、

重治之末弟子盛成「稽古」輩、重治死去之後、或參「藥丸兼慶」、或參「伯水」、故世人謂「伯水之弟子」亦重治之直弟子多矣、如此輩之内及「伯水死後」、或打自「重治」謂「伝、或自「伯水」謂「伝、而對「初心之輩」談「奥意」間有之、其後位照兄弟為「飯国」糾之時、因「不持」尊形「伝書」、雖「知」打

之形止此說焉、於「藥丸兼慶」指南亦廉直也、故如此之說無一向「処也、

弟子多

伊集院弥八郎兼喜

兼喜者勤役糺明奉行、後有「罰配」流琉球之内大島、然糺明奉行之時、使「兼喜」糺罰之罪人、有「配」于大島、流人也、強力者而令「痛打」拈「兼喜」筋骨焉、再来又欲「打拈」時、兼喜持「包丁」立刻「落彼首」矣、此流人者因「不免」帶「刀」法也、打「拈兼喜」者重罪也、仍於「兼喜」者無「罪科」矣、包丁「実入」置籠裏「短刀」也云々、

弟子有

弟子有

伊集院寿甫

○寿甫者居「草牟田」元來貧士也、故引「入于谷山耕田」養育於家内之暇、或採「薪」出于「鹿兒島」壳之、知音之朋友買之謂「不令」壳于他焉、或年有「大罪者」、被「磔」于谷山境瀬戸之谷口之時、寿甫出壳「薪」、其夜於「朋友之宅」遂「閑話」及「深更」、通「磔」之前「飯」谷山之砌、磔之首手足「軋動」而如「生」、寿甫暫見之「独言」、昼為「死磔」夜動不審、馬繫于松之根、靜登「磔木」見之有「釣繩」、維「属于首手足」焉、故人隱「後之薄中」令「軋動」於磔、察令「驚」往來之人、則「飛下」、疾追為「隱居」三人之者逃「怪揚」大音曰、「我者伊集院寿甫也、逃去者追詰不逃一人可「切殺、留於「謝」

過者可免死呼矣。其声如雷声。皆失斗踣踞俯頭曰：因主人島津助之丞命成之。從自之心非起乞免一命焉。寿甫如先言助命去。仍馳驅早々以是告主人。故於切入寿甫謂不可助命一人。速類兩土乞免。許過。寿甫向後謂不可妨往來之人免過矣。自是寿甫之名高鹿兒島也。於重方末之弟子。日高・伊集院之兩士者為勝曰擊手矣。

●外城士某

○某之芸也既為上達。蓋以伝書雖示応某之芸之意地。因文盲猶疑惑焉。或時問意地于重方。答曰。当流之意地者不拔刀者也。某不解心。又問曰不拔刀善否。重方曰。雖落我首刀者不拔者也。某猶疑。思此言正直之實故。以不拔刀美為勝可成意地。思定矣。而旦夕臨敵合工夫不拔刀勉焉。或時於其鄉無理有切害人者。故所之士欲誅殺之。集多人數以拔身鎗籠取類為騷動也。仍人殺惡之。此所彼所之逃。隱于炮山。出不意欲為敵于衆人。故為不分明其居所分人數狩出之為誅矣。然某之行向自炮山人殺忽出來持血刀馳來。于時其守当流之意地者可成此時也。譬雖落我之首不拔刀而思定可死。抑於鎗本進于真先焉。人殺既近密切。属力於某之本首。徑却人殺之首古呂里落某之足本矣。時某知切落人殺之首。令于此初落着於当流之意地焉。重方聞之歎賞守教之厚矣。案某之芸之位起自天橋之位。故重方以窮犬二字之味述野語令悟之也。不伝何之外城与某之姓名惜哉。

速水新右衛門

○速水者坊泊之士也。而師重方學当流也。坊泊者重方以爲地頭所。或在重方赴坊泊數日滞在矣。速水是爲幸欲聞当流之意地。旦夕雖待重方之旅宿。來客繁而不能聞。或夜來客早歸得可聞意地之透。待座重方之側猶伺氣先之処。重方既寢速水亦属眠。然及深更頃重方俄高聲呼速水曰。或昔物語曰。或者野路行。然深難計有堀壁。横于路掛小木野丸橋。危甚而不能渡行。既為可脚躡之砌。於前野賊切害父持血刀立。右之者一目見之走渡丸木橋。馳属其所忽殺。離合。而后思渡丸木橋不知已也。速水聞之落着意地。自是猶長進当流焉。是又為文盲示天橋之味以野語可見重方之賢当流也。

□是枝加藤左衛門

是枝者仕重方。後号宅元。居住于加世田。蓋加世田之士。不詳俗姓也。以仕于重方粗學当流也。及住于加世田。以知已勉之業。纔有教于人矣。以曰宅元。或号宅元流。及弟子普積。越弟子多于師。仍或曰普積流。其業形于当流為齟齬殆遠。○於重方家來有曰武井弥左衛門。熟業越門弟子。此者勤打出時成仕手。數人也云々。此者勇猛之余過迷女色。為令悦密女徒。竟盜賊。夜々迫剥衣類焉。依偕為捕之不能。或夜令使重方之荒田之別業。於肝煎足輕中撰業為勝。忍置門之前後左右。以舞戶挟手足捕之。弥左手頭因不知此梅。帶一尺八寸之長脇差。待

兼舞戸之開以身闔明人、故安狹於身、雖拔放長脇差、仍一尺八寸不放、拔而掛鯉口三寸也、帶一尺三寸、速於拔放者、不逃一人可切殺之處、今夜弥左衛門長脇差盡運命故也、達雲之門弟衆評之云々、后掛磔突、水落不變色、曰、有常人之心者于胸、此弥左心者有膺下從容如此云聞、及突膺下死矣、見之人殆恐怖也云々、案、以仕重方如此、至業、意地、猛氣雖超于人、因不聞、當流意地之本原、却亡其身也、是亦當流之學士可存處之第一関也、恐後世如此出、來學士、並註宅元註為後世之誡云々、

普積

写心門梅梁、住持黒木郷何某寺、

長禪和尚

良右衛門

住持高城郷石上寺

後号元良居都城之町

東海徳兵衛

東海者住于肥前長崎者也、住長崎于近在郷郷土之類欵不詳俗姓矣、來于薩州懇望當流甚親切也、故重方感其志、教一之蜻蜒打、加以一言之意地、東海實深美哉、悟意地為己之業焉、或時郷人成群衆修行劍術、東海行見之嘲、呼拙、在師其中、怒而乞立合、東海曰、雖知劍術之意地、以日不知業辭焉、師兮怒而不止、東海不得止矣、立合容易打臥彼師矣、仍郷中之若者以東海為師、然東海以謂不知業固辭云々、

●岩元惣兵衛

○岩元氏者為業勝擊手也、或暗夜歸自夜咄於中途、忽然起、離無二無三切掛焉、岩元氏因無覺于身察為人違、請流々々良暫障、太刀先之後、知相手為人違、免此急難矣、而翌日參重方述之、免急難者誠謂重方之恩謝礼忝焉、重方答曰、子好當流、雖出精力稽古、未知當流之意地也、當流者為人違為不人違、於敵于我者、忽切殺捨者也、岩元氏聽此教戒、為思奴留喜仕方与生残念之思之色顯色、自是俄長兵法之位、其後在勤于武江、与相手三人及喧嘩刃傷、打果三人不負薄手一ヶ所也、聞此左右則一人參于重方、今日之御使告、使岩元氏喧嘩之左右、重方圍碁之處、聞此一言、投碁石歎息、嗚呼岩元氏花々敷日有働頗及落涙不止也云々、

綱貴公

○重治

藤兵衛

○寛文十二年壬子七月誕生矣、重利年四十九歲之時生也、○綱久公於江戸聞生重治、悅喜在、為重治名代、親類召碁山次右衛門於御前、賜御料理、(三汁七菜)、頂戴御盃、御自身御看賜之、其上御祝重治、令拜領、綱貴公御諸士踊被召、處之十文字御紋付御引羽織、蒙可致陣羽織之旨御意、且入念可養重治之由、重々蒙難有尊命者也、重利者儲女子耳、凡至五十歲不產男子、

仍可致養子、可繼家統之旨度々同御内意之処、以可出生男子、難計之御遠慮、無御取揚、然重治出生故、殊及御欣喜、如此至賜御祝、御下國之節猶又召重利、賜御祝、可有御覽重治之旨蒙御命之処、翌延宝元年癸丑二月十九日、於江戸、公俄御逝去、仍無其儀矣。

○重治者重利之高弟自伊集院主水久明伝十二之打矣、示現之伝心于今全備無闕也、然有此難自久明以伝也、叔父善介過猛武悟道業、意地、使善介為長寿、於伝打于重治者、豈何得有此難哉、黑葛原可山・黒田頼春之雖、兩賢才、嘆息而歎、當流之有闕矣、仍兩士以伝処、欲伝于重治、然重治以日雖與旨蘊奧、無虧略不肯之。

○重治生未幼若之頃、重利煩中症、家風之嚴重也將向衰、故重治之素立不及重方、重利也、故改過之有一儀、改過之后無世人門弟中一言之議、是亦可謂器量也、此時叔父酒勾氏守義、叔父武氏施仁矣。

○古人多曰、重治者文盲也、雖業勝有不達意地之本原、故其品不及重位、重方遠矣。

○重治為家督、初也既因窮所帶、去重位翁拜領、家久公之宅地、引入伊集院腦木、居住于爰、有年也、案、重位以來三代者門人之誓詞血判也不失一枚、是歲于數櫃宜格護之処、后置所狹置于馬屋之梁上、為出火、謂令燒失於此所歟。

○吉貴公御家督御初入府之年、上覽重治門弟中兵法、重治

打煎之打上覽終所、公望鎗留于重治焉、重治有言上曰、除近習詰之輩、公曰、秘鎗留至如此者不及御覽止此事矣、後黒田頼春聞之謂重治曰、有鎗留之御望者於當流、大幸也、言上鎗術之士出于爰、君公其外御家老以下近習詰之於中、豈何不留之乎、重治及後悔也云々。

○正徳年間初頃歟、吉貴公被召出重治于御城下、賜屋敷作諸士之稽古所、賜之、其上因困窮所帶、為御救賜御切米百五十俵矣、自是流義又令繁昌者也、於引入腦木居之時者、非當流親切之志、學他流并當流之異端輩多也云々。

○享保十八年癸丑九月十日死去、年六十一、法名号、物外院一運良機居士、葬于南林寺殿。

○石原喜三左衛門入道愚庵

○愚庵者於今鳴雄名于世之士也、當云、雖示現流上手、聞不孝于父母者、此愚庵以腐藥履可打碎其頂也、雖示現流下手、聞孝于父母、此愚庵自三間口可拌也。

○愚庵二十歲前後之頃歟、初為在勤於江戸、出足鹿兒島渡海、西海之時、有便船之僧、對乘組之輩語、以悟既生死之界、不知其成手次奈古、飛入于海、可溺死于海底、拔諸肌、取僧之手、引寄于船端、僧忽變面色、言語震謹、合諸手拜愚庵、謝過言、愚庵曰、誠知生死之界者、想不言之界也、汝輕出言之者、真似荷、德而為貴于舟中之輩、工也、以後出一言之慢言、則此為若者可沈于海底矣、自是懺怖愚庵、勿論而、舟中初会之

輩亦殆感愚庵之胆勇、重之也云々、

○愚庵或時在「動于江戸」之時、或日列立朋友与一人、宴樂于吉原遊女町、臨日晚、自吉原過衣服坂之頃、列之某忽變顏色曰、我忘鼻紙袋為何、愚庵曰、日既近暮、然為入置難、捨書附如何、何某曰、無有矣、然心易於鼻紙袋、可然之數也、至今可為如何哉、某又謂無余念、共進步之砌、既至塩留橋、列某曰、噫、残念哉、忘鼻紙袋、今、愚庵曰、猶余念有殘乎、曰、有殘矣、時愚庵引出我之鼻紙袋自懷、投入于堀中、我亦捨鼻紙袋、然一点舞障心也、子亦忘彼者可捨之、思放數米而徒無費心氣矣、列之士為感服也云々、

○愚庵曰、將起忿怒時者、使此氣抑籠臍下、加分別可出一言、不然必有躁卒之悔也、

愚庵語黑葛原可山曰、壯年之時謂理屈者、勵氣謂之也、老而今思之者皆虛言也云々、案以勵氣猶為虛可察其心也、(愚庵者、因賴暫役島津帶刀忠雄之与力勤、然有不合于心而愚庵諫忠雄不肯矣、則斷之而勤役大番、良暫而又命御勘定所小頭焉、有如何思乎、纔勤日數三日、斷御役成無役、無程隱居号「愚庵」惜乎)

●相良狩野介入道落着

○落着者一生無為恐怖、而終焉大胆勇之士也、隱居之後者惣髮而白鬚髭為美長、殊愛之矣、雖及老翁、專耳目齒手足、謂不劣、以老不辭于壯子而臨死云々、可見其氣象也、

○或年在「動于屋久島」、初約同役曰、於起事者必二人熟談而可濟其事也、然有屋籠及騷動、落着早詰込忽打果之焉、後同役聞之難矣、落着曰、相談亦因事、子勿難我、以人為尤矣、在「動于屋久島」或日、与數人登屋久嶽之絕頂、既及下道至「国見石」之時、雨雲重山下、聞雷声于山麓、落着至「国見石」之舌先、謂尿于雷神良久尿于雲、令見之者震身立身之毛、然落着者容色如常、故各其恐、大胆也云々、自古無有至此舌先者、而島人之不聞、伝也云々、

○落着者以為「異人」、網貴公秘藏之、或時落着諫公曰、雖謂「公理屈」猶愛酒宴女色、豈不拙哉、乞止之、於此落着者雖至貴人高官、至愛酒色之心決然斷矣、久焉、其后、公有試落着一点不動心也、故公歎賞落着矣、為事長不詳之也、

落着老後、來黑葛原可山、遂閑話猶繁矣、或日語可山曰、我節義衰甚矣、昔者雖踏込五百目包于木履齒、同与土石投捨于溝壑、行過、心不動一点之氣象也、今者於無人之見者、謂成可入于扶之心而、共大笑也云々、託己曰「士風之盛衰、処也云々、」

○落着者老後之後亦帶大身之刀大小矣、或日出、会老古友皆有雄名輩也、而各帶細身矣、仍坐一人向落着、臨老有難帶太刀焉、落着曰、汝等者可遇花婦心也、落着者可遇古後家之心也、古後家者以大物不打屬大打者不為「合点」者也云々、其人閉口云々、

○落着者酒勾大藏、武玄機三人、自幼少至老之知音而、

互雖「不殘心不」知言、無及一言不快矣、而雖「困」
甚指「象戲」角力飛校之成、遊戲之間、如「童蒙狂人」見者奇
異之思、又如有「節不吝矣、誠有無懷氏民之風」也云々、

郷田源介

○郷田氏雖「聞達」當流、不聞行事、待後之識者也、

白尾戸後右衛門

○白尾氏者大男大力也、又勝「雲平流鎗術」弟子多、其名高
于當世矣、古老曰、於「江戸」稱鎗之名人、立合与猪子某
（紀州之家士曰「孫右衛門」）白尾氏鎗先不進、自是名少
向不奮云々、小倉治右者白尾氏之高弟也、

○或夜有「客」来于白尾氏、客見「帶刀于白尾氏」、然研而不
属刃也、白尾氏難之、客以不替答之時、白尾氏出新
服之縮面羽織令切之、半亦不通也、于此白尾氏拔打
所帶之脇差「切羽織」、其切先至「板床」留焉、而曰、不
属刃者不通「真綿」者也、客感見其驗之急、悔「失言」矣、
網責公為「御差料」、使「波平安國」作「大小之御腰物」焉、
而使「白尾」試「業」、白尾掛「二胴」打「込平土」矣、公
甚満足也云々、

本田甚右衛門

○甚右者勤「騎馬役」年々在「勤于武江」、或年下「着自江戸」類
家中為「來祝」之時、嫡子某（後号「甚右衛門」）此時曰「兵
助与」頼「波平安國」謂「作刀出来宜切亦勝」、見父之甚右、
甚右曰、汝者可「逃者」也、曰「不及見其刀」却忿怒焉、某
曰、我雖「不肖」也又知「士之節義」、何敢為「逃哉」、然父曰
可逃、於「類家中失面目」既極也、然有「思慮」及「此言」

孰如何、甚右曰、汝于「今学」示現「敏」、日然（某者重治之弟
子而、大重・美代同「位打手」也）、豈何可「怠哉」、甚右曰、学
示現者不頼「刀者也」、頼「刀時者無刀時」、心憶而及「逃走」
也、然今汝之「一言頼刀也」、因及「此言」矣、於此甚右者
丸襖之時敵持「正宗之刀」雖「切掛」、以「腐葉履」打「破於頂」
之味謂「不疑」、某顔色「決然使」人恐怖焉云々、

小野郷右衛門

○小野氏或日參「能学寺」寢于一間「尼」人來与「住僧」成
物語及「生死之沙汰」、僧曰、尼者元來因為「女性」、可
未悟「生死之界」也、如「僧者於生死之界」得「悟道」久矣、
小野氏聞「此言」待「婦尼」及「婦小野則自一間」至「僧之居
間」、飛「掛于僧」引臥之、乘背、拔「脇差」押「當僧」于咽曰
悟「生死之界」實者直「搖落首」可為「成佛」、責「返答如何」々
々、僧合掌拜「小野氏」謝過、乞「一命」千言万語、仍下
背追「取刀」婦也云々、

吉田甚兵衛

○又号「新右衛門」、吉田氏者當時第一之「沈勇極真」之生質而、
貴「果斷不欺」一言一行之「士也」、故為「衆人」被「崇敬恐怖」
矣、誠謂「不慢童稚」不「恐鬼神」是人也欤、

○吉田氏往「來於行路」之時、雖「當歲之幼童」為「踴躍」而遊戲、
及「通融其側者」、必屈「腰出而手」謂有「御免」而過矣、
不欺「幼童」可見也、

○吉田氏或夜出「夜話」至「朋友某所」、及「御家御腰物之物語」、
吉田氏記憶強語「其次第詳」及「深更」歸矣、然及「至中途」
御腰物之內一本之於「寸尺」起疑、婦于家見「書記」果有

長一寸之違焉、故則至「右某所述之謝失言」矣、可見「慎一言」矣、此時雖「朋友之某」、吉田氏立辰以來、考有「己之失言」之刻、自「門外斷略儀」及述之、初為「安心」也云々、

○古老曰、重治之初弟子、望早捨長木刀以上之稽古於重利之弟子、或打詰之奪打手之名多、或年以之告吉田氏、吉田氏曰、衰者勿來我所哉、若於來切此鐵腹耳、重治之弟子聞之身奮而恐此言、自是此事止矣、至重利之弟子不通業與意地亦、或伝授奧意論意地之末而已、有「所謂似兵法、如斯之輩臨」老後及蒙「職名」也云々、

○吉田氏或日間「類家」至「內證」戶外不入于室而飯焉、其類家之息男集「同門弟於客過所之庭稽古鎗術」、其人数十人計也、其中一人之某年良以長他知吉田氏、吉田氏隔「金竹之柄垣」過「庭上」將至「于門」出去矣、時某自垣之透見吉田氏、為「老敷」之曰、吉田翁留鎗可「見乎」、吉田氏屈「曲体」掛于前、突「古都京都於杖」、作過謂「応」過三四間焉、時某猶為「老敷」而小聲而如「独言」曰、翁既「老衰」矣、昔者雖「建芸」於今不能留鎗焉、吉田氏突「古都京都」過四五間至「中門之前」、則「踴呼」某曰、子今之「一言正不通于耳」、以我年老謂不留鎗如何、正可聞之也、其「声音既破切凜然須左摩志、某恐怖曰、否以非謂貴翁答之、吉田氏老耳謂預面働、出去于門之外矣、庭中之輩初復「顔色」云々、

○古老曰、學者之輩以吉田氏之美質、誦「聖賢之書」拔才

德、為後世之人物「豈不惜哉、不誦書矣、」
稅所弥五大夫員外

田代伝兵衛清方

○清方之示現流友有三四輩、中一人者石原愚庵也、一人者東郷玄庵也、愚庵者実家之從弟也、故殊每度來会而及意地之穿鑿吟味、中不及言語之至「蘊奧」之時歟、互掛「声打」聲、幾世留為之折、茶碗底「響破」而不知「夜明」也、當時之打手雖「臨」老大概如此矣、（清方者橋口氏二男也、而成「養子」也）

○留物稽古者、至「打留兩斷」者、於木刀於下段「直引取焉、不打兩斷」者持「未來」脫「打出」焉、打出及俯「頭捨」木刀「引取」之法也、然及「重利」之代于末此法或有「魔」矣、於「或日」之稽古成「清方」打出「仕手」不打兩斷、然不取「未來」不脫「打出」而引取焉、清方立打「倒仕手」焉、仍互將及「論議」也、時重利曰、清方雖「打倒仕手」謂叶「当流」之教法「褒美」之、仕于雖「被打謂」違「教法」戒之、然共「打兩斷」与「不打兩斷」皆採「未來」脫「打出」、打出以俯「頂仕手」定可「引取」之期、及今無改此法也、

（清方嫡孫田代伝兵衛清香、暫師「藤十郎実勝」学「当流」、或日參「実勝」之時、実勝以之告「清香」勉也、但不及「古教法」也）

種子島次郎右衛門時貞

（時貞者和田譜岐守正貞嫡子而、母者重位女也、成「種子島」甚四郎時任養子也、仍重位外孫也、重方甥也、然其為人「不合」重方之氣象也、故重方不免「伝」当流之打意地而

没、成重利之代、以從弟時貞、類以乞免、伝授、難默止、而授書一卷矣、此親切為授之、先与鉄砲之伝書一卷、故也、時貞者有工、出事之才量、故因此一卷、作意伝書、作大卷物、且工出於業多也、而欲広之無因、辛勤役于物頭之時、役与力、蒲生士帆足藤左衛門也有授、劍術之器、而、以帆足為弟子、伝授之、曰、我者重位翁正外孫而直伝秘密焉、帆足是為「実事」親切修行多年矣、而熟其業、以日示現之妙術、広称于世、故弟子多、而其中加治木之家士江夏五右衛門、以業勝得惣伝、弟子多焉、此流自帆足、広于世、故曰帆足流、或曰中原流、自種子島成、師自称「古示現流」矣、夫古示現流之起如此、故正伝悉廢都變、化他流之傍布者也、○時貞生質、譬以示現之正統之打与伝書、雖伝授之、以己之工、為損益之資稟也、重方正知之、故雖一言一打不伝之止矣、然重利授書二卷、故至後世、生朱紫之迷矣、不統父之志者何哉、予聞師位照、先時貞授重利書業直書、射法書也、後重利授時貞書者、燕飛書聞書也、重利因不聞砲術也、仍亦不授打也、故時貞工出十ヶ条業、授帆足矣、

蒲生士帆足藤左衛門 — 加治木家士江夏五右衛門

日置家中中原喜左衛門

（中原氏者久傳家人也、故惣伝之後説、曰于久傳、以云々之秘密得惣伝、而可令惣伝于久傳也、於本家雖

有稽古、不經多年之執行者不可有伝授也、且本家者三代限而正伝絶矣、仍久傳歸中原、学帆足流也、久傳及壯年之頃、帆足猶在矣、仍招于鹿兒島、以極老叶不肯、故久傳至心学岳寺、而会帆足、自帆足得直伝云矣、

島津左衛門久傳入道

島津左衛門久甫

□種子島氏兄弟（兄曰權介、弟次兵衛） — 代々取弟子

弟子多

於弟子中、清水某（源右衛門伝子孫、猶令学之）、上原某（金左衛門）、黒岩某（正左衛門）、深見（安哲、島津本久豪家来也）之類、有彼流於名云、
鹿兒島上町町人佐伯本左衛門

（佐伯者有、誤自幼稚出入東郷家之処、其生質不似商家、廉直也、而懇望当流親切也、故褒美之、令教習表之芸之処、真実之好人而表之業長練久、而猶更懇望奥意不止、故感其器量、以伝打窺、光久公、雖町人其心正而於不劣于士者、蒙可致惣伝之命、仍伝授与打伝書矣、伝町人於打此佐伯一人也、此者臨終題心不去不來詠、辭世之一首、

我カ身ハ川ノ底ナルウツハモノワレテハモトノソノマ、ミツ

古老曰、惣伝者雖芸勝不免於家来也、然令惣伝買家矣、故時之町人曰有親疎、負、議重利亦多也云

々、○重利以此例、位照及貧窮之為得助力、猥雖家來町人數打有諸人譏之矣、以之見之、伝打于佐伯者重利之過明白也

△薩州者 家久公以來禁他流之劍術矣、故世々 国君崇敬当流耳之上、元禄以上者屋籠減打多、繼打・意趣打亦多、因染也、仍以器量武偏欲鳴于世之輩、無不学当流之士也、然於今恨語洩聞洩不羅之學士多、且待後之識者焉、雖然、於重利以上之弟子、譬伝授愈伝之尊形、於今雖格護于子孫之家深櫃、可譜之不伝行狀之事跡勿羅之、無益後學故也、併是其人之曰不幸歟、

○位照

藤五左衛門

○元禄七年甲戌生、母比志島氏某女也、産位照之後早世矣
○至位照迄、自及三歲致於初稽古、成五歲自正月五日之稽古初致稽古初、而於門弟中稱善矣
○位照至廿歲前後之頃、有不為出精于稽古之時、仍重位之高弟大重・美代之輩笑止之思焉、或夜招位照于洲崎、異見于位照、令出精于当流也、位照答曰、我之芸者勝子之輩、故与子之輩為稽古時者合業過耳、故与各共雖出精於我無益、故我者成独稽古、無怠耳、若疑我言者、鎗・薙刀其外何武器亦持来于爰、向于我可見其驗也、其氣色顯然見不疑之色矣、大重以下感服此言、初位照之芸知勝于己之輩矣、

○位照為繼母二階堂氏女、不堪惱心氣之苦而忍出於家、重治亦不知其行処、有至日州高岡辺之說、故撰勝業使肝煎足輕二人・足輕十八人捕之、故急趣于高岡尋問鄉人之処、告以其形謂至界目、令急追行焉、故猶急行矣、時位照冠竹皮小笠為簪、突小杖帶短刀、初見之時者各我捕之進行、位照顧之知捕己之徒、凡及隔二千間計、斷当杖于頸立不動焉、二十人之徒一見之恐怖其形勢、雖一人不能進而猶予狐疑扣焉、時位照高聲呼曰、汝之輩蒙命為捕我可来也、汝等雖欲捕我、我欲逃去於爰、切私汝等不難矣、然背君名切害汝等者曰非本意、投捨短刀与杖属捕矣、位照此行士不似合重罪也、然以伝重位以来之芸能惜之、以國政之正令不論而、詎痛病之惑乱令閑居一室矣也、仍位照閑居一室有年也、
○繼母益亡位照以己之子実勝為繼家督也、故苦位照益甚、既為及絶命矣、故位照不堪辛苦、猶不改舊出欲去之初意也、故令遠流于琉球之内大島也、故位照者不繼重治之家統而終惜哉、
○岩切氏某曰（重治弟子、号助市、二段伝授之打手）問伝書之文言于重治、必令尋問于位照矣、以是見之、重治者不通伝書云々、
○位照配流于大島居之時、白尾四郎兵衛（享保年間、為御目付役在勤于江戸之時、有罰遠流于世曰江戸崩之時也）亦居配流于大島、白尾者位照之從弟而又重治之弟子也、故毎々会合成物語、或時及說話当流心術、

白尾者鎗術之師匠家也（白尾戸後右衛門嫡子也）、仍白尾曰、於「示現流」者有「心之沙汰」、於「鎗不及」心之沙汰、業耳而濟矣、位照曰、白日之鎗者業耳而可「濟矣」、於「暗夜之鎗」者如何、不及「心之沙汰」而可哉、白尾閉口矣（位照論心皆用「業之心也」、非「對天地之道」而不「恥者」、誠不知曰「不免」工也、不察有「此迷」也又「起」久哉）

○位照雖「文盲」又全「教法」、粗說「話」傳書「導」弟子、面尊形削「木刀」、其品雖「比三代」非「論同日之」兼「此五事」、於「後世」又少歟、

○位照直「業之儼」者必說「聞其理」、自「開心」入故弟子「易順」教、

○位照・實勝多年配「流道島」矣、當時於「鹿兒島」無得「一子」惣伝之「授」而以之可「伝」之于後子子弟、而當時將為「虧」闕焉、故「國君歎」當流之為「儼」、至「延享」之末頃、以「別儀」赦「位照之罰令「飯國」矣、

○位照「飯國」自「大島」居「嫡子實勝」之宅地、此時師「位照」學「當流」之人多焉、然其後及「寬延」之頃、以「同義」又赦「實勝」之罰令「飯國」矣、自是初「嫡孫」（曰「弥十郎」、後「藤兵衛」）門人悉捨「位照」師「實勝」學「當流」矣、是「位照」病「人」而世人令「卑下」之故歟、故「位照」不「快」之「移」武村之在郷、行「廻」于外城「指南外城土」、以其助力「繼命」、不預「嫡子實勝」等之介抱、故貧窮甚而及「難立」朝夕之煙矣、實勝者「表之業雖」達者、為「無筆」於「奧儀」之指南「殆」也、故「位照」當流為「建統」雖令「飯國」、歎「不全」備「奧儀」之伝矣、雖「使不改」初意之弟子兩「輩」伝之、其器拙而難「通」矣、

於「外城」猶然矣、故「位照」歎之久焉、然及「極老」、求「得」有「才器」一「兩輩」之弟子、令「惣伝」當流之業、意地矣、而對「兩弟子」每々有「告白」、盡「當流」之秘密「兩弟子」者、是所以為「本家」永年之補佐而敬、家久公御賢慮「繼重」位之志也、子之輩察「我遠慮」勿怠「流義」矣

○位照者「潛」也、不窮難「顯」蘊處之味、實勝者見「芸」也、故雖「常」之稽古「盡」出己之芸、故常人雖「稱」實勝、於「芸」之業「無勝劣」也、至「奧儀」之沙汰者、實勝不及「于位照」也、故於「實勝門人」者知「業耳」、不知「當流」自他「格別」之要旨、於「位照門人」雖「不伝」奧儀之輩、知有「自他格別」之旨「不迷」矣、

○或人曰、位照「元」來上戸也、然不「飲」一滴也、是如「重治」禁止然哉、又預慎「身不飲」酒乎云々、

○位照者資質「靜專」也、是亦得「養」于「當流」歟、年雖「及七八十」之老齡之時、至「大暑」無「怠惰」之色、至「嚴寒」無「厭」霜風之色、常置「兩手」膝上、為「食時」亦帶「短刀」、守「一」生家教「不怠也」、對「弟子」自「昼」至「終夜」、雖「述」於「意地」業強剛忿怒之說話「無乘勢」、又無「顯」飽捲之色矣、又異人哉、

○位照「安永九年」庚子初夏之頃歟、察「羅」老病去「武村」之師庵來「嫡孫」之宅、（此時「位照」為「格護」處之「當流」奧儀之秘伝書數卷、附「屬嫡孫藤兵衛某」、蓋「秘決」不「殘」伝授也、當「流」悉全「備」於「藤兵衛某」矣、雖用「鍼藥」無驗、而同年「月十日」知「死刻」是告「實勝」等、結「跏趺」座合掌死去、年八十七、法名「奇鋒院」達道伝心居士、葬「于南林寺殿」、

○実勝

藤十郎 重治二男也

○元禄十二年己卯生、母「階堂氏某女也」、(重治年廿七之子也)

○実勝者資質猛氣也、故其業大而烈能不能及庸人之芸也、位照成、病者之後、代「父重治」或「有指南弟子」焉、故自「若年之時」為「弟子」貴也、

○位照被「配」流于大島之後、実勝對「兄位照之嫡子実防」有「不丁寧之聞」、吉貴公被「聞召之」殆御忿怒有焉、使捕「実勝」遠「流于琉球之内沖之水良部島」、以「実勝母」被「配」流于種子島「矣」、

○寛延之頃、以「与位照同義、赦一生遠流之罰令「飯国」矣、仍代「家督実防」成「師匠」、指「南惣門弟之稽古」、時実防雖「壯年」氣質「遠」、為「流義未熟也」、

○実防進退元来不如意而、不能「介助」実勝之朝夕、故実勝「飯国居」御城下之「辺路之荒屋」所帶貧窮甚、仍或對「弟子」有「乞助力」、

○実勝文盲而暴惡、又好「大酒」、

○実勝慢「芸雖」多欺「人失」礼義、人恐「怖彼之暴勇」無「日」一言之異見者矣、或時実勝參「于藥丸活慶」、活慶謂「彼日、勿飲酒、子者飲酒有「乱行」也、宜禁之、実勝亦面俯「頂首」之、然雖「一日不能禁酒」也、

○藥丸活慶謂「予日、世人以「実勝」思「当流落着之芸」非也、只達者芸也、予亦為「若年疑」此言焉、其後実勝及「煩」死病、惱「乱心氣」至「成狂言」云々、以「之感」活慶之見識、

知「血氣之芸」矣、

○実勝於「此病中」、授「十二打于弥十郎某也」、(位照語「于子、実勝大病雖」及「甚勞衰、歎不伝」打于弥十郎某、而或日「作」寝漸持「箸伝」授打、時打出者勳「伊地知弥兵衛、外座同座」者四本喜左衛門・池田清八・山口佐平次四人也、此輩日「得」惣伝、於「当流」者謂「問伝者也云々」、

○実勝者為「他流」被「恐怖」矣、実勝死後至「于此」当流之「打手」無有「起焉、以之考之、又日上手可乎、

○宝曆六年丙子四月二日死去、年五十八、法名号「法元院殿」義山良勇居士、葬「于南林寺殿」、(実勝死後弟子皆參「弥十郎某」請「指南、于時弥十郎年十九也、実勝有一子、号「藤助」伝「與意、猶集」弟子多而指「南」之年有焉、然近年欲「集」本家一所而令「止之、仍其後無取」弟子、案「藤助」芸為「未熟成」田舎行、於「多取」弟子者不「計、遠慮疾」属「于当流」為「止之歟、不詳其心事矣、藤助尤貧家而勤」田舎行之役事耳、有「于宿」頗希為「所察如此矣」重治三男伊集院平六

○成「伊集院氏」養子、母「実勝同腹也、始号「東郷後藤兵衛、兄二人遠流之後、重治無為」惣伝之子弟、仍重治弟子之輩歟有「変事」闕「流義、自」弟子中「願」平六令「惣伝、故雖」不叶「重治」于心、伝「授四段」目于平六矣、故以重治死去之後、以為「伝処」之打「不殘授」藤右衛門実防矣、
実賢

善助

○宝永六己丑年生、母「実勝同腹也、

○實賢者居「本家西之谷持地屋敷」也、寛保之頃葉丸兼慶讓

諸弟子之指南于實賢之后、代「本家」實賢於「西之谷」指南諸弟子矣、其后寛延之頃、位照・實勝飯田而指南諸弟子也、然猶師「實賢」學、當流之輩多、然實賢業不及「兩兄」

有「間而無筆不通」伝書、故無「聞于世有弟子」矣、

○安永九年庚子三月廿五日死去、年七十一、法名号「諦良院」自參觀然居士、葬「于南林寺殿」、

重治五男某

○長兵衛云也、有「罰遠」流于琉球之内徳島、因有「重罪」於同島「切腹」、

大重仲兵衛

宝曆初頃病死、年六十有余、

美代六郎兵衛清相

右同、

寺山太次右衛門用央

○用央好「儒書歷史」、且能詠「和歌」、有才無欲故有名「于世之士也」、豊田乞「立合」参「于東郷家」之時、重治先雖「招用央」他出也、故招「伊地知氏」云々、

●伊地知清右衛門

○重治之時、享保中（兄弟遠流之後世）島津左衛門久壽家来而居「住于日置郷」、學「林捨流」之余派、曰「豊田五郎兵衛」者来「于本家」願「見重治之立姿」、仍使「弟子伊地知氏」立合豊田、豊田持「木刀」少垂「切先于後」、構「大冠打」而掛之所、清右飛掛打「豊田」之天窓「流血夥矣」、豊田高弟同家中有「島宗栄從」来「于師」見之、清右打「屬豊田」見「宗栄」、

呼「楚王」占察坊主亦立合欵、宗栄聞「之周章騷動而早々」逃出焉、立合者被「禁之國法也」、故重治蒙「御呵」、御切米七十

五俵被「減」、伊地知氏者暫被「障」、置御奉公也、豊田者立合以後被「禁」徘徊於鹿兒島也、豊田流「一往將為繁昌」、

自「御城下士」亦學之輩雖有之、打「伊地知氏」之后失「弟子」云々、（此時実防居「重治」之側「見」之也、余自「実防度」聞「此物語」焉、其外参「合于稽古」之輩見之多、

豊田者非「知劍術」者也、因「擊」之伊地知氏蒙「御咎目」、仍記之、稻津打「水野」者非「同年之論」也、但伊地知家之說者夜五時分之立合也、伊地知木刀取「二本」、以「一本投」渡豊田、豊田取「木刀」時拳打「統打」頂也云々）

家村仲藏

兄玉幸右衛門

愛甲源左衛門

○愛甲氏者曰「救仁郷伯水之弟子」、案、重治弟子而、重治死

去之後學「伯水」伝「打鉄」、故暫羅「于此」也、

△重治之弟子雖「甚多」、右六七人之輩数年出「精于当流」、故于「今門人」中知「其名」也、仍催「七人」羅「于此」、然及「教鎗留」一人不能「留鎗」、而「不堪」被「突如」他流、当「厚皮于胸」、雖「及于鎗留」猶為「突、不堪」心苦、而終不至「解皮止稽古」、雖「位照・実勝」亦不「離」此類中也云々、且於「重治弟子」曰「東郷正庵」有「打手」、為「大坊主」知「于世」処、而

名均「与大重・美代」、然於「江戸」立合加藤權兵衛、為「加藤」被打「二度」、故兼「學天真流」矣、是少雖「有業為」不

知「示現」之意地也、因除「此系図」者也、

重利至弟子有鎗留也、重治至弟子無留鎗、以善吉之言考、不留鎗長刀為彼被突者、非為神教天眞之劍術乎如何、答曰、鎗留者不易業也、故弟子俄至難矣、故師留鎗打長刀令見業、以眼色・音聲示意地、而感化弟子之心所進、至重治斷此教法、欽、

実昉

藤右衛門

○正徳元年辛卯生、母竹下氏某女也、(位照年十八之時之子也)

○実昉歳四歳之時、母竹下氏女離別於東郷家、歸竹下氏所、時実昉因為幼稚、從于母行于竹下氏所、被養育于外祖父、享保十八年重治死去之後、歸于我家、継家統為家督、于時年二十三也、祖父死去之後、數行業丸兼慶与教仁郷伯水之所、成稽古出精矣、弟子有少矣、実昉謂余曰、自祖父重治・伝打者、立・双・越之初段耳也、於本家・伝打之可見難焉、

○実昉語余曰、祖父重治死去之後、叔父平六為以伝授居処之打、不殘伝授于実昉矣、雖門人有不知之焉、時行伯水、伯水告予曰、子雖本家、未不可伝打也、當時伯水一人伝十二之打于久明、知之可伝授于子、実昉答曰、祖父伝四段目于平六、伝平六于余、而不疑、又不及伝授子、在失伯水勢之色焉、実昉者含如施面目之心矣云々、

大河平休兵衛(免許四段目、仍雖不知其位記之、

為抑堺目代々居住飯野也)

●税所正太左衛門(免許四段目、仍雖不知其位記之、出水士、勤暖役)

(有国分郷之士曰坂本某者、好号天真流劍術、或時来于出水郷欲広己之流、然為有税所能打示現流之名、悉止示現不替天真流、仍坂本欲打臥税所乞立合、税所不肯曰、於示現流不及立合、為他流以曰被打非業、然猶強之、故不得止立合之、坂本差出木刀于前進寄、税所指横指直打坂本之首打倒也、坂本起上望今危於焉、税所曰、於真劍可有命欽、如見死人再不立合、自是止天真學当流之士多云々)

勝目周左衛門(免許四段目、仍雖不知其位記之、阿久根之士、勤暖役)

△右位照弟子三人、為居外城予不見其兵法、然聞為好人於当流、且位照數以好業囑之、仍羅于系図也、右之外雖有位照惣伝之弟子、助介位照之貧窮而切為乞惣伝、不止而輕雖免許四段目、一向不知業之趣意地成格別矣、故除之不羅于此系図也矣、

●葉丸正右衛門兼富

○兼富者不成本家之弟子、伝葉丸家伝来之兵法于慈父兼中、而於隣所朋友之内、為本家弟子与輩間成稽古耳、而及年二十焉、位照以因流義有由緒葉丸氏、聞来兼中宅有成当流之物語、見兼富知有当流之遠器、故

欲為弟子令德傳、而述以此旨于父子、有猶云々之
訊為父子肯之、仍明和四年丁亥三月廿三日、位照來兼
富亭請初度之誓詞血判、初段二段目免許之誓詞血判、
如旧式傳授之、予亦以與兼富同義、今日傳授三段目、
於四段目免許者雖及固辭、以有厚望之趣、因強之
又肯之、故同年九月十八日來臨予之亭、免許四段目打、
自是兼富晝夜盡精神于當流多、不經歲月而既得業之
迅速矣、其頃兼中從弟清水某（号休右衛門、実家黒葛原也、
仍為兼中二從弟也）來兼中宅、於書堂及論義示現之
意地、（清水氏者為可山甥、出精于示現、伝二段目打土
也、清水者有名鏡知流之鎗術士也、仍曰、當時之示現流
打雖論示現之意地於高上皆曰舌耳、而不至其芸者於
鎗者難向也、若於向于鎗悉可為芋刺矣、其心有嘲
哂高論兼中示現之意地也、兼中云、於得示現之意地鎗
何可恐哉、互爭論此一儀自昼及日暮不止、終至欲
立合焉、清水疾立座持米輕々唐竹棒、兼中採木刀立向
雖打槍、余當于身太刀不進有、時兼富者居内證有隔
遠而不知此立合、然清水堤來棒内證于庭呼兼富、親
子共曰芋之串差芋之串差、又嘲哂兼富乞立合、兼富謂
必至最初之稽古場、清水立向于兼富、兼富飛掛為突出
于頭打屬滅打打兩斷、清水曰今一度立向、又飛掛為
突出于頭打屬滅打打兩斷矣、清水歎賞悲怖兼富之芸、
兼富者謂為則歸矣、折節來居于稽古、重信四教院其外一
兩輩見之、感兼富之迅速之業、今以称之也、兼富者成
早捨長木刀之稽古、雖不為鎗留之稽古至此、案、

終成鎗留之稽古、於有為疑惑之心如此不至速矣、
以是亦可知賢古人之教法也、時兼富年廿二也、清水
者御記祿之筆史也、為痛兩斷止於出勤及六七日矣、
○位照曰、於兼富之芸業甚勝、加數年可至大野氏兵法之
位、非可疑者也、惜哉自廿四五之時為病止當流矣、於
今學位照派之兵法之士者、慕來兼富無不聞業意地也、
於表芸極至理而有不及他人處也、

（兼中此鎗留者、工与業以留之鎗留也、故不留、以位照
之教欲留是則工也、兼富此鎗留者、以意地機活留之鎗
留也、故得留也）

△右羅于系圖、人數一百十三人也、内正統八人也、本家子弟九
人也矣、齟齬于正教輩二十二人也、而伝正統名于世之
輩、自聖賢至學士、纔七十五人也、

示現流圖書與繫錄附錄系圖終



示現流系圖論曰、詩云邦畿千里惟民所止、然京都則吾朝民所止
而、當時武將閔白秀吉公在勤于此、日本国中大小之武士無不
勤来于此、而重位一人知善吉、伝示現流者何哉、曰善吉、重
位者其天生強明豪傑之氣質也、故善吉得月船重類之心、重位有
求得月船重類之質、故善吉自然住於京都、重位自然勤郎于
京都、来会于天寧寺、伝當流之心矣、天下之大善者、有自然
合而不為離散沈没之理、不可誣也、豪傑者所以令感動鬼

神也、況於鈍吉哉、況於善吉哉、日始祖一代之聖師得一人之英弟心伝之、然当流至重位、教道之弟子多、發起君子聖賢士之高弟、而繁昌於薩隅者何乎、日雖日本之武士不為少英明、不為不好武術矣、上方他邦之武士者本朝古昔之武道漸向衰微、右大臣信長公以來武士守正義之風俗悉頹敗、而好武勇之心起、名利焉、薩隅之武士者風俗正義而無欲也、名利之武士者心氣雖強、其胸中工多而有、好身船傍布之理也、正道無欲之武士者心氣強而其胸中工無、而有、好月船重類之理也、重位豪傑之氣質而習、熟國風之無欲、故遇善吉、聞意地、通徹於心、如以投水不日得伝心之妙矣、薩隅之將士正義無欲之風俗、出何処乎、日御家御先祖、忠久公者征夷大將軍賴朝公之御子而得薩隅日三州之封、下向矣、忠久公英明之君而、以御先祖八幡太郎義家公已來本朝上古之武道、為龜鑑、教訓三州之武士、及天文欲衰之時、日新公中興之、而天正慶長之間、武道本義尤盛也、家久公者、日新公適統之曾孫而、厚崇敬、日新公之風教、故其心強武大公而無一毫之惑心、故及聞重位為教説之意地、淳然防之無意識、得伝心之蘊奧速也、薩州之士風如斯、故得、当流月船重類之味、英士發起多、公尤以真知、当流之高上、御家永代之定、劍術矣、故三州之士以不達于当流為愚邪、而無不勵心力、能為繁昌処也、然於今流義之勢不及昔遠者何乎、日当流者弱變、強遲變、速之教法也、二字雲耀是也、二字者強明果斷也、雲耀者妙用神速也、神速者雖不向敵不發焉、強明果斷之心氣者常存于胸中、光明不昧而為万物不為曲屈、而所以令權威能畏服矣也、而過中至顯殺伐之相不敬之顔色矣、故為國家修德性、

強而容細察、如、家久公賢君者愛之也、愛之時者当流合時而得盛之運也、天下治久者愛強武之風、化柔和色、是当流漸向衰微之時也、不合時者必所以不出流義之聖賢君子而今治也、久遠之時世也、豈何得起、当流之聖賢君子哉、是異於他流、処也、雖然、天生人物草木、間有生、美質、故当流之師亦窺諸弟子之氣質、於得善士、盡精神導之、而豈不伝心哉、然是師之職分而非門弟之所知也、故今伝、打學士者竊修之、熟覽伝書之教法、不如求其至要也、雖然、伝授之難哉、昔者聖師導、庶子而於進、君子賢士、昼擊夜講、猶以己之形勢眼色、故弟子不惑而至味速也、今哉無聖師、將無擊而示講而教之、則、而獨擊、獨説、至于意地、業、豈不難哉、然予幸得聞述此系圖、凜實、正直之士、因之、既索聖賢伝心之事跡者、可知、当流意地、業之体段、而勵志氣、於伝立双、熟読緊録、積流義之知行、至不知自進者而至自得矣、然此二書近謂、当流之階梯、欽矣、述、喫緊録三冊、附、禄系圖一冊、終詠一首、末ノ世二誰此様ヲ手ニトリテ解ヲク意地ニ我ヲシノハム、天明元年辛丑十一月廿四日

五十二歲

久保七兵衛紀之英書

去辛丑年述系圖者、重方以來者羅名耳、略譜熟考之、重方以來雖諸弟子之事跡、變化多而尤有益于当流矣、且於今粗雖如伝人口、予不記之者及後世或恐失伝、故再撰之如是寛政元年己酉九月初筆、同十一月廿六日終之、予此兩三年煩、虛汚、雖苦心体、為、好人有病隙、時々記之、仍文字甚

拙、後年見之輩者、以「体段」求「至要」可乎、但当「流貴実」、故此書以「実書」、仍有「悪」于人乎、故以禁「他見」処也、

東郷重位関係諸記録

一 東郷実満覺書

其時拔身二而御船江仕懸候者共も、重位氣色、且又此御方様と見被上給もなく引取申候付、其場首尾能御座候、其夜伏見へ被遊御着、御目見二御差出被遊候間、重位被召出、被遊御意候者、今旦之義御究被遊候処、御運強候而事も不出合、右之者共相迦候、扱右之者共之内、頭取候者御見知被成候付、陸江御上り候者、先忝番二右之者を御討可被遊と被思召候、重位は何様存居候哉と御意候、重位申上候は、私儀左様二は存不申候、敵之差別不仕、間近き者共より、一人も討洩さん心底二落着仕居申候通申上候得は、誠二其咎二而、尤被思召候、扱其方儀は九寸五部を心懸候付、其段御心懸候、御腰物之内別而御秘藏にて候得共、是を被下候間、未々迄相傳候様二と御意候而、閑陣定之御腰物拝領仕、重位より亡父肥前迄不離身秘藏仕候処、泰清院様切勝候刀、兼々御尋被遊候処、右脇差之儀被聞召及、御望二被思召上候付、亡父肥前より差上申候、別而御秘藏被遊候処、於江戸御病氣御大切被遊御座候砌、為御立願愛右へ御上ケ被成候由、伊勢平左衛門申請、十兵衛于今覺語仕候、

一 重位事、龍伯様 惟新様御前へ折々被召出、御兩殿様より御筆をも頂戴被仰付、于今格護仕来申候、惟新様御意候者、中納言様御事、示現流成程被遊御心懸候付、別而仕合被思召上、弥已後共御指南可申上由、難有御意共御座候事、

一 大猷院様御取立柳生飛彈守殿二之弟子、福町七郎右衛門殿・寺田庄助殿より、元和八年春之比、於江戸重位江立合望被申候、天下衆之儀二御座候得者、遠慮仕居申候得共、強而再三望二付、

伊勢兵部殿へ得差圖、重位立合仕候処、兩人共二太刀出不申、重位打勝申候、依之、右兩人則重位弟子二被罷成候、神文於今格護仕候、右福町殿・寺田殿儀者、公方様御打出二而、能御存之人二而御座候由、先比被立合候節、重位より強當申候而、老人者病氣二而相果被申候事、

一 大猷院様より、其後重位示現流之儀被聞召上、中納言様江重位御所望為被遊由御座候得共、中納言様御秘藏被思召上候間、重位儀者相果申候通為被仰上之由、依之、其後御參勤之御供二不被召列候事、

一 御仕置被仰付候科人討手二折々被仰付、或者宿所、或者於中途も、參逢次第段々討申候事、重位一世度々相知候、且亦、橋口小藤太御成敗之時分、鎌田前左京・重位兩人江、從中納言様被仰付候節、則光之御腰物を以仕様二と御意有之、別而難有奉存候、右御腰物を以、首尾能小藤太を討果申候、右之段、中納言様被聞召上、以之外御機嫌能被成御座候、左候而、御意御座候者、右御腰物殊之外大切れ為仕由、被聞召上候条、先可被召上由、右代り二者、重而被遊御見合可被下由、御意為被遊由候事、

一 重位年罷寄、隠居被仰付候砌、中納言様より、當分之高二而者難続被思召候間、為隠居料御高百石被成下、難有次第奉存候事、

一 重位年寄相果候砌、寛陽院様被遊御光儀、難有御意被下、誠以恐多、冥加至極二奉存候事、

一 祖父肥前重方儀、寛陽院様御若年之砌より流儀御指南申上、毎度難有御意共御座候、依之、弥流儀繁昌仕候、重位引次二坊

泊地頭職・町奉行迄被仰付置候、且又、御郡座新規被召立候砌之儀、肥前江被仰付、最初より相勤、御役座規模^茂相究、其後御分國中一統二大御支配被仰付、多年相勤申候、御高式万四千石餘出来仕、結構成御内檢御成就有之候、右増御高者、郡座附御藏入別而被仰付置候、其以後肥前見立を以、右御高之所務二而新地御仕明仕候処、諸所之地方相應申、大分之御高出来仕候、夫^ハ常分者帖佐与御藏入と唱申、其節より新地之儀相始り、肥前勤功于今御郡座江相知申候事、

祖父肥前重方事、御朱印御高不足候処、勤功致都合候付、別而被遊御悦善、御料理被下、其上為御覆美、先御高式百石被下候旨被仰出、拝領仕候事、

亡父肥前重利、若時分 寛陽院様御參勤之御供仕候処、

大猷院様被聞召上、故藤兵衛入道重位子孫二可有之候間、流儀可被遊 上覽由被仰出候付、 寛陽院様被仰上候者、重位子孫二而流儀相傳候得共、年若御座候、重位嫡子于今存命二而罷居候間、因元より召寄、流儀可被備 上覽之旨被仰上候処、先藤兵衛兵法を被遊 御覽之旨被仰出、日限迄相究候節、無程上様御不例被遊御座、御他界二付、其儀無御座候由、其後 寛陽院様御兵法御師匠被仰付、多年御指南申上候、依之、 泰清院様御事及数度被遊 御光儀、将又、備前兼光之御腰物拝領仕、于今格護仕置候、諸事難有御意共段々有之、亡父宅二茂数度被遊御光儀候、御筆迄頂戴仕、冥加至極御座候、且又、先祖代々不相替坊泊地頭被仰付、其後諸々江地頭職御繰替有之候、左候而、御兵具奉行吟味役迄被仰付、江戸御參勤之御供、数度相勤申候事、

一 寛陽院様より、亡父肥前重利江早川名字御免被下候者、肥前事於他国^茂方々使者を仕候得者、他国二も差越候儀可有之候間、向後者、他国二而者早川肥前と相名乗候事、

一 中納言様御代より、 寛陽院様 泰清院様 大玄院様御師匠相勤候故、正月二日弟子中召列登城仕、於御前兵法初被仰付、殿様二茂御むすひの兵法被遊候而、御旧例程御座候、依之、御盃頂戴仕、弟子中不殘於御前御通被成下、每度被召出候処、肥前事病氣勞、御前江罷出^{コノ}二而無之、中納言様より重位江心掛申儀、御奉公第一二而候由、被遊御意由、肥前相果申候御迄茂為申聞置候儀二御座候事、

一 寛陽院様御代二、示現流元祖并重位位牌所能学寺取立申度由、祖父肥前代申上、御免被成下、難有御意二而、弥取立可申由被仰付候、造建善吉和尚并重位位牌安置仕、殊二 中納言様御筆重位繪像被遊、末々迄相傳様二と被仰付致拜領、于今格護仕置、年首繪像懸ケ、弟子中舊例之兵法初仕来候、且又、能学寺江

寛陽院様兩度 泰清院様一度被遊御光儀、難有次第奉存候、其上、上使御通行之砌、能学寺江兩度御宿被仰付寺之由、委細為聞召上由候、且亦、善吉和尚位牌等、京都天寧寺へ能学寺之儀相知、先年兩度使僧有之、尤書狀之往来有之候事、

一 右之通、段々難有被召仕候二付、先祖代々至拙者迄、折目之御目見仕候節者、二種一荷・御太刀目録進上仕、御禮申上来候、私迄家一筋之儀を以、段々難有被仰付候事、

享保拾四年酉十二月 日 東郷藤兵衛^(実清)

寛永^(二十)十二年六月廿七日

能樂俊藝庵主

東郷重位

万治二年八月七日

雄山州英庵主

同肥前

延宝六年七月三日

了山龍心庵主

同善助

宝永二年四月十七日

即安活心大居士

同與助

享保十九年九月初十日

物外院連良城居士

同藤兵衛

二 東郷実万覚書

覚

一 東郷肥前入道重位事、御奉公ニ付京都江罷登候砌、天寧寺之住僧善吉和尚に示現流之兵法稽古仕候、右示現流之根元者、十瀬與三左衛門と申人神通を為得人二而、常陸国梶取大明神へ致参籠、明神より顯示、此儀仕出被申候、左候而、金子新九郎不相替人二而相傳いたし、其後赤坂弥九郎相傳被仕候、右弥九郎と申候者善吉の事にて、此流儀と申候者、元祖以来、雖為親子相傳無之、其器量以一子相傳有之候処二、重位其人に為相聞由二付、示現流之儀不残一子相傳有之候、左候而、御奉公相仕廻罷出、別而秘密仕候得は、（申候）執心之者其有之、指南仕候付、夫より此流御国繁昌仕（申候）從（島津家久）中納言様被聞召上、其比之御師匠待捨流（指南方）東新之丞へ、大龍寺於御屋形立合被仰付、被遊上覽候、新之丞太刀少も出申、重位打勝申、首尾能御座候、

右新之丞と申者、御国一流之師匠を蔑為仕人にて有之候由、左候而、御前退出仕、相扣罷居候処二、御奥江罷通候様二と、御意候付、参上仕候処二、中納言様御自身木刀を投懸、御腰物御被遊、被遊御立合候二付、重位木刀を取立上り候得者、其氣分被遊、御覽、被遊御打御氣分無之、被遊、御感心、左候而、（島津家久三女、家久中）國分御上様御酌二而、御土器頂戴仕、則御師匠之被遊御契約、御腰者拝領仕候、此御腰物之儀者、鷹之巢迄にも御入被遊程之御秘藏二而候得共、御師匠為御約束被下候由二而、被遊御持御手渡拝領被仰付候、冥加至極難有仕合二御座候、夫々御兵法御指南、多年相勤申候、依之、難有御書及数通頂戴仕、殊に御高千石被成下候処に、余り恐多奉存、千石之内先四百石申請、残六百石差上置候、且又、坊泊地頭職被、仰付候、其上居屋敷之儀も、中納言様態々被遊、御差出（申候）る之上、御見合にて拝領仕候、御城近邊、且又、上下の人数稽古最寄迄被遊御考、居屋敷被仰付の由、御意二而御座候由、且又、梓肥前并亡父（肥前）肥前迄ハ、御代々指（指南）師匠被仰付、中納言様（光久）寛陽院様、泰清院様、及数度被遊御光儀候、右之通、御代々様御指南、御勤之御供毎年相勤申、流儀無隠罷成候事、

一 重位事、御奥為警固、伏見御屋敷江夫婦共に被召候て、数年御奉公相勤申たるよし候事、

一 義弘公、義弘公御前へ、重位折々被召出、御南殿様御自筆之御歌之物短尺等致頂戴、于今格護仕候、義弘公御意候者、家久公御事、示現流別而被遊御心懸候二付、御心跡まで相替り、偏二重位蔭と、御仕合二被思召上候、弥以、往々御指南可申候由、段々難有、御意二而、朱国光九寸五部拝領被仰付、于今格

護仕候事、

一 重位事、中納言様御參勤之御供仕候砌、伏見御川舟に、玉川伊豫、御小者老人、御舟頭老人、重位被召乗候処に、加藤肥後守様御家中衆、於川中参合、右乗舟之引繩、御舟之上を引返可申と仕候付、御舟頭其繩を切申候故、乗衆殊之外立^(腹)仕、陸江揚り、御舟引繩之水主を追拂、其繩を取、御船を陸江四五間迄引寄申候、御供舟ハ御跡ニ後れ、御舟を轍にて、既に刃傷為相極跡に成立申候、中納言様にも御長刀之鞘をも御迦被遊候、伊豫ハ弓を取、重位ハ既に水に飛入、陸へ揚り可申と仕候を、中納言様御長刀の石突ニて御押へ、時分ハ御存可被遊由、御意ニ付扣居申候、右之間に、小者老人水に飛入、御跡舟に□□、ケ様之御仕合と相通候得者、御跡之衆伊勢兵部殿を□□、追々陸へ被走統、兵部殿挨拶ニ而、右之者共相迦候^(而)、其場首尾能御座候、其夜伏見へ被遊御着、重位被召出、被遊、御咄候者、今昼之儀御極被遊候処に、御運強く、右之者共相迦候、扱、右之者共之内頭立候者、御見請被成^(候付)、陸江御上り候ハ、先を番に右之者御討可被遊与被、思召候、重位者何様に存居候哉与、御意候、重位申上候者、私事左様には存不申候、敵の差別不仕、間近き者共、老人も討洩さむ心底に落着仕罷居候通、申上候得者、誠に其筈に候、尤に被、思召上候、扱、其方儀ハ何様之刀ニ而も相濟候儀者、被遊御存知候得共、今日も九寸五分を用候ニ付、其段御心懸に候、末々迄御腰物之内別而御秘藏ニ而候得共、是を被成下候間、相傳候様にと、御意候而、閑禪定之御脇差并領仕、重位亡父肥前迄不放身秘藏仕候処、泰清院様、切れ^(断)れ候刀兼々被遊御尋候処に、右之脇差之儀被及

聞召、御望に被、思召上候ニ付、亡父肥前ニ及有之刀之儀に御座候得共、各別之儀に奉存差上申候、別而御秘藏に被遊候処に敢、江戸御病氣御大切ニ被遊御座候砌、為御立願愛宕江御寄進被成候、其後伊勢平左衛門申請置、子孫于今格護仕候、^(徳川家光)大猷院様御取立之柳生飛騨守様一二之弟子、福岡七郎右衛門殿

・寺田少助殿より、元和八年春、於江戸重位立合を望被申候、^(貞昌)肥近衆之儀に御座候得者、遠慮仕候得共、強再三望ニ付、伊勢兵部殿江得差圖、重位立合候処に、兩人共二少も太刀出不申、重位打勝申候、依之、右兩人感心被仕、則弟子に可被成と望被申、則座に神文被仕、西通共于今格護仕候、然共、何ぞ指南為仕事無之候、右福岡・寺田殿儀者、公方様御打出ニて、能御存之人ニ而御座候よし、其節之立合ハ、重位より強く當り申候而、福岡殿儀者、三日目相果為申由候、此段、中納言様被聞召上、別而御悦善に思召、備前作の御腰物并領被仰付、于今格護仕候、然共、肥近衆之儀ニ候得者、如何敷被思召上、御国元へ早速ニ而被召下候、左候而、大坂に参出舟仕候砌、寺田殿儀跡より大坂迄被罷下候而、致對面度由被申候得共、重位よりも断申入、對面不仕候事、

一大猷院様、重位示現流之儀被聞召上、中納言様江重位事御所望被遊由御座候得共、中納言様流儀別而御秘藏に被思召上候付、重位儀者果中候通為仰上由候、依之、其以後御參勤之御供に不被召列候事、

一中納言様、御前に重位被召出、御意候ハ、三原傳左衛門天流之鑓不残致相傳、師にも不相替上手にて候間、鑓との立合可被遊御覽由候付、他流儀ニ御座候ニ付、如何与申上候得者、押而仕

候様にと 御意御座候ニ付、立合仕候処に、傳左衛門縫少も出不申、重位打勝、其場首尾能御座候付、別而御悦喜被遊、弥示現流之儀深々敷被思召上候よし、為被遊 御意由也、

一御仕置に被仰付候科人討手江折々被仰付、或者宿所、或者於中途も、參合次第段々討取申候人数、十人餘茂為有之由候、就中橋口小藤太上意討に、鎌田前左京・重位兩人江、從 中納言様被仰付候節、則光之御腰物重位江拝領被仰付、小藤太事者平生為相勝者候間、右御腰物を以仕候様にと 御意有之、難有奉存、右御腰物を以、重位首尾能小藤太を討果申候、右之次第 中納言様へ御直被申上候処に、以之外御機嫌能成御座候、左候而、御意御座候者、右御腰物殊之外大切れ為仕由、被聞召候条、先可被召上候、右代者重而被遊御見合可被下由被遊 御意、右御腰物は則差上候事、

一 中納言様、年々或二度、或三度、重位江被遊御光儀候事、

一 重位事、年罷寄り隠居被仰付節も、中納言様被遊御光儀、其上御高百石拝領被仰付候事、

一 重位八拾二歳に罷成候、病氣大切二而、近々相果可申様子二候段達 貴間、寛陽院様為御暇乞被遊御光儀候、依之、重位事乍大切之跡、行水月代仕、衣服迄茂相改候へ共、主居者不罷成候ニ付、疊々共に御前江親類共持出候処二、段々難有御意之旨有之候、重位も流儀之無残所段申上、寛陽院様別而御落着被遊候、別而秘藏仕候信国之小脇差、乍憚進上仕候、左候而、重位事其夜の晩相果申候事、

一 祖父肥前重方儀、寛陽院様御若年之砌、流儀御指南申上、毎々被遊御光儀、毎度難有 御意^(共舞)座候、依之、弥流儀繁昌仕

候、重位引次に、坊泊^(地頭職)町奉行迄被仰付置候、且又、御郡座新規に被召立^(候)之儀、肥前江被仰付、最初相勤、御役座規模相究候、其後御分國中一統大御支配被仰付、多年相勤申、御朱印御高及十萬石不足仕候処に、肥前勤功を以致都合、増御高式萬四千石餘出来仕、結構に御内檢御成就有之候、右増御高ハ、郡座付御蔵入別立而被仰付置候、其已後、肥前見立を以、右御高之所務二而、新地御仕明仕候処に、所々地方致相應、御高三萬四千石余出来仕候、夫々當分ハ帖佐與御蔵入と唱申候、其節、新田地之儀相始り候、依之、為御褒美於御前御料理被下、御高式百石拝領被仰付候、其段御郡座へ相知申候事、

一 亡父肥前重利、藤兵衛と申候時分、寛陽院様御參勤之御供仕候処、大猷院様被 聞召上、故肥前子孫二而可有之旨、流儀可被遊 上覽由被仰出候ニ付、寛陽院様被 仰上候ハ、肥前子孫二而流儀相傳仕候得共、年若く御座候、肥前嫡子于今存命有之罷居候間、国元召寄、流儀可被備 上覽旨被仰上、御国元へ飛脚を以被 仰下、祖父肥前江も右^(之)趣為被仰渡由候、然共、兄藤兵衛兵法を可被遊 上覽之旨被仰出、御日限迄相究候節、大猷院様御不例被遊御座、無間茂御他界二而、其儀無御座候由、其後 寛陽院様兵法御師匠被仰付、多年御指南申上候、依之、泰清院様御事及数度被遊 御光儀候、将又、兼光之御腰物拝領仕、于今格護仕候、諸事難有 御意共段々有之、亡父宅二も数度被遊 御光儀、御自筆等迄頂戴仕、冥加至極御座候、且又、先祖代々不相替、坊泊地頭職被仰付、其後方々江御縁替有之候、左候而、御兵具奉行吟味役迄被仰付、江戸御參勤之御供数度相勤申候、依之、附衆中迄、其時二不相替にも相附罷居

候事、

一亡父肥前事、女子者餘多有之候得共、男子無御座候付、折々養子之儀奉願候処に、見合罷居候様と泰清院様蒙 御意候二付、右一筋を以見合罷在候、然処に、寛文拾三年子七月、御在府之節、私出生仕候段被聞召、流儀家筋に候処に、別而御悦喜二被 思召上、御国元江被遊御座儀二候ハ、肥前江御酌可被下候得共、御在府之御事二候条、碓山次右衛門事ハ身近き親類二候間、肥前名代二被仰付由二而、於御前三汁一菜之御料理被下、御手つから御引物迄被下、左候而、則座二而被遊 御意候ハ、念を入生育可申由被仰付、其上 大玄院様御諸孝^{綱貴}被遊候御引羽織^{紋付}□□羽織に可仕由二て、私江拝領被 仰付候、御国元江御下国之節被遊 御覽、肥前江も御祝可被下由、被仰出置候処に、於江戸不慮に被遊 御他界、右之段々□□乏一筋、拝領之御羽織難有被仰付候儀、其節次右衛門より委細申越、誠に冥加至極二奉存候、拝領之御紋付御羽織、于今格護仕候事、

一中納言様御代より、寛陽院様 泰清院様 大玄院様迄、亡父肥前迄相統御師匠相勤、泰清院様御存命之時迄ハ、毎年正月二日、弟子中召列登 城仕、於御對面所兵法始被 仰付、殿様にも御盃頂戴仕、弟子中不殘於 御前御通被下、難有仕合御座候、依之、奉祝御樽看進上仕候、尤弟子中より 茂同前に進上仕来候、大玄院様至御代、例之通兵法被仰付苦二候所に、一年御病氣二被遊御座、其上亡父肥前にも中氣^{本ノマ}に有之、右仕合故中絶仕候得共、私二者、於御前に三度程兵法仕候、右三度之内一度、正月三日、御儀通兵法被仰付、右主取私ハ被仰付、相勤為申儀も御座候事、

一中納言様重位江、示現流之儀至末々断絶不仕様に心懸申儀、御奉公之第一二而候、尤此流儀二付而者、他国人江成程秘密可致旨、折々為被遊御咄由、^{重位}□□相果申砌迄も、為申置儀に御座候事、

一寛陽院様御代に、示現流元祖并重位位牌所能学年取立申度由、祖父肥前代に申上、御免被仰付候、難有 御意に而候、弥取建可申由被仰付、其上御當国士中其外惣勸化二而、右寺建立仕様善吉和尚并重位位牌安置仕候、左候而、寛陽院様兩度、泰清院様壹度、右寺江被遊御光儀、難有次第奉存候、其上 上使御通達之砌、右能字寺江兩度御宿被仰付寺之由、諸委細に為被聞召由候、且又、善吉和尚位牌寺京都天寧寺も、能字寺の儀相知、先年兩度使僧有之候、尤書状往來御座候事、

一中納言様、重位繪像二御歌并道号・法名迄被遊御^直筆、拝領被仰付、末々迄相傳仕、年首には此繪像を掛^直可申候由、蒙 御意、于今格護仕置候付、年首に者右之繪像を掛、弟子中旧例之兵法始仕来候事、

一重位事、長門・和泉・肥前与申名拝領仕候、右二付、御意被遊候ハ、重位家督、代々右之名之内、心次第名乗可申由、被仰付候、依之、私亡父迄ハ右之内名乗来申候事、

一右之通、段々難有被召仕候付、先祖代々私并嫡子^{位照}藤五左衛門に至り、折目之御目見仕候節者、御太刀鋸・馬代・二種一荷進上仕来候、是又私亡父肥前弟酒匂^{景吉}大藏兵衛年九才、私家次男二て罷居候内、寛陽院様御光儀之節、乍次男御太刀進上仕、御目見被仰付、大藏兵衛と改名被仰付候、右に付て、以前者家来共名^直□□書下二被仰付置候事、

一 御代々様 大玄院様迄ハ、年頃御近習江相付、御樽肴進上仕、御目見被仰付候、御下向脇も右に不相替被仰付候儀、重位々引続右之通二御座候、就中、泰清院様御在世之内ニ著、年頃右之通進上物仕、於御内證、私父肥前夫婦共御料理まで拝領仕来候、其外時々御機嫌伺として、女子共迄も召列参上仕来候事、一 寛陽院様々私父肥前江、早川之名字拜領ニ而被仰渡候ハ、他國へも方々御使者被仰付事候處、東郷肥前重位子孫と余り相知候得ハ、何角差支候儀も可有之候間、向後他國にてハ、早川肥前と名乗可然と被仰付、其通相名乗申候事、

右者、御代々様より、私先祖共結構被召仕候次第、右之通御座候、此外多々御座候得共、申傳計にて事長く御座候ニ付、先右之趣申上候、以上、

辰 十月二日

東郷(美濃)藤兵衛

右書付、辰 十月八日、肝付主殿殿御月番之節差上候、

三重位立合之事

一 薬師寺城之助殿、蜻蛉ハ左足なくしてハ留る間敷由被申候、加世田池之上と申寺ニ而、人数余多の中の評論ニ候、是非留候得と被申候間、立合打留申候、其後廿日程と過候て、淵脇弥次郎殿を同心ニて、鹿兒嶋に被参候而、又立合申度由、遮而被申候間、立合無別儀打留申候、弥次郎殿にも立合、是も打留申候、一 田中源太郎殿、主計助を同心ニ而被参候而、頃日巻田之浦に、せてひせてつと申太刀相備申候、是を留る人ハ有間敷と大口をきられ候間、立合打留申候、其後又被参候而、先日ハ些仕

□ 敷候て被打留、又能致稽古候間、是非共留而御覽可有と被申候間、立合、我等もきひしく打申候、右之手の首をはなる、程打申候間、則氣を失ひ絶入をり候間、おとろき氣付薬などあたへ候得ハ、二時計後二氣を取なおし被申候、

一 関孫四郎殿、重位・助太郎殿・相良弥三郎殿、此外五六人同心ニ而、孫四郎殿宿元江我等を呼込、此頃太刀を余多留被成候由承及候、我等か太刀をも留而御覽候得と被申候、成間敷と遮而申候得共、是非共と被申候間、孫四郎殿と立合、無別儀打留申候、助太郎殿・弥三郎殿も立合打留申候、又別人も立合申候へ共、いづれも太刀少も出不申、初之約束ニ替り候と申候得者、いづれも尤二とて被差置候、

一 長谷場四郎次郎殿、身を捨候ハ、誰ニも打負ましくと被申候て、たゝきかゝられ候を、両かひな折る、程打申候得ハ、木刀を捨被申候、其後養生ニ而、鐐を仕哈、今巻度又々立合申度とて被参候間、立合申候、鐐を殊之外つよく打申候間、おとろき被申とて弟子ニ成り、深々敷被致稽古、後二勝れたる上手ニ成り被申候間、其後改名にて傳兵衛と申候、後二又主膳と申候、一 八木民部左衛門殿、稽古之座へ被参候而、各兵法つかはれ候得共、さのミ替りたる事ハ有間敷候と被申候間、木刀を取り下段にかまへ、誰にても留而御覽せよ、迎も成間敷と申候をきかれ候間、立合、あなたの木刀を打しき、左之びん々耳にかけて打しき、殊之外血なかれ候、夫々入組ニ罷成り申候、

一 坂元次郎五郎殿・池上殿、兵法稽古被申候、此もとの兵法ハ物おかしきことにて候、立合被成候得かしと被申候間、立合候て、右のかひなを叶わぬほと打申候、其後又立合可申とて、余多見

物衆を集め立合申候、太刀打合るやうにしてひらかれ候、騒々と懸り候を打んとしたくミにて候、當流の懸り合、心持替り候間、少もくつろき不成候、見物衆皆々おとろき被申候、

一三五坊・園邊殿、兵法一流致稽古候、各兵法物おかしき事二候とて、口をきかれ候間、立合申候へ共、太刀少も出不申、殊之外おとろきに、此流に被替候、

一坂元次郎太郎殿、甲割といふ太刀相傳申候、是を打留る太刀、日本にハ有間敷と口をきかれ候間、立合、右の太指を打割り申候、殊之外血なかれ、百日程いたみ申候、夫々兵法止被申候、

一伊地知又左衛門殿、立合可申と被申候間、彼旅宿江參候て、我等木刀を取立候を見被申候て、我木刀を内へなけ入候て、今日ハ立合申間敷と迎被申候、其夜舟にて被罷帰候、

一田中平次郎殿、我等燕飛初手仕様悪敷と人々申候、打出候へ、少も出間敷と被申候間、立合、打出し候得共、少も留り不申候て、おとろき被申候、

一徳永藏人殿イニ清水トモ、神當流の分を天下一之太刀、各の兵法にてハ打留候事ハ中々成間敷、些留て御覽候へと、木刀を指立被申候間、罷立切出し被申候を、はたと打候へは、両之手をはなし、木刀も飛び申候、見物衆まで驚き被申候、

一川俣甲斐殿、川内の須山寺へ被居候、我等罷越、物語り共候て後木刀を出し、我等へ立候得と被申候間、立申候、甲斐殿も木刀持立候て、我等様子を見被申候而、我木刀を置き、座をして、程近く候ハ、そなたを弟子二取度人にて候と被申候、夫々いとま共申候而歸り申候、其後度々狀二預り候、且又、弟子二取度よし、度々為被申由承候、

一入江長助殿、つくもがミといふ太刀を、誰二ても打留る人は無之候、我等能相傳いたし候、些立合候へかしと、口をきかれ候間、立合申候得ハ、打出す事ならず候とて、扱もく、奇特やふしきやと被申候、

一築瀬彦八郎殿、神當流の夢想の太刀を致稽古候、此太刀留るといふ事無之候、些留被成候へかし、逆も成間敷と被申候間、立合、打留候得ハ、夫々當流に替へ被申候、

一瀬戸口曾兵衛殿、刀當切被仕候、立合候へ共、木刀少も不出候、又其後立合被申候へ共、一圓に切出す事ならず候て、則起證文被仕候て、當流に被替、弟子に取儀御法度にて候、右流之名をかへ弟子に取候得ハ、身を過可申由被申候、

一吉利縫殿助殿、珍敷様子の太刀被仕候間、立合、稠敷打申候、木刀を切出す事少も不成候て、見物衆物笑有之候、

一春田主左衛門殿、種々悪口を被申候間、立合申候へ共、口二替り、少も切出す事不成候て、迷惑被申候、

一顯娃主水佐殿、真の無二釵随分とて、立合可申と被申候間、立合申候へ共、一圓に木刀出不申候、其後又立合申候、右之太指をした、かに打割、殊之外いたミ申候故、迷惑被申候、

一帖佐にて、羽上休右衛門殿、藤兵衛殿ハ奇特成る兵法被成候由承候、些立合申度候とて立被申候間、立合、太刀を餘多被切出候を、いづれも打留申候、福岡新兵衛殿見物二て候が、我等を打留候へかしと被申候間、是も立合、余多切留申候、兩人共におとろき、世間に致沙汰候者、尤と被申候、見物衆ハ相良美作殿・木脇形部左衛門殿・矢野殿二て候、何れも奇特之由被申候、一山田十兵衛殿、切合と申太刀、留る人ハ無之候、留而御覽候得

と被申候間、立合申候、打出し被申候へ共、然と不働候間、指置被申候、

一宇都嘉兵衛殿、切合を留よと被申候間、立合、切出し候へハ、引しきる事ならず候候、両度立合候へ共、太刀少も不働候間、被差置候、

一三原傳助殿、小太刀にて本太刀を打留被成候由、承候得ハ、いまた兵法不知人之事ニ候半、我等通りに致稽古候人ハ、連もあらせられ間敷と被申候間、我等申候者、如仰本太刀を小太刀にて留るといふ事ハ無之候得共、気味能候へ者、大略留り候と申候得者、立たれ候間、無別儀打留申候、

一勝目勘右衛門殿、藤兵衛殿ハ昔し我等弟子ニ候間、さのみかわりたる事有間敷候、然処ニ、世間に殊之外致沙汰候、些やうすを見て申候とて、被立候得共、少も切出す事ならず、口惜とて、種々被仕候へ共、成不被申候、殊にあなたの指を余多打切、殊之外血なかれ迷惑申候、

一平田仁兵衛殿・小十郎殿、無二劔を相傳申候、中々誰ニ而も打留る人無之候、我等も此流を致稽古候得共、用に立不申候、些留て御覽候へかしと被申候間、立合、乳の上両のかひなにかけてつよく打中候得ハ、殊之外いたミ被申候へ共、今度と被申候而、立あかられ候を、両の膝の上を折るほと打申候得ハ、木刀を捨被申候、久敷煩被申候が、骨おれしや、被相果候、

肥後壱岐殿、いづれも兵法を御稽古と見得申候、併我等共に御逢候ハ、少もくつろがせ申間敷候とて、指刀を鞘共にかまへ立被申候て、殊之外口をき、被申候間、我等も刀鞘共立合候、彼方之刀さやを打留、右之首耳をかけて打申候、刀のさや打割

申候、夫々彼壱岐おとろきにて、若き衆達兵法を御心懸候得とす、め被申候、

一からつ衆中江新八殿、當国へ差越候而承及候間、是非立合可申と被申候間、立合候へ者、少も太刀出不申候、其後一年程と間有之、しなへをこしらへ被參候間、立合申候、右同前に少も太刀出す候て、被罷帰候、

一平田太郎左衛門殿、し、のほら出といふ長太刀を頃日相傳候、留候へと被仰候間、長太刀を留るといふ事無之候へ共、是非と被仰候間、立合申候、長太刀を振出され候処を、はたと打申候得者、片手を打はなし、側に立てある屏風に長太刀當り、破れ申候、其後又立合、同前二屏風やぶれ申候、殊之外おとろき被成候、

一平田太郎左衛門殿内隈元勘左衛門殿と、川上式部少輔殿・黒田友右衛門殿同心にて被參候て、隈元殿無二劔能被仕候、留被成候へとて、立合申候へハ、両のかひなをかけて、胸をつよく打申候、又其後立合被申候へ者、尤無然々候て被帰候、

一黒田友右衛門殿、高妙劔弓にてはる懸候を、本ノマ礎と打申候得ハ、うらはす、壱尺七八寸置折申候、殊之外おとろきにて候、

一から津衆門野羽右衛門殿、鎧を随分仕候、黄門様も藏人殿も弟子二取候と被申候、無然々候て、他国の者口を聞候事笑止に存し、我等へしつけ申候得者、少も不止候間、我等も竹刀を持立合候て、打たをし申候、鎧之手不存候得共、木刀の気味にて勝申候、

一岩元惣兵衛殿、四本宮内左衛門殿、長太刀に大鐔を仕合被參候て、立合可申候間、立合打留申候、宮内左衛門殿ハ、我らやう

すを見られ、成間敷とて立合不被申候、

一 比志嶋宮内少輔殿、於江戸、長木刀ハ迎も成間敷とて、長木刀
ニて高妙之劔はらせられ候間、立合、無口能常の木刀ニて打留
申候、

一 於伏見、頼娃主水佐殿宿二而、国分十右衛門殿、左長刀にて被
撞懸候を、左之かたをつよく打中候故、長刀出不申候故、指置
申候、

一 於江戸、柳生但馬守殿一之弟子福町七郎右衛門殿、寺田少助殿
度々立合可被致由望ニて被參候得共、家中法度ニて御座候間、
罷成間敷由申候て、相返し申候、我等罷下り候前に、兩人御座
候て、しきりに立合度由被仰候間、比志嶋宮内少輔殿へ差圖を
得申候へ者、立合可仕よし被仰候二付、立合、左之手のこうを
打申候故、少も太刀出不申候、追付少助殿被立候を、安々と打
付申候、兩人以之外おとろき二而、則兩人共に神文被致、弟子
に成被申候、少助殿ハ手痛ミ、三日目に相果被申候、頓而我等
罷下り候処に、七郎右衛門殿大坂江先に越待居候而、樽肴新な
とを舟に送り、頓て御国に罷下り、黄門様へ申上、稽古可致
通被仰候て、被帰候へ共、無程被相果候故、無其首尾候、

一 敷根中務殿、我等被召寄候、其座ニ川上將監殿、黒田友右衛門
殿、白濱寛左衛門殿、国分帯刀殿被居候、此衆、早捨御留候得
と被申候て、打太刀ハ將監ニて候、木刀柄涯四寸程を、刃の方
打かぎ申候、枇杷の木塗木刀二而候、其跡にすあひの鉄炮玉の
かゝりたる様に候、其時何れも、今一度打候へと被申候得共、
御打候得と申候て、座ニ罷直り候、其後可打と被仰人無之候、
一 蒲生衆中東新之丞殿、駄捨流無二劔の上手故、鹿兒嶋へ被召移、

数年 黄門様御師匠ニ而候、平田太郎左衛門殿より被仰上、我
等被召寄、於小板屋、立合被仰付候処、新之丞殿木刀大さ候を
打折、先キハ御庭之池ニ飛入申候、

一 加世田衆中宮原寛左衛門殿、態与鹿兒嶋へ差越し、頼娃主人佐
殿江逢候而被申候ハ、各ハ駄捨流の内ニも上手ニ而候間、頼母
敷存居候処に、藤兵衛殿流に御直し、無心元由被申候、主水佐
殿彼流一段面白く候、先立合御覽候得と被申候へ者、寛左衛門
殿立合はと候ハ、老ツ式ツハかたせられ候半、三ツ目にハ殿
と指可申候身の上、果して申事究め不申候故、立合難成と被申
候、主水殿夫ハ不入儀二候、藤兵衛殿も御国衆ニ而候間、何と
なく罷立合候ハ、能候半と被申候へハ、一時思案させられ、
御意見にて候ハ、可參候と、直に国分へ差越、兎玉四郎兵衛二
付藤兵衛殿ニ被申入候、先四郎兵衛殿、御手前と立合見可申と
て、罷立合候処に、無二劔刃々切など被仕候を、四郎兵衛殿大
鎧をはつし、柄の間に打込、左の手の打離され候、夫々藤兵衛
殿に立合罷成間敷、各に逢、右之仕合二候間、只御詫言ニて候
と被申、則神文いたし、稽古被申候、

四 重位 弟子 働之事

一 長田内蔵丞、従出水企渡唐者、天下御制禁故御討せ候処に、討
手之衆不得討留、伏蟬を通し候処に、内蔵丞行合、言葉をかけ
討留候、

一 讃良二藏、幸侃衆谷山主税と申者、是を討手の意地を通し、南
林寺のことく参り候処に、二藏漬なすけ合、拝領の長刀にて左

の腹を切候故、主税まろび候を被打留候、

一太閤様御意を以、豊後の取人相廻り候刻ニ、為請取豊後より六人被下候、其内衆の中に、於行屋堂の前に兵法を仕候を、有川孫四郎・野元休七郎被致見物候処ニ、休七郎なんし被申候を、豊後衆可立合と申候之故、休七郎被立合候処に、豊後衆休七郎を打候ニより、孫次郎立合候而、豊後衆の左の手を打候、豊後衆腹を立、打懸たる処に、孫次郎豊後衆の頭を打破候、大破の仕合ニ成候を□□相成事済候、孫次郎後には蔵右衛門と申候、讃良善助、於京都、五月五日市の場にて、余多人を切働候者を被切留候、

一長谷場主膳、田中堅助、撫庭に原田神次と二度立合、二度共に神次の左のうでを打留被申候、

一飯牟礼善五郎屋敷、今大膳殿屋敷に被居候、色紙ハ向ニて候、善五郎ハ常々殿中奥に相詰候、當座の出合に候哉、善五郎父を色紙打果候て、我家に引籠、門をとして居候由、御屋形に申来候間、善五郎被走出候、古市善左衛門も縁者の衆内候ニて、先善五郎父のいへに走籠、見被申候処に、勿論父被果候間、則面人塀を越候処に、色紙亭の上に立、刀を構、各我等を伐り候事成間敷候、と被申候を、走り入、色紙かたの^{本ノマ}を切と同前に、善左衛門三尺三寸の長刀にて突めかれ候、善五郎仕^圖、門を開かせ、宿に帰り候、四本一鉤^{ツル}を以て、御老中へ披露被申候間、龍伯公被聞召上、能仕候由 上意にて、物忌晴候へハ、頓而屋形へ被召出候、

一長田與三郎と申候^党悪堂人、西田辺に居候、可打果由被仰付、討手の衆ニ、彼者用心稠敷いたし候故、成兼候処に、黒田友右衛

門、六月廿三日、南林寺大中様御影に、新納小右衛門同道にて参り、帰り方に、兵部殿十文字にて與三郎に被行合、□□より討手の衆五六人付候へは、與三郎刀のそりをなおし^腰、にらみて参候^被、言葉をかけあす候処、討手の衆指を□し候間、友右衛門言葉懸候得ハ、與三郎刀を抜き走り来候を、友右衛門、與三郎か面と胸に刀を打籠れ候、與三郎も友右衛門の左の手を切候、與三郎まろび候処を、小右衛門被討留候、友右衛門ハ其時分は有川蔵右衛門弟子ニて候、定て腰高して手を負たるかと、常々悔にて候、

一願娃主水佐、入来院伯耆殿内衆を、諏訪の馬場にて言葉懸候得者、彼方早くぬき合せ切出し候を、主水切かふひ□□に突殺され候、

一大山玄佐、親肥前に不孝之由、^(義久)龍伯様被聞召上、可被討果よし 上意に候□、御老中より児玉四郎兵衛巻人に被仰付、□分有下の町に相待候処に、雨降候故指笠をさして参候を、四郎兵衛言葉懸候得者、笠を四郎兵衛につきかけ、刀をぬき切懸り候を、四郎兵衛切かひつゝきて、後あまたうたれ候得共、刀少しも不切候、其俣たゝき殺され候、別て手柄之由沙汰いたし候、一庄内弓箭中に、相場主税と申者、敷根上之段に参、隠居候を、讃良善助承付、言上被申上候処に、早々可打果由上意にて、早朝其宅を取巻、蒲生四郎左衛門表之入口より被入候、戸あけ候処に、^{木綿}襦袢・^{木綿}袴を取はめ置候、右のけ入候故、些おそく、善助者釜屋の口より入候、とひを^(つたひ)□□出□にもひきく見得候間、刀を捨て取、主税上□□出候を左臂を切候、あまた切候得者、大刀故不切落候を、添差にて切候、四郎左衛門にも被切候て、

仕留候、

一春田主左衛門、傍輩衆を切候て被出候を、長谷場主膳被通、内に入やうすを見届申候て、主左衛門に迫懸言葉懸られ候へハ、主左衛門長刀を抜、うてくりを抜切懸り候を、捨にて主膳、主左衛門うてくり鐔をかけ、手にも些當、いくつも打籠候故、のけそりしされ候を、主膳刀のミねにて被打候が、主左衛門ひたもの□ざり溝にころび入候を、主膳被申候者、刀なけよ、なけすハ留をうたんとて、刀を被振上候処に、山田弥兵衛其外者兩人、中に飛入引分^{被申候}□□、主膳ハ直に重位に被參、主左衛門ハ□所に被任候、主膳示現流一の手柄と、重位も、黄門様へ被申上候、

一北郷掃部助殿内寮、主人を背き、串良の内北原に引籠居候を、掃部殿より田中原八左衛門被為頼、源八左衛門北原へ參候時者、呼出言葉を被懸候処に、本より待かけたる儀二候故、刀を抜かり合候を、源八左衛門ハ敵のひちを被切候得共、刀不切候故其俣つゝけて打、骨を打折たゝき殺され候、一段手柄の由、致沙汰候、

一於伏見幸佩屋敷、伊集院休左衛門、篠原傳内立合候て、休左衛門刀之切にて被打候を、傳内、休左衛門の左ひちを打のき候処、休左衛門打懸られ候を、頭を式ツ打うちたおし候故、氣を失候故、氣付薬水などのませ、生つかれ候、其後傍輩□□中被直候、兩人共に被致下向候処二、古郷の若き衆多々被申候間、休左衛門追付從富隈差越、傳内をねられ候処に、傳内ハ小嶋三郎宅江とまりに參り、朝六ツ前に帰られ候処に、致伏草居、言葉懸られ候得ハ、傳内則刀を抜、老人ひさをきられ候、又老人

左ののゑを打たくり候、休左衛門長刀にて被仕合候を、左の手を切り戦候処に、伊地知右京は後々傳内の背を切候故、傳内刀を地二打こみなから、垣に寄添被相果候、蒲生衆中やかて走合被見候処、傳内ハ果申候、手負のよりをつるがれ候処に、南林寺濱より舟に乗たる跡見得候、□□野尻たの後に、いはいをまつられ候と、古郷より飢肥に云来候、

一伊集院休左衛門、傳内に遣恨出来候本ハ、諏訪座主の門前に、武庫様御飯屋有之候に、無足衆御番被仰付、傳内・竹下九郎、今老人御番の日、或人木刀一むすひ持寄り候て、傳内に被申候は、藤兵衛流初手高く被取候ハ、ひまの入と被申候、傳内、左様之儀、我々若輩にて不存候、藤兵衛殿に御尋候へと被申処に、是非共立候得と被申、木刀を被差出候間、傳内取候て小庭に出立合候、右の人刀切々切下段にかまへ被寄候、傳内左の腕を打、其俣木刀を取、男の其様に馬鹿げな事をするかと言て、木刀を山につき入候、其時三尺三寸の刀を抜□のき様の様には成間敷とて、刀を□にかまへよられ候処に、傳内木刀を捨に引き、御出し候得と懸られ候を、九郎と今老人ハ中に飛入、大事の御飯屋にて事出来候ハ、我々まで罪科通るましく候、早々刀御さし可被成とて、さゝせ被申候、右の人は休左衛門一の弟子にて候故、以之外口惜かりし仕合を以て、傳内を可打詰との数年来願故、於伏見立合被申候、

一因分之衆鎌田清兵衛、町のぶたを余多切候故、可有御成敗由を承付、年月他国へ可出といたされ候得共、飯米不持□不罷成立帰り、加治木江居候由聞得候故、児玉四郎兵衛・黒田傳左衛門へ被仰付、兩人夜入被參、言葉をかけられ候得は、裏の口に切

□候を、四郎兵衛戸口の中□にて被可被切候得は、清兵衛又傳左衛門表入口より入、聲を懸切合候へは、聞□候故□たらざる由、夫より明松參候故、清兵衛先の手いたみ候故、腹を切可申候、四郎兵衛かいしゃく頼存候由被□候て、庭に被出、いたまれ切服なりかたく見得候間、四郎兵衛首を被落候、重位も、腰高くして打候へ、さやにあたるへきに、腰すわり候故腹にあたり候とて、殊之外褒美にて候、

一染屋平兵衛、奥の女房衆親の所に被參候刻、酒持せ兩人參候を被聞召上、討手被仰付候、黒田友右衛門・徳永豊前・有川造右衛門にて候、友右衛門ハ今北郷佐渡殿屋敷山元帶刀と被相待候処に、平兵衛と知り候を、友右衛門言葉懸られ候へは、三尺老寸の刀を振立、齒かみをして懸り候を、友右衛門敵の左のかたより同くひち打おとし、帶まで切付なされ候を、帶刀留をうたれ候、友右衛門前に與三郎時ハ手負ひ候、此度ハ心易く存候、兵法のかげ二而候と、よろこひ被申候、今老人の科人おそく參候て、造右衛門あひす町の家に參り、早々罷出候得と被申候得ハ、則出候を言葉懸、刀を抜とる所を早く切落し被討留候、

右、書にのせさるも有之候、

一東郷重位、若年之比、浄光明寺へ^(代參カ)被參候、或時、小僧にちやく庵坊といへる者、別而こはき成者二而、朱さや大小を指し、加治木へ毎夜通ひ行、夜明前に罷歸來候由なり、依之、和尚より、出家に不似合仕方二付、不越様にと一往しかり被申候、然共不聞入、又々かよひ候二付、又被申聞候処、和尚を突倒し、脇差を以指殺へき勢に相見得候、然共其篇二而、其場相濟せ候間、毎夜通ひ申候、依之、重位十三才、相弟子十四才、

此人ハ別府名字之由、兩人被申合候は、師匠をケ様二致候てハ残念之至也、打果可申と申合、夜中より関夜の渡りに待居られ候、重位脇差八寸五口、蒲生作之ひへかぢなり、兩人被待居候処二、右ちやく庵坊ハ朱さやに白はち巻二而、座頭之歌二而歸來る、右坊兩人を見て、汝等共かきうこくなといふて、朱さやの刀を引抜、皆打たをさんと打ふりかゝる処に、重位九寸五口を以、片腹を差被申候得は、急所二而只壹さしに被打果候、さ候而、道の近邊小やふの内二入、しはの葉をを、ひ置被歸候、左候而、死人見出し御穿議有之候處、右之段相知れ、師匠之敵を打候に依て、何之御咎目茂無之候、ちやく庵坊其時十八才、勝てこうき成書付二而候故、重位の九寸五口、今に東郷家江有之候、

一重位十七才之時、日州之内佐土原耳川合戦に立被申候、重位親父より、葉丸老岐との武功之人二而と被相頼候、外二も初陣之人か老人相付居候、然処、耳川合戦崩きわの時、さあくせよくとて、甲のはちをひと上より押付られ候、すつと馳出高名有之候、老岐殿勝れたる大男二而、一間かまちの上、髪の出る人二而候、左候而、重位被申候は、右之御志難報、別而忝きと被申候、然処、

龍伯様御上洛之時、御供候而被登候、左候而、於京都示現流致相傳被罷歸候節、右之恩とて、老岐との孫大炊兵衛殿へ、示現流教被申候、其時老岐八十歳余二而候、依之、稽古御目に懸て可申述、老岐この庭二而有之候処、別而忝きと、流儀は宜敷と被申候、左候而、老岐との被申候、是に候間、関ヶ原その外朝鮮などの軍の真似をいたし、可掛御目とて、八十以上二而、乗

物のきすを以たまたすきを取、あ^らしのことく振り被申候、只地へんこへげ、中々すさまじく有之候、左候而、被申候は、軍の時は右様成ほそき事二而なり申さんに、ケ様の事二而は無之候得者、人ハ役二立申さんと被申候、別而大力の人にて有之たると相見得申候、大様指宿清左衛門杯は、せたけ同様の人二而候也、

右の東郷肥前入道重位壹件、黒葛原周右衛門とのより、天明八年十一月十四日、承候咄の俣二而書付申たると存候得は、書あやまり又は前後も可有之候、

五 東郷重位公御代々諸御門人示現流兵法之話

一東郷^(軍方)肥前殿所二而、伊奈津傳弥左衛門殿長木刀を振るに、二才衆壹人も留得ざりし、然處二、東郷喜兵衛殿被參候付、肥前殿被仰候は、喜兵衛長木刀をふれば、留得すと被仰候、其時喜兵衛殿被申候ハ、私の留申而も埒明申事ハ御座有間敷候得共、留申さんとて、木刀を取て被立候を、傳弥左衛門ふらふらと振而下二振り捨たる所を、ひたとをさへ、只手にて押付、右之方に肥前殿被居候をにらミ、肥前殿どふて御座り申なと被申候勢ひ、傳弥左衛門どのいなやといわるる頭を打わるいきをひ、其意地有之候故、さしもの傳弥左衛門殿も動事ならざるなり、是誠に喜兵衛殿切れきり、生きを切斷したるゆへ也、

一東郷與助殿咄二、示現流ハ、やみの夜に、そこに骨をまつ白く切出したるか眼前に手二取様に、かゝらねハならんと云り、

一肥前殿御咄に、我か一圓そふを人に打かがする事ハいやがり、

人のものを打かふとする故に、人の一圓そふも打かきならず、又人より打かゝる、也、夫に付、我か一圓そふは人に打か、せねハならず、と被仰候由、

一吉田右衛門次郎殿所にて、念者の三原七郎左衛門殿被居候而、手使被致候に、兎念者になれハ、手使二用捨有之二付、善助殿大に怒り、そこにかゝり居候長刀を取、さやをはつし、七郎左衛門留と被仰掛候二付、無是非留られ候か、打事は打れれ共、善助殿なけ突に突る、勢ひなれハ、下二切かわりけれ共、其先二而高も、をつき切られ候、其時七郎左衛門殿ハ、木刀をつへにつひて立て被居候由、又夫を善助殿取、黒田納右衛門殿二留よと被仰候得共、納右衛門殿直に不被立候付、あらゝ敷被仰候付、納右衛門殿能立候を、又善助殿一盃になけ突に被突候得共、納右衛門殿見事に被留候由、そこ二而善助殿、納右衛門只今の打ハ覚へたるかと被仰候得は、納右衛門殿、いかに立、いかに打たるも覚へ不申候と被申候、木刀の柄ハ如何様持候哉と被仰候、納右衛門殿、いかに持たるも覚不申と被申候、足のふミ様ハ如何ふミ候哉と被仰候、是も如何ふミ候も覚へ不申と被申候得は、夫杜誠の打二而候、其方常二木刀の取様はどふ、足のふミ様ハどふといへ共、我曾而おしへさるハその事也、誠の時、柄の取様、足のふミよといふハなきもの也、只今の打か真の打なり、今の味をわすれず、随分精を出せと被仰候よし、一薬丸如水、本田半兵衛殿所江見廻被申候而、わか兵法を久敷見ぬ二付、近き内に来り見んと被申候、半兵衛殿今の山本孫左衛門殿屋敷二而候が、六月の朔、早朝被見廻候處二、半兵衛殿は最早髪を結び、そふじをして、かたびらののり高の至極上下

のよふ成を着て被居けるか、一通の挨拶済此所字補之打を被打けるか、早速汗みずなり、大いきをつき、かたばら水引上たる様二成りたる成り、其時藥丸殿、久々に見たとて、ほめ被申候也、其後如水咄に、本田半兵衛、太坂にて盗人を長刀を以切りしと云ふ事ハ、是を以見れハ、長刀を以切て見よと思て、切たる二面有つるふかななり(如方)、長き物共を頼者二面はなし、と被申候也、

一藥丸(如水)大炊左衛門殿、十一の時より只今屋形之下二被居候、重位と前と前と也、(重位ハ只今の小松殿屋敷之由候)其時重位大炊左衛門殿呼て被申けるハ、其方親の老妓殿々、庄内陣の時自分後しを取る處を、かひほうにあひ、よふやく取て返せり、味方悉くつれ引上る時、我等も何の心なくのく所を、老妓殿肩を押付被成候故、爰ぞと思ひ當り、夫々取て返せり、是偏二老妓殿のかけ也と云て、約束被申候、平日の稽古二面者、何ぞ替る指南も無之事也、然るに、重位ハ連歌を被成候故、毎月廿四日の晩二ハ、夜を明し連歌をして、朝未明二天神に参詣し給ふ、(如方)肥前殿ハ其頃藤兵衛殿と云時なり、大炊左衛門殿・藤兵衛殿兩人居て、重位指南を被成候なり、其仕様、兵法之味之咄をして、さあ藤兵衛、打てくと被仰候得は、大炊左衛門殿出にて、藤兵衛殿被成候也、其意地二叶ひたる時は、其心を胸にやどして、我かものに致せと被仰候也、又意地合之咄を段々被成、大炊兵衛打而くと被仰候得は、直二大炊兵衛殿打二て、藤兵衛殿出し也、能時ハ右之様被仰也、そこて又夜ふかになりぬれハ、陰分之氣に成、人の氣も陰に成り、つかくと落入たる二付、兵法ハいかさる也、其時ハ重位自分にこふよと云て、

直二せき付て打倒し被成候て、其旨を御移し被成候、左様二、一月に一度もの生死切斷の稽古故、度々重り、重位の旨をならひ給ふ也、

一上原貞右衛門殿、明見之堂に籠り、如水の弟子につかふか、又る肥前殿弟子につかふかと願を立、七日目にくうしを取之字入款被申候得者、藥丸殿に落たり、そふして精を被出けるに、貞右衛門殿早振を出さるゝに、誰有て留る人なし、首に引かけ、手のこふしに打掛られ候付、木刀をあやされ候人多し、其時如水の弟子二、汾陽四郎兵衛殿と申人仕手にて有之けるが、四郎兵衛殿も被打られける、其後貞右衛門殿、如水二早捨を出し申二付、めして御見せ被成よ、示現流ハ役二立申ものにてハ無之候と存申候、四郎兵衛殿も如此と被申候、其時如水、能社願たりとて、一盃打とて、木刀をにきり被立候得は、貞右衛門殿ハ大あせ者故、如水の頭をわれと被出候を、如水首から骨にかけて打給ふ故、へさと打付られて、真一と被申候を、又首の耳じうらを打給ふ故、ごふとふ也、ここにて貞右衛門殿、あゝ此内々示現流を六ヶ敷存居候、ケ様に心安きもの、いらざるしんどうをしたと、落着にて候、其時如水被申候ハ、此心か長くやとらんものにて候、見よ六七日共は能き事也、長くハ能有間敷候と被申候而、我共重位々指南を改而、其心のやとるよふにもろふたと被仰、毎月廿四日の夜の稽古の咄を被成候、又、貞右衛門殿夫々増り、五六日ハつんめけたる様二有之候か、夫を過ければ又元のものになりたり、如水是を聞給ひ、それ見よと被申候、其後貞右衛門殿精を出し、しならはれ候なり、

一黒田納右衛門殿被咄候、東郷善助殿所二面、善助殿其所二有之

長木刀を取り、小口をひきの下二押しき、其木刀の中程を取、しわと引付はしかれ候得は、其勢ひ別而強く、頭共に當り候ハ、しきわる勢ひなり、老ツ武ツ左様二引なひきてはしき、夫を以自分を右の様二してはしけと、善助殿被仰候、其時納右衛門殿被仰候ハ、もし左様二はしかハ、いかなる善助殿二而も頭ミちんになるへし、左様二有之候而者と思付、はしかれず候、然るに、善助殿事々敷御しかり二付、納右衛門殿腹立にて、善助殿被成候通一ツニツはしき申さんとて、大いたくらめに座し、木刀の小口を押敷、其胸中を取而引なひかされ候得は、善助殿ハ納右衛門殿ひざへ三尺に座し居られ候、木刀の老尺七八寸の木刀をにぎり、目をふさき、最前のすわり様よりも一倍とくとおて付被居候を、納右衛門殿一盃はしかれ候得は、其留り候事限無し、長木刀は打被成候処ヲ折て、左の方へ飛ぶ、其時善助殿被仰候は、こふ共にてもあるふかと被仰候、いつにてもこふよと、究て被仰事ハなし、納右衛門殿二も、どふか打れつらんも、如何に有つらんも、少も不覚と申され候、直二打れあふに有之ニ付、當り不覚と被申候也、

一善助殿、平日弟子中へ被申候者、我か前之稽古に来るならハ、打立の飯を食して来れと被仰候、

一善助殿、手使を出し可申、被召よと云ば、後二すさることは少もなし、被居候処より直二木刀を取て寄被成しよし、

一善助殿、江戸二而、石原市助殿と同宿二而有之候付、夜四ツ時分二、市助殿被居候かと被仰候而御帰候か、太刀も示現流か有と申哉と申され候時、市助殿聲を掛而見よと被仰候時、市助殿ゑひと聲の聞得ぬ中に、其処二有之まどのつきはりにて、首二

被打込候而、何とも不被仰候ニ付、市助殿はいとう御座り申と被仰候也、

一東郷藤兵衛殿ハ黒田納右衛門殿所へ行、手使を見ておけとて、佐土原勘兵衛・隈元惣四郎・愛甲愛右衛門杯、其外誰の彼のと云て、納右衛門殿二取次、藤兵衛殿状を出し候得は、子息被出けり、何れも打詰と来りと被思候得共、委細申入候得は納得也、左候而、右之衆内二入、藤兵衛殿ハ傳言杯云、先我々共仕て掛御目可申候間、何卒被成候を拝見仕度と申候得は、納右衛門殿、我かたちか手使を見るに不及と、頻に被仰候、然共、何卒と云て、前飛を一遍づ、致し候処、納右衛門殿見て咄候、そふであらふと思たと云て、子息吉兵衛殿二出せといふ而出られしか、吉兵衛おゝといふて、木刀を取られ候処を、せき付て、首の左右二當りて、夫々かためわり^{本ノマ}に當て、こうした物であるよと、木刀をなけ捨、われ共かあいやくとおらふよふな事てハなし、と被申候、ケ様二社、口能もなふ可有之事に、切れきらん故也、何れもの衆ハ、左迄安堵せさりし様なりと、隈元惣四郎被申候也、

一木場鉄之助殿、くりとんぼふ被出候か、其志や、とんぼうをせられ候人の本首二行んと云事なし、或時川上因幡殿所二而、肥前殿を招き、鉄之助殿被居候而、鉄之助殿江御出させ被成候て、被成よと云はれ候得は、肥前殿直二立て、鉄之助くれくと被仰候而、とんぼうにのり、さあ、くれくと被仰候付、少しくり、肥前殿の首を打んとするはなに、鉄之助殿本首に打込被成候而、満一くれかと被仰候、其時はのり、早速引上げ、どんほうにえきあふ、くれくと、打出せと被仰候得は、鉄之助、

最早肥前殿へあたまわらる、色見得ける故、始終打出ならさる也、

一葉丸刑部^(御水)左衛門殿、肥前殿いまた藤兵衛殿時代二、上方二夜咄二御列立、月の夜二而、金蔵の下に半分八月有、半分八蔵のかげにて有之候が、金蔵の溝のそばに葉丸殿は被行候が、其方に足輕かうつほを持、犬を追かけ、夫打てと云て追来る処二、其犬刑部左衛門殿方江走来る処二、溝をはせ通るを、刑部左衛門殿ぬき打に打れけれハ、犬の首打落したる計二而、其刀溝ふちの石に少しもあたらす、夫故石の方を藤兵衛殿二見せられしに、藤兵衛殿月影二而能見られけれ共、刀をれす、藤兵衛殿感心いたし、扱々旨に叶ひたる切をしたとほめ、親に云聞せはさそやるこはんとて、重位二右之段御咄被成候得は、重位殊之外御いかり、左様なさいく掛りたる事を、其様な事を云事かあるものかと御しかり、示現流と云ものハ、其刀鏑本よりみちん二成様二打折、下の石さくと切り、地のそこ迄も打通す物なるにと大に立腹被成、早速刑部左衛門殿被呼付、男のケ様成あやうい細工な事をせるものか、其方ハ示現流にきすをつけそふな男ちやと、殊々敷御しかり被成候、左候而、其以後又御屋形之下二、大犬たつぽへをする事三夜計也、夫を重位聞給ひ、城下二犬が立ほへをする様子也、藤兵衛・刑部左衛門申合、打殺せと被仰候付、刑部左衛門殿・藤兵衛殿双方すけまわし被成候処二、其時も刑部左衛門殿方江大走り来るを、刑部左衛門殿刀二手を掛にらまれ候得は、にくる事ならず、ちゝみかへりて居を打殺され候由、夫を重位聞給ひ、そふ社あるふと被仰候也、

一嶋津安藝殿所二而、大野正右衛門殿・木場鉄之助殿を招き、手

使を御覽被成思召二而被為招候二付、鉄之助殿は二才之時也、玄関二而正右衛門殿、鉄之助殿二被申候は、心得候狀と被申候、鉄之助心得候と被申候、斯而書院へ出、段々の馳走相済候而、安藝殿被仰候は、自分之家来二躰捨を能する者三四人有之候、其者へ出させ、兵法をして見せられよと被申候時、正右衛門殿私二者年罷寄、當分鉄之助二才二而、随分違者二仕候間、鉄之助二させて見させられよと被申候、安藝殿ハ先正右衛門殿被成候得と被仰候得共、正右衛門殿又御うたがひに及間敷候間、かならず鉄之助へさせられよと有之候付、さらはとて、鉄之助殿被成咎二定り、右躰捨をする家来、何にても其方すき次第二せよと被申候、其時木刀を取振かゝり候得共、見事二打留られ候、真一ツと云時、又鉄之助美事二被留候、其時正右衛門殿、私二者鉄之助か如くハ得し申さん、鉄之助ハ上手て御座り申す、私は御家来打殺し申か、くるし御座り申さんかと、云われし模様中々すさまじく、座中おそろしく様二有之、家来共皆々かしこまりて居ける故、安藝殿、最早見得たり、のそむに不及と被申候由、左候而、各暇いたし被帰候、道すから、正右衛門殿、鉄之助殿へかゝり一言之咄無之、互二別候時、正右衛門殿被申候は、鉄之助、其方ハわかい人のきよふな兵法をする男ちや、上手であるわひと云て被別候由、左候て、鉄之助平日之咄二、正右衛門殿見かきられ、残念至極之事也、玄関二而心得つろふと被仰候を、兵法有之咎と思ひしに、左様二而者なかつた咎也、兵法のそまれ候は、それきりにちをあげよと云事なる筈に、左様の落着無之、殊二真一ツといわれ候而、無事にしてさし置儀、誠二あやうくしかた、返くも正右衛門殿二はつか

しき事也と、殊之外なけれ候也、

一肥前殿所二而、伊集院主水殿、なへばう(重利)肥前殿未藤兵衛殿と申時、肥前殿と親肥前か兵法を見んと申合、肥前殿前二而御覽被成申也とて、主水殿長刀をふられ候得は、藤兵衛見事二打留られ候、其時肥前殿、それく外二なし、其仕様なりと被仰候、其時藤兵衛殿より肥前殿二、一ツめして御見せ被成よと御申候得は、成程して見しうとて御立被成候、藤兵衛殿長木刀を取、振と被成候処を首二打込、こうもしうふなものと被仰候也、

一小玉善隆皆々、重治藤兵衛殿時代二、彼稽古所二而、長刀を振而見しうと云て、日も只ならん様二而長木刀を横二ひかへ、誰二而も寄れと被申候時、誰にてやありけぬ、木刀を取向、扱もふれた、そふて社有つらぬと云て立けり、其時藤兵衛殿、おけく被仰候故、置也、切れてする人はなり、

一葉丸如水、老年二なり、与倉孫左衛門殿へ被申けるは、扱目分も老年二成り、長々ハ兵法もならん苦也、重位の位牌の前二而の兵法は是限り二而、近比せんと被申候而、孫左衛門出せと被申候、其後心安老人衆杯多集り、如水兵法をせらる、二、燕飛をせられける二、孫左衛門三ツ打々先を忘而、得出されさると也、其時いづれも被申候は、久々二見申候、なる程そふである、重位の被成二少も違ひハなし、手使と云ものを久々二したると被申候、孫左衛門殿被申けるハ、扱平日仕燕飛をつひわすれ申而、如何二出し申たるも覚へ不申候、其時如水じまん有之、そふてもあるふかと被申けると也、拘切候付、孫左衛門殿もはくれあたまを得不被上候と也、

一嶋津安藝殿所二而、重位、大野正右衛門殿、大肥前殿(重方)、如水、

本田半兵衛殿、右之衆被成呼候而、示現流見させらる苦也、膳相済候而、安藝殿被仰候は、鎧ハ留るものか、留らんものかと御尋之処二、留るもの、留らんもの、留らんもの、留るものと被仰候、口傳、其時安藝殿より、家来之者二つかせ見ぬと被仰候、其時重位ハ半兵衛へ、留よと被仰候、半兵衛二才二而、至極達者二仕者也と被仰候二付、半兵衛殿被成苦二なり、うしろの障子を御明被成候時、最早竹刀を持居たり、其時半兵衛殿被申候は、扱示現流といふハ、竹刀杯を以するものにてハなし、番所之鎧を持来れ、其しんけんを以つけと被申候て、木刀を取けれハ、安藝殿茂りうとなり、其番鎧を以突けるを、半兵衛殿木刀を打すて、突出す鎧を、ひたくとふミ付られてにしり付被置けると也、向之鎧突はうこく事ならさる也、

一猿渡勘左衛門殿ハ、肥前殿(重方)若衆二而有之けるか、肥前殿招請二付、葉丸如水も被行けるか、大嶋流之鎧突拘候、税所佐次右衛門殿之先祖之、妻屋惣左衛門殿と申人大膽者なりけるか、勘左衛門殿所に来られ候而、鎧は留らんものと、肥前どの二向ひ色々過言被申けるか、肥前どのハかもわせられずして被居けるか、其時大炊兵衛殿、惣左衛門殿、左様成不屈ハ云はん物なりと被申けれハ、色々云あかりて、竹刀を取寄て突けるを、ひたくとふミ付られ、勘左衛門殿へひこ被致候、大炊兵衛殿平日の咄二も、鎧ハぬるひもの也、さしやるものなる二付、おとしと被申けるとなり、

一与倉孫左衛門殿、肥前殿所二行、稽古被致鎧留を、肥前殿こうぢやどうぢやと云て指南せられける、其時善助殿御出被成候而、鎧留二どう打こう打と云打様ハ無物也、尻のすにはさミても留

るものなり、見よ留て見せぬと、木刀を両の手に取、かゝめをせなかに付、其木刀を尻のすにはさみ、さあつけとあをのけになり、そりて被居けるか、孫左衛門殿も殊之外成仕方とおもひ、一案と見て突られければ、其竹刀のぼたん先拘にあたるあたらんかの時、かゝめ打に、木刀のにきりきは、竹刀の真中二横に切かわすして、真たてにひつたりと打付而留られ候、以上三度、壱ツもちかはす切留て、こうてもあるふかと云われしなり、左候て、兵法相濟、孫左衛門殿は善助殿小座二行て居られけるか、善助殿跡々来、兄杯かしかくもなひ事を云物かな、今の鎧留かわるいとて、我をしかったり、兄杯か餘り秘事をする二付、わるひ教寄たる者二は、皆おしゆればよけれ共と、被云候、

一 示現流の歌に

誠ある心にはとき味としれおそきハ物をうたかへるゆへ
打太刀ハ陰陽和合を我しらすうたれさりけり打物ハなし
一或時、肥前殿被仰候は、市来惣兵衛か兵法を能はなるふたと、御ほめ被成候、時に其言葉を愛甲次右衛門聞かれ、早速惣兵衛殿所二行、肥前殿此様二被仰候二付、して見ぬと折角被申ければ、惣兵衛殿被申けるハ、肥前殿何と被仰候而も、自分か兵法かよかるふ様かなしとて、折角辞退也、次右衛門殿被申候は、かたひ事をいひやるな、誓紙をやふれぬといひやれ共、むかしからより、人もいくたりも破りたる人有りと、色々被申けれハ、惣兵衛殿被申候ハ、そふ其方から破れてくれは、此方からもやふらねはならぬ、さあして見うふといふ而、木刀を取らず、定差を取て差込、庭二立出、次右衛門出せといわれければ、次右

衛門大きにおとろき、いや私には其方程の落着ハなし、事のだちをあきうといふ事にてはなし、木刀に而してみよふと云事也、と申されければ、あゝ其くらひならはするに不及、左様成落着なき事ハ云物二てハなしと、しかり被申候、其後次右衛門殿咄二、市来惣兵衛は、やみの夜二もうしろからも、切られさるものなりと被云候、

一 與倉孫左衛門殿、(東郷)善助殿と荒田方に咄に行られけるに、武の橋

二而、向から大山伏師来けるか、あれ取て川二なけて見しうと云て行かれけるを、孫左衛門殿留られ候得共、いや何がと云而橋中にて行すり、右の山伏を取て川になけこまれければ、山伏らんかんり下に落るく、抜打二切けるか、橋板二切付打置なから、川二ざんぶりと落て、水をのミ立あかりけるを、善助殿ハあらくと云て、手をたゝき笑はれけるを、善助殿てハなきかと云けるか、善助殿おりくと云而笑われける也、善助殿上り、取たりよ、あかれくと云て、川々あけて、自分の所二つれかへり、衣などほし、刀共のごひくれられ返され候、此者ハ肥前殿弟子二而、示現流をしたる山伏なり、

一 肥前殿御咄二、おふたはりのとんほうを打二、其一打二十二の籠るよふに打ねば、役に不立と被仰候、

一 川上因幡殿、所ハ今の大学殿屋敷二被居けるが、其時重位隠居被成、大肥前殿(重方)指南かはり二而、色々人の取沙汰有之故、因幡殿二も、肥前殿兵法ハ腰が高きと、平日被思ける故、木場鉄之助へ被仰候ハ、切鉄之助、其方が得手のくりとんぼうにて、肥前殿をくりこむと、至極の肥前殿之ためになるくとてあるから、とうそくりこめと被仰候得は、鉄之助成程出し申さんといふ、

或日因幡殿所へ肥前殿直ニ立、鉄出せくと被仰しかは、鉄之助出す事ならず、其時因幡殿、そこもの兵法ハ鉢かひらむひらむ、重位杯も、鉢ハまっ直ニあるかよしと杜、被仰候と被申ければ、其時肥前殿、かたなをぬくに、鉢かひらむかてへめけ申さんよと被仰候、其時ハ篠崎寛左衛門殿（本ノマ）、肥前殿ニ付被參候、入来院伯耆殿も御出被成候、鉄なせに出さぬか、出せくと被仰候得共、鉄之助中々出しがなるものニ而ハなしと被申候、二ツニツ、共にひたくと打込被成候也、そこニ而因幡殿、猶々肥前殿腰か高きと被仰けるか、又或る時肥前殿、如水・鉄之助を招き、兵法を望給ひけるが、其時肥前殿、志申そふとて、鉄之助出せと云て、足のびをせ一盞して、かくめ打に打給ひけるに、鉄之助ひしとかしこまり、ひたと打すへ給ひける、肥前殿被仰候は、わるも兵法、わらんも兵法、足のびしても、すわりたるも腰あり、如何にまたかり腰をひきくしても、すわらん腰有り、高きひきくにはよらんと被仰候、

一なへば（本ノマ）肥前殿所ニ而、木場鉄之助早捨を出され候時、木刀を取、立（本ノマ）てもチよれと申されける時、篠原寛左衛門殿（少心子也）出せくといふて木刀を取、立給ひけるか、其時肥前殿、寛左衛門おけくと被仰候、夫故木刀投捨而置被申候、其以後寛左衛門殿、肥前殿ニあひ被申候は、此間鉄之助と兵法之砌、なせにおけくと御留被成候哉、其時は鉄之助か頭を打わりており申たにと被申ける時、肥前殿被仰候ハ、成程そふてハあるふなれ共、わりか打わらん中に、わりか頭をとく以前ニ打くやしておったから、夫て留たと被仰候、左候而、おりが云たぶんでハ落着ハするまひ、親か居る所ニ行かふと云而、寛左衛門殿を同

心して被出候、其時大肥前殿ハ能字寺ニ居給ひけるが、寛左衛門殿をなへばうとの同道して被參、右通之咄を被成、寛左衛門江して御見せ被成よと、御申被成候、其時大肥前殿、寛左衛門ニ出させ打給ひけるか、寛左衛門其打にて感心いたし、餘り執着ニ而、肥前殿こう打給ひたると云事を、一生秘事をしていはざる也、如水夫を聞、寛左衛門秘事数寄であると笑ひけるとなり、不審、

一木場鉄之助殿、被死候而、其吊に、子息の十郎左衛門殿、親之取分心易被申候人を招、龜茶ニ而も振廻、殊ニ親之深く信仰被致候兵法を望んで見んと云て、當大重仲兵衛殿のぢひの仲兵衛殿を招き被申けれ共、来られず、又使をつかわされければ、ハッ後ニ来り、膳相濟、十郎左衛門殿、御苦労ながら親位牌の前ニて、一ツして御見せ被成よと望まれければ、仲兵衛殿ハ餘り二齒がうつき、綿ほしを以ふうをつへミ来られけるが、今日は別格也、十郎殿出せといふて、横つぶるを打て、打たをし被申候、

一閑常心、東郷与助殿ニ尋被申けるハ、加治木之板身と云者が手使を仕るか、不思議之打を仕候、其子細は、水のミ茶碗に水を一盞入て、其上に火吹竹程之竹を渡し、打候に、其茶碗に入たる水少しもいたらず、其上其竹も中うほきとおれ候、与助殿ニも左様ニ御打被成候哉、打て御見せ被成候得と望まれければ、与助殿被申候は、私ニもなる程打はつさずニ打申候、打くらいハいらすと被申候、其時は非打て御見せ被下候得と望まれければ、与助殿返事ニ、打て見するに不及、我等か打と、茶碗も竹も水も、夫限りニミちんになると被申候得は、常心こまりける

となり、

一 神宮司喜兵衛殿所二面、月野木傳兵衛殿と申人、吉田甚兵衛殿江、しなひ打二面者兵法はかりかぬる也、して御見せ被下候得と望まれければ、甚兵衛殿殊之外二辞退し給ひけれ共、是非と望まれければ、さらばとて、傳兵衛もしなひを持て立けり、甚兵衛殿もしなひを持て立被成けるか、しなひを傳兵衛殿つらになけ打にして、直二脇差をぬき立向ひ給へは、傳兵衛ひしとかしこまひ候、其時脇差も留候也、

一 東郷藤兵衛殿、柳源右衛門殿・築瀬權右衛門殿・東郷与助殿杯二松崎藏之丞殿、伊勢松浦二行て、あの衆か兵法をあせよといわれければ、右之衆、彼所へ行あせくり候、其後葉丸長左衛門殿所二面、吉田甚兵衛殿、与倉孫左衛門殿二被申候は、此比二才共か、殊之外そこくにてあせくると云事を聞、自分之所二来らば打殺そふと思て居るよと被申候を、長左衛門殿聞かれ、段々人二もかたられ候処、自然と右之衆へも相聞得候哉、右三人之衆、甚兵衛殿にも行てあせんと云出しけれ共、先甚兵衛殿二ハ行まひと、とまり候由、

一 葉丸大炊兵衛殿所二面、八木次郎左衛門殿云人、石原市助殿へしなひを以て、そなたがはやきか、打合てみよふ、手使二私ハなきものなれば、しないにてもはやく打たる方勝ん、其時さらはと云て、市助殿も立給ひける、次郎左衛門殿市助殿袖を打すり候、其時市助殿、とんぼうに指なから、其くらひか、其くらひならば、おけくと被申候也、

一 白尾四郎兵衛殿所二面兵法有之、人数ハ、愚案・吉田甚兵衛殿・与倉孫左衛門殿・久永与三兵衛殿杯也、愚案、与三兵衛か兵

法ハ聲かなりしと被申候、与三兵衛殿被申候は、此与三兵衛か兵法二、聲に少しもかもわす、長き聲の中二て、打ハいくつも打也と、平生よりも長く聲を掛て、出しを打詰候、其時吉田とのハ、誰二面も出せと云て立れければ、本田与右衛門殿とんぼう槍を出しけるが、其時甚兵衛殿手使い、ひきはなしくする中に、只一打二打殺す也、出せくと云れければ、与右衛門殿かしこまり候、与右衛門殿ハ、此孫左衛門ハ此木刀ハいるらんと云て、手こふしを打留られ候、此後程過て、本田与右衛門殿、愚案所へ見廻候而被申候は、此間与三兵衛兵法ハいかにと云はれければ、愚案の返事二、ケ様二与三兵衛ハ目を見出すとても、少もおとろしふなし、扱又自分二者、世上にうそをひつて、親に不幸なと云者か、人を拾人も式拾人も打殺したといふてもおそろしふハなし、うそをひらす、親に孝行なといふ者か無力で来ても、此愚案ハ三間^{トリカ}大小をぬひてほるなりと被申候由、扱愚案被申けるハ、右之衆ハ皆能せられ候、我等はしふかわもしらぬ自分に而候故、示現流のうハ口二も不云と被申候由、葉丸長左衛門殿咄二、甚兵衛殿ハ不おとなしと被云候而、せらるましと被申候なり、

一 葉丸長左衛門殿所二面、石原愚案被来けるが、長左衛門殿、愚案二才共して見せられよと被申ければ、本々今日ハして見せんと存候而申候由被申、誰二面も出せといふて被立ければ、伊集院孝右衛門とんぼうを出被申ければ、のりて被申けるハ、此比兵法にとる事哉、はやく取れくと被申ければ、孝右衛門かしこまる、すさましく有之様子なり、

一 愚案、長左衛門殿所二面、兵法ハこひぢやくと云て、ねこふ

きを打れ候、出しに向ひなば、夫限と見得たり、其よき事かきりなし、

一岩元惣兵衛殿、ねおき杯二、腹を切やふる様なる聲を掛被申候由、内證之衆、おきてそろりと被見ぬ事ハなしとなり、

一東郷藤兵衛殿、黒田納右衛門殿に被尋候ハ、鑓の留様ハ何様二習ひ被居候かと被仰候得は、へその下に留申よと被申候由、

一藺田与藤次殿、松脇源太左衛門殿所へ、四年計鑓之稽古二行、突身共ハ松脇と一様二有之候、其比吉田甚兵衛殿所二兵法稽古

に行、鑓留を被致候に、与藤次殿鑓智の直鑓を以一盃突共、始終一ツも當事なし、長兵衛殿、其突出す鑓をまつさめに、鑓二

横に切かわるゝハ一ツもなくして、真下りに、さんとハ切落し被致候由、餘り与藤次殿もふかひに存、源太左衛門殿江右之段

委細に語り候得は、源太左衛門殿もふしん二存、突身の突候而ハ左様二はなき筈也、ケ様二御突被成よとをしゆる也、与藤次

殿又早朝に行突けれ共、一ツもあたはさる由也、
御母手檢者被相動候由、

一吉田甚兵衛殿所二、何れも稽古二、氣前のすくまうちこもつてぬるき人ハ、わがハするな、おけく^{本ノマ、支致}と云てさせられす、左

様二云わるゝ人、ふきひに思ひ、明日に成と又出て、其日ハ一盃に死をはめてする、其時甚兵衛殿、それく^{本ノマ、支致}今の通なりといわれ候、

一又稽古衆之内、誰に而も、人にまくるましと被見候人二は、定指を抜てふれといふて、庭もせましとふらせ、たれてもあれを

出□□してせよといふてさせらるゝ、至極胸の切るゝ仕様也、是与藤次殿、直に甚兵衛殿ならわるゝ所也、

一黒田納右衛門殿所二、東郷藤兵衛殿咄二御出二て、何か咄有り

し所二、黒島原可山被參候而、藤兵衛殿に被申候は、兵法を被成申かと尋られ候得は、成程仕と被申候、可山被申候は、此脇

参り申そふから、して御見せ被成候得かしと被申ければ、いつ二而も御出被成よと被仰候、其後納右衛門殿、有川五兵衛殿に

被咄候は、藤兵衛殿に申度事あれ共、どうも云われん事有、初にかく^{本ノマ、支致}敷事あり、可山、藤兵衛殿をなふりたるなり、其子細

は、兵法を望て藤兵衛殿のふうつを見たり、善助杯へハ、なかく^{本ノマ、支致}わすれても、兵法を望んで見ハならん也、なまなか打殺されそふ二有故、可山か云た様な事ハ、いひ出しもならんなり、

一善助殿、納右衛門殿に、竹刀のおれにて面をはしかせ、小太刀にていくつも打留、是ハわざ也、何の用二も不立物也、され共

是ゝ早きわざハなきもの也、然共、ケ様二はやく打たればとて人かかしこまるものにてハなし、わさの役に不立事をしれと被

申候由、
本ノマ、支致

一石原愚案咄に、兵法ハ何そ六ヶ敷物にてなし、わざハ入物二而なし、意地を云て見るに、自分の親の首を敵かかひさでて^{本ノマ、支致}石

火矢を以四五挺そなへ、此首ほしくハないかと云て見する所にはせ込み、刀のきれも入まし、何のわざも入まし、兵法如斯と被申候由、

一愚案咄に、善助殿江戸へ被差越候時、何れも集り、饞別に兵法を望ミたるに、たちまち面ハはい面の様になり、長刀・鑓を以

誰二而も出せくといふて立被申候、餘りおそろしく、皆々地にはい候て、善助殿の面を見は、其者打殺されそふに有之候故、

只地にはふたる計也、愚案、ケ様二おそろしき事ハなかりしよと被申候由、

一愚案、納右衛門殿咄にも、世上、とう、あいや、と云てた、き合、至極いふかしき事也、外之事二面ハなし、兵法ハ不疑相打の物也、

一重位御弟子、長谷場傳兵衛・篠原善内とて、無双之兵法打有之、彼善内か兵法を見候に、一盃打大岩杯をみぢんに打わり候様有之候、彼傳兵衛平日之手使ハ、一面□□付原に小松の壺ツ有之候様ニ、別而ひそまりかんし申様ニ被打候、扱彼善内儀ハ、大江散船といふ事を以、示現流をつんと落着したる人也、傳兵衛事ハ、大江散船之内四人も、流計に物いわすといふ歌にて、落着申たる人也、此意味別而深し、能々心をねりて落着可致所也、

一黒島原可山、兵法あんひを被成候時は、初手打壺ツ被成候由、別而大^{本ノマ}きぶわざの壺ツくつひはなれて、至極しつかに有之候由、咄を被成候時は、六返も七返も被成候由也、人のするを見るる、時は、あをぶくくいたれて被見候由也、

一東郷殿、兵法初の時、兄玉善隆と申もの、別てふて事をいふて、未初まらざる前ニ出て、大勢之中ニ而、扱々兄達の兵法を見よふと云而被出候、

此事、何之役ニも立ぬおわさニ而候得共、人前ニ而物ニせく様な人の上からハ、其境界之処面白といふ様なもの也、弟子共か様の事共、曾て似するべき事にあらす、右鉢之事か、人々うたる、の一番ニ候、兵法をせる者ハ、ケ様之事能々可憤事也、

一有川蔵之丞殿、或時とんぼうを被成候時、のりをのられ候得は、出し々おしこミ候、其時蔵之丞殿、扱々各共、平日之兵法を被成かと存たり、左様ニ被成候ハ、さあ真一度御出被成よ、と

いふて被立候得は、皆老人も出入者なし、別而之意地になられ候、

一伊集院主水殿ハ、別而わさき、ニ而候処ニ、其子息ハ別而無下知ニ而、とんぼう杯を身に引そへ被成候而、ちきととりせられ候時、ちよこくとあゆミかゝり候而、ちきくせられ候、夫々今に至り、其しかた御流儀なる由、

一三原次郎左衛門殿、やミの夜杯にしん剣を持て、弟子之衆に、さあこひくといふて被被出候付、皆弟子共行人老人もなし、一田中隆圓、或時重位の戸ふくらの様成所ニ居らせられ候時、戸板を以ひしと押付、さあ中く御働きなられ間敷、といふて押付候得は、戸板をけはなし被成候付、隆圓戸板共にけたおされ候、左候而、後見候得は、隆圓の足のこうより二三寸上、式本共ニそろゑて打被成候、尤戸つきはりニ而御^{打カ}被成候由、其たんできの間に御打被成^{成事カ}、隆圓も勿論不覚、誰か目にも不掛なり、

一肥前殿所ニ、柴山土佐といふ人碁打ニ参り候而、折角御打被成候、湯地藤兵衛殿と申人参り候而、肥前殿ニ、今日共ニ而無之候得は、日が無御座候、何卒示現流を御打被成候而、御見せ被下候得かしと、再三申入候得共、肥前殿無構碁を打而被居候付、土佐又々右通望申候得は、肥前殿打掛り候碁をはらりとおしくづし、其様ニいふ物ニ而はなし、其様ニ云てから、口に棒を突込まる、□めと被仰候得は、さあ御突込被成候而御見せ被成候得といふ而、藤兵衛殿立候付、肥前殿碁尺式三寸の棒を御取、立被成候得は、藤兵衛何として御突込か被成りうとて、切出すあたを、直に其ミしかき棒を藤兵衛が口に突込、うしろ

本ノマ、コレヨリ本ナシ、
のかべニひしと押付、

一重位兼々御咄に、人間のつがひくの全くつるばいて居る人を見んと、平日被仰候なり、なせに左様ニ被仰候かなれば、唐土ニ包丁といふ人、牛を切売せる者ニ而、生て居る牛を^(見てカ)此通りに切れはよし、あれ^(とカ)切れハよし、生牛を上から見ぬいて刀をあて、切二何の造作もなく、百骸忽二切はなして、わつかもつるばひ而居るつかひ、一ヶ所もなし、其如く重位も世上の人を見させらるゝに、切らん先に、切所はらりと見得て、毛先もうたかひなし、然らば、切らん先二つかひを切はなして被居候故、つがひのつるはいたる人間無之害也、夫故、如此被仰しなり、

黒田納右衛門殿所ニ、黒葛原太郎兵衛殿被行候砌、納右衛門殿子息の吉兵衛江出させ、とんほうしやを被成候、吉兵衛殿とんほうのりを被出候処へ、納右衛門殿棒を下段にひつさけ、出より巷間計前二真直に立、口をむしやくして出しをにらめて、かへりもせず、ひきもせず、やゝ一時立て被居けり、夫々殊之外しつかに、二足三足よりて、のりをかつとのり、忽右之棒を右之方にすたとなけ捨、あくせめよと云、被入たる由、誠ニ其時之もよふきひしく相見得、本のものニ而はなかつつるふ故、我等敷不案内なれば、其処わからすと、太郎兵衛殿我等へ御咄被成候、

一納右衛門殿咄に、打と云ものハ、敵を二ツにしたる跡ニ而、何の打といふ名はつくものにて、かしらより何之打といふ打ハなきもの也、と被仰候由、

一又咄に、聲といふものハおそき物也、向之骨真白ク切出たる後

に掛る也、とありし由、

一又、棒ハ先から打込むものと、咄有りし由、

一又咄に、やミ夜二向から人の切掛ケ候時ハ、ひさをすへて真直ニ打込むものと、此事神妙、不思議、驚人候、

口傳、尤昼ニ而もなをよろしき也、

一納右衛門殿、弟子の衆に兵法をおしへられしに、再起、三太刀、其外燕飛、早捨、長木刀といふ様な事ハ一切無之、只とんぼう捨とんぼうまで也、夫故或人行て、長木刀ハいかゞ留るものにて候哉と尋しかば、納右衛門殿返答ニ、正日之時初而留物也、留様といふ稽古ハなきもの也、と被仰候由、

一納右衛門殿孫千兵衛、我等江被語候、或時藤十郎殿御見舞ニ而、納右衛門殿二被仰候ハ、長木刀か留りかぬる物て御座ると咄也、納右衛門殿殊之外ぶきけんの様子ニて、左様のあやうき事を被仰ものニ而はなし、只今そこもとの親の首を切落して、さあよれ、といふて長木刀を振掛ケ候て、留りかぬるといふ事が御座るふか、弓にても鉄炮でも、留らんといふ事ハなきものて御座るといはれければ、藤十郎殿手をつきなて御座ると被仰候由、右、千兵衛直ニ其座ニ而聞たる由、語り候、

我慮、此事、藤十郎殿とく語り被申たる人の答候得共、名人之心、どこ迄といふはてしなきものと承候得は、しれる上ニもしらぬ、思召ニ而、問はれたるニ而あるふか、且納右衛門殿心を引見ぬためかにてあるへし、

一川上助六殿咄に、示現流ハ其意味をいふて見れば、塩硝を大がや家のよふにつみ置ける、夫におこりたる火のときを取、右塩硝之中に打込むよふな意地なり、といわれ候由、直に川上監物

殿聞て、我等江被語候也、

一東郷藤右衛門殿御室、無據御差支有之、一往兵法稽古御取止之砌、藥丸長左衛門殿所へ兵法有之、二才衆いづれも藥丸殿江行て、稽古せられ候、或時中村孝兵衛殿被出候而、早捨を被出候而、こゝに打込、かしこに打込、すはやくをいたされ候故、二才衆告人も留得ず、其時美代六郎兵衛殿、御馬方時、御座退出り直に藥丸殿江被出候而、右孝兵衛殿わやくの兵法を見て、孝兵衛出せと云て、すらくとかゝられければ、孝兵衛殿うしろのふすまのきわにかしこまり被居候、其時之美代氏之もよふ、こつたひ牛のぬらくといれて行か如く、孝兵衛殿ハ猫のちゝみたるよふ二相見得たる由、藥丸後の長左衛門殿、我等へ咄有之候、

一救仁郷白水所へ、中村孝兵衛殿被行候而、燕飛をして御見せ候得と被申候時、則孝兵衛出せといふて被立候、孝兵衛殿とふといふて初手を被出、白水殿はたと打んとせらるゝ時、初手をすつとついひき、打そこなわせんとたくまれ候、其時白水殿、みぢんもすりさせで、孝兵衛殿の首にひしと打込被申候而、わがハにくひ男ぢや、此おんぢよふにあふなひしそこなはせた、と被申候由、伊東氏我等江咄被申候、

一黒田納右衛門殿咄ニ、此打^{本ノマ}の味はひ、打といほふか、あつるといわうか、こくるといわふか、とふもいわれん、いふて見るなら、こくるともいひそふな物也、といわれ候由、太郎兵衛殿直に聞て、我等へ咄有之候、

愚案、此事ハ、其味はひを納右衛門殿独我胸に覺ての言葉なれば、其胸にいたる者にあらされば、知ることならず、定而

宜敷意味なるべし、慮外なから、我等考へ候而は、打といふも、あつるといふも、こくるといふも、皆たくミあるよふ也、只あたるといふてよかりそふなもの也、其誤ハ、うとふとも思はず、打間敷共不思議、敵もしらず、我もしらず、胸の誠といふものゝはつと出て四方に當る、是ハ我胸より出れ共、我も更ニしらず、天地もしらず、鬼神しらず、たくミを用ひず、終為をからず、独出て、独あたるもの也、是から見れば、只あたる共いひそふなもの也と、独蝸牛の中に工夫をなして、ふかく憚入候、

一美代六郎兵衛殿、伊地知氏江咄され候ハ、兵法ハこひよといふて、手よふをして被語候由、伊地知氏我等へ被語候、口傳、

一六郎兵衛殿子息五郎兵衛殿、二才之時、毎夜庭ニ出て立木を打被申候、或時六郎兵衛殿、子息を呼付、毎晩やかましく立木を打故、夜る寝もならん、何の用ニも立事てハなし、其木刀爰に持こひといふて、其棒を以座中の立柱をうたれ、かふした物であるよといはれしか、立木、木刀、いも折ニほたり折れ候由、是も伊地知氏我等江被語候、

愚、此から得と考候得は、兵法は手よふ・かたよふなどして、おらふよふなことてハなく、其位では百手打てもむだことなるへし、胸の切きつて打こと肝要なるへし、

一東郷重治藤兵衛殿ニ、田原鉄兵衛殿行、長木刀ハぢよふぶ二留おふする所落着不仕、どふそ私ふり申そふから、留て御見せ被下候得かしと被申、成程留てみしうから、明日出而こひと被仰候付、鉄兵衛殿翌日被行候得は、藤十郎殿出て被居候、鉄之助^(四申カ)、そふからして御見せ候得は、誠ニ其時ハ鉄兵衛殿はまり

きつて、用捨なく師匠之頭も打くづすべき格護なり、其時藤兵衛殿、藤十郎せよと被仰候、藤十郎殿棒を取、直二立候得は、鉄兵衛殿少も用捨なく、さあくと振られ候時、藤十郎殿一足ふみ出し、かゝらんとせられ候時、藤十郎木刀を捨て、と藤兵衛殿被仰候得は、藤十郎殿直に木刀をなけすて、脇差之柄に手をかけられ候得は、鉄兵衛殿ひたとかしこまり、切々難有誠二落着仕候と申されたる由、美代六郎兵衛殿咄有之たる由、是亦伊地知氏我等へ被語候事、

一東郷藤十郎殿、立木を打かよひとて、只打たといふて役する事てハなし、重位之三年程打て柿の木を打からされしも、只うたれしことにてハ無之、打様有之たるなりと、直二我等江御咄有之候、打様之処、口傳、

一東郷藤十郎殿江、或二才衆、木刀ハつよくしめて持かよひか、やわからかに持かよひかと尋候得は、わいどもかたまをにぎったよふに、つよくもなくよわくもなく持がよいと被仰候、

一寺山玄藏殿、庭に立立木を打れ候時、兄の権太郎殿家内二居るおそろしき様ニ為有之と、権太郎殿折田氏江被仰候由、折田氏直に我等江被咄候、誠二切れきりたる胸の人に、うつろふ所格別之物也、其胸を以敵にむかわば、立向者はなき筈也、切人のおそろしき様ニあるものハ、いかなる物にて候哉、能々工夫すへき處也、皆人持合而居る筈のものなるへし、此もの飛出さねハ、鬼神のよふにいかり、天狗のよふに達者にても、人かしこまる所ハなき物なるへし、

一東郷藤十郎殿、沖之永良部嶋江遠嶋之時、野山に出、畠を打被申候折節、人つき牛かはなれたといふて人々逃行、藤十郎殿蹴

をなけすて、畠の脇の鹿垣のしてある中に、竿の臺程のゆすの木をつよひの有を取候而、畠のやぶみちに被出候得は、もはや右之牛をそこにはせ来、藤十郎殿牛の真面に立候而、右のつよひをかゝめ持、牛のひたいのまつけんを打れ候得は、三ツに折れて飛下り、牛ハ其まゝ前ひぎを折、直にそこに死候由、御咄を我等其座に居候而、直二承候、

一東郷藤十郎殿、出水江御行被成候砌、何れも二才共兵法いたし候、其時出水郷士伊集院十甫といひし者聞付、藤十郎二而も、死をはめて打候ハ、なにが打負といふことがあるふか、自分ゆひてして見ねばならんといふて、山に行、ゆすのすたちの大きのをゑらひ、六尺餘りに切、枝こゝかしこ、あらくなたにて切り落し、先ハくひのよふにとがり、切落したる枝の本はいらほうのよふにして、まだ葉のところく付而おる長木刀を持て、藤十郎殿旅宿に行、あなたハ示現流と申すをなさるそふなら、一ツして御見せ被成よと申候、藤十郎殿、して見しよふから出せといふて、立被申候、十甫右之長木刀を取、振り上んとせし処二、もはや左之首に打込まれ候、十甫打れて、切々私まあたかまへもせん内に、御打被成候は無作法之しよふ也、私かまへてから御寄被成候得と、今一ツと云と、さあといふて振り上候処二、首に打込れ候、そこに十甫、右之木刀なげすて、切々示現流と申ハ格別之事也、感心仕候と、夫より御弟子二なり、出精いたし候処二、誠二きひしき者ニ而為有之由、

一藤五左衛門殿御咄、右十甫年拾七八才之時、朝寝をせる故、心安き人々申候は、其方親ちとのハきひしき人ニ而候間、今のよふにしてハ親しらるへく候間、かならず朝寝をするなど異見を

いたし候得共、なにかしかりせんといふてきかず、ある朝朝寝をして居たる故ニ、親十甫くまぢかきを持て、悴か寝て居る首にぬすと打込、庭に引落してすて置たる由、甚ノ推狂人也、

一本田甚之丞殿所江、右十甫行而、鑓を突候得、我等留んといふ、甚右衛門殿、いらさることかならず無用にせよといふ、十甫きかず、互ニやかましくいひあかり、さらば左様のことならはつかぬとて、そこにかゝり候鑓をおろし、庭に出し処ニ、親甚右衛門ノ年シ寄て内證に被居候而、右之事を聞付、則内々表江はしり出、そこに天吹の有之候を取、とんほうに振上、庭にはしり出、切々十甫慮外なとしかられければ、十甫思はず頭をさけかしこまりたる由、黒葛原被語候、誠に本之物のあらはれたる人ハきひしき物也と、かん心いたし候、

一人切善助殿、新集院くぶき宮之内ニ、いつくもの共しらす、恥開跡之者毎夜泊り候由を聞れ、石原市助殿をさそひ、今晚右之者を切而見せんとて、夜五ツ時分り列立、くぶき宮江被行候処ニ、右之者見得ず、切今晩は見得んか、とこにいづるふか、といわれ候得は、宮之床の下々、爰におると、今まいると、待へしをといひければ、其こわつき、身の毛の立よふ二有之候、善助殿、さあはやくかへろふ、といふて被帰候、其時市助殿、どふして御切被成ぬか、といわれしかば、いやゝあれはのかれ先のふして、必死きはめたる者なり、ケ様成者を切ると、けがの本なりと被仰候由、葉丸長左衛門殿我等江被語候、切左様なる所の胸に通候て知るといふは、善助殿能々銘人ならんか、下手なる者は胸かくらひ故、意味か通らず、あのひんを食がとあなとり、只やミ打に打故、向はひ人ニ面ものかるゝ処をなし、

胸はりきつて居る故、くるふなく打也、是を窮鼠猫を食といふ能々工夫すへき處ならんか、
一葉丸長左衛門殿咄に、兵法之打ハ、てん滴とて、雨したりの軒から下に落か如く、どこ迄留かといふこゝろなふて、つんと打込ものなりと被語候、

此おしへ至極尤二候、皆人地獄の底迄といふて打てとも、地獄といふもかきりあれば、其地獄迄といふ人、もはや□と、まる也、右之雨たれのおつるは、幾万□か千万□といふかきりハなき也、其心を語り、打心をとめず、只ありのまゝに、すつと振上はたと打、これかてんてきの意味ならんか、二三歳の童の打ハてんてきならんか、□はへの者ハ猫犬でもうたんとすれば、切あたるよふにと思てなぐる、是こそすでに心とまる也、四五歳の子供ハ猫犬をうたんと思へば、あたるあたらしに心なく、只何心もなくなぐるなり、是どこ迄といふかきりはなき也、是てんてきの意味ならんか、

一寺山玄蔵殿、兵法稽古之場ニ出られ候時は、誠に死にきれ、そこに出てゐる人に物をもいわす、人のする兵法を見て、すこし手ぬるく見へると、直に立、其人の指て居る木刀を無理におつとり、さあ出せといふてせかるゝ、誠ニきりきつたる仕よふ也、再起・三太刀・燕飛杯のよふな事ハ至極無調法ニして、ならざる人の□□、此前方、能学寺兵法初之砌、出でせられ候、切くらべもなく、捨もなく、かつきもなし、皆とんほうに持てせられ候、我々共か見付ん事にて、□無誠□なし手と□□切に見候處、河野□兵衛殿幼少之時々□□る者ニ而、右之兵法を見て、千人にすぐれたる仕様といふてはめしか、今に呉々其咄を

してほめ候、只今から考て見るに、誠にすくて居つるふと思ひやられ候、手よふかたちの柏子ぬけたるものなるへし、

一藤五左衛門殿被仰候、今時兵法をする者の中に、出しの随分切出二、出せく云てする者あり、是ハ拍子手使といふて、ケ様二いわねハ、間拍子かついぬくる故、其間をいわずかために出□□、出す出さんもわからず、出せくといふてする、是ハ何の役二も立ぬ兵法なりと、我等江被仰候、

一とんぼうに三通り有、取たとんぼう、おひたとんぼう、ひいたとんぼうなり、頭の高さに持たるを取たとんぼうといふ、下段に持たるをおきとんぼうといふ、出しにかゝる時、出し□□はたと打かくる時、すつと引てつんと打□□を引たとんぼうといふと、木場氏被語候、

一藤五左衛門殿御咄、日本国の剣術、皆心影流といふは東郷家計也、示現流と心影流とのわ□□を□□□□出ん□□ん也と被仰候由、

一東郷^{肥前守カ}重治殿御咄二、兵法をするに、手足わざ合至極達者にする人有、是ハ様子つじつまがあふて、見た處のよひもの也、手足わざあひ不拍子にして、うろくしてくるものあり、是は見た處は能なけれ共、□□おそろしひものであるよと被仰候由、東郷善助殿我等江御咄聞かされ候、

一又、藤兵衛殿御咄に、長木刀・早捨、其外兵法をする時、いそひてかゝる者は、くそたれのする事なり、其様な者は、尻にこへたんごをすけてするがよひと被仰候由、是又藤右衛門殿、我等江御咄有之候、

一藤右衛門殿、或夜入元に御出、われ二よひ事をおしへ置へし、

人切善助かいふ事也、兵法は打殺されて、打殺されてせず□□ひほつたるふなケ、是をかん様二覚へよと被仰候、口傳、

一黒葛原可山殿所に、山崎藤右衛門兵法習に被行候付、燕飛之のりをのりて、早くとく□□といそくなし、のりをかつとのりて□□る時は、あしたとれと被仰候由、黒葛原太郎兵衛殿、右藤兵衛殿の出し□□して能き□□、我等江御咄有之候、

一東郷藤十郎殿御咄に、當分兵法をする者之内二、とんぼうを取て間者有、おり共か間といふは、あれは意味ある事也、夫をしらすして、にせて其してハ役に立事□□はなしと被仰候、

一又被仰候、兵法をする時は、一端^反木綿を地にはへて、夫ハ脇に出ぬよふにせねハよふないと也、

一又御咄に、二才共か兵法ハ、弁慶つりにふつてうたねかうてんと被仰候、

一藤十郎殿、永良部嶋江居らせる時、西郷甚助殿横目勤二而被差越、藤十郎殿所へ見廻有之候處、段々兵法之咄共有之、甚助殿望まれ候得は、藤十郎殿して見しふとて、永良部之者二弟子有之、其者殊之外大男二て、すくて氣前之つよき者二而有りしか、其者に出せといふて立られ候得は、其者血氣者二而、藤十郎殿を出し詰んといひ、とふといふて燕飛を出し、ふりまわし引上んとする所二、左の脇をはたと打、其間二左右之首あたり切くらへ候而、左右之片腹二あたり、とんぼうを打、左右のかひなにあたり、留打迄の間に、爰にあたりかしこにあたり、出しは血氣者、一盃にはやく切出とも、目二もかゝらす、一打に二ツ三ツも外二あたり被成候而、ケ様二もする者て御座ると被仰、甚助殿二は感心いたし、驚入たる事二であつたと、島登り

之咄咄有之たる由、伊地知氏被語候、

一東郷^(其助)藤右衛門殿、拾五歳之時、御祖父^(其藩)藤兵衛殿被仰候ハ、其方ハ兵法をして役二立んから、今日限に兵法をして打殺さねはならんとて、こちらにきめしといふて、稽古所之様引て被行候、懐杯は大に驚き、どふぞたすけて被下よといふて、引とめられ候得共、聞かせられず、むしやうに引て稽古所へ出、さあしめし、たつた一打に打殺さねハならんといふて、長木刀を取被立候得は、藤右衛門殿、もはやこれきりにのかれん事としり、わいかしかた、あたまを出せといふて、首に打込被申候得は、初もく是ハできた、其しよふぢや、其通りにすれハよひ、それをわすれすに精を出してせよと、御ほめ被成候由、藤右衛門殿我等へ御咄有之候、

一或人、中村孝兵衛殿出しにて、早捨をせられ候、右之仕手木刀を取かり候時、さためて腰通りに可切出と思ひ、かゝられ候処、あたまくつしに切出候故、左之ひたいの上にあたり、はけひたい打切血なかれ候、其時藤兵衛殿見させられ、われは眼は持んか、白昼にくそはだにうたるといふ事があるものかと、大ニしかられたるよし、満尾氏咄被申候、

一東郷重治、藤兵衛殿御代ニ鎧留を被初、大重殿・美代殿・愛甲仲兵衛殿・田原鉄兵衛殿・山田覚兵衛殿・満尾権九郎殿、其外誰彼集り被留候処ニ、皆々脇つほを突られ、一人も留得ず、皆色真白くなられ候、中々留る事ハならんものと思ふたるもよふなり、愛甲愛右衛門との留られ候処に、殊之外ぬるく留るるよふにあれ共、一ツもはづさず、ひしくと切留られ候、左候而、稽古相落各帰リ候時、愛甲愛右衛門殿つれの人江、初もおせの

衆ハ、皆能せる事であるるふと思つておつたに、けよふのを見れば、おせの衆もちとびくめかるわひと、小聲になり列の人ニかたられ候由、

一愛甲愛右衛門殿、兵法はとんぼうを持たれ候、右之脇つひさかり、木刀肩にかたけよふに是あり、師匠之藤兵衛殿、愛右衛門がとんぼうハ、こへひしやくをかたけたよふにあると被仰候由、其とんぼうにて、殊之外ぬらく、ぬい、やあ、といふてくなして、初も気もない兵法と、しろふと目ニは見得候得共、其ぬるいよふな内ニ切れきりたる気味合、胸の中にあふれて見候由、

一黒島原可山所ニ、或時愛甲愛右衛門殿・上原助次郎殿兩人来、燕飛をいたされ候、愛甲愛右衛門殿殊之外ぬるく、わつかにあまへたよふに相見得、助次郎殿ハ猪のしゝのいる、よふに、至極達者ニせられ候、各かへられ候跡ニ而、助次郎ハする者ぢやと被仰候得共、可山之甥太郎兵衛殿は、愛右衛門殿のぬるくあまへて見得候内ニ、誠か胸にあふれて相見得、自分ニは愛右衛門か兵法かひすぐれおるよふに見たと、太郎兵衛殿、我等江御咄有之候、

一川上藤右衛門殿子息郷兵衛殿、或時親藤右衛門殿江被申候は、あなたの兵法を見申に、殊之外ぬらい物ニ候といわれ候得は、ぬるふかしにくひ物よと被申候由、郷兵衛殿、我等江被語候、一黒田納右衛門殿、燕飛ハうしろの足をつんくはねて、其かたちハよふなけれ共、初手打を打れ候処、誠ニ地のをこ迄つんと切とはしたるよふに相見得候由、葉丸殿咄有之候、

一児玉筑後殿事ハ、重位公之一之弟子ニ候処ニ、再起・三太刀

・燕飛杯の様な事ハ役せん人の由、其いわれは、木刀をとられ候といつても、正日ニ打たる人ニ而、兼而さま／＼習ひし事ハ皆なくなり、誠の我が胸一ツで打れ候故、手よふ形よふの仕方ハ無之候由、

重位公之御歌に、

師もわすれ我も忘るゝ心杜誠の道をあらハしにけり

とあり、筑後殿之兵法直ニ是なり、又御歌に、

六ヶ敷習ひもて行其奥に主なき太刀の味ハ有なん、

とあり、筑後殿兵法、ぬしなき太刀ニ而有之たる苦なり、

一 嶋津安藝殿、鹿兒嶋中之兵法出精の二才共を招き、自分之家来に大男の大力者有、それに鎧かむとをきせ、三寸角の柱の切の六尺計あるを持せ、各二才衆、あれを打て見せられよと被仰候、二才衆各木刀を取、すらくとかゝり、うたんとすれば、右之三寸角ヲ以かつと請とめ、こらくといふて押たおす、いつれも残念なとありて、齒かミをなして打て共、中々打事ならず、皆おしたをされて老人も打者なし、安藝殿殊之外御機嫌ニ而、示現流もケ様之者ニ逢而はいかんなり、といふて笑わるゝ、左候而、老人も打者なき故、安藝殿、山吹次兵衛を呼て打せて見ぬと、使を遣わさる、右之使山路氏江行て、旦那早々御用之儀か有之候間、御出被下候得と相達候得は、次兵衛殿、此間奉公願之儀被頼置候付、弥其事ならぬと心よろこびして、いろひて被行ければ、書院之様通れと有之、書院に出て見られ候得は、大庭の西之方ニは、甲冑をよるふたる大男、将机に腰を掛、手に三寸角の柱をつき、東之方之あんかわの方ニは、二才衆數十人、皆齒ガミをし、なみた目ニなつて、手こふしをにきつて居

る、其庭を見れば、打品ケのよふになつて居る、次兵衛殿、初も存外な、是ハ何事やらぬと思ひ、そこに知られければ、安藝殿被仰候は、次兵衛殿、そこもとをまねくハ外之儀ニ而はなし、いつれも二才衆に示現流を望候得共、ひとりもいかなから、そこもとにのそもふと思ふていふてやつたなり、一ツして見せられよと被云候、次兵衛殿うとなり、切々私ニは、御頼申上置候奉公方之事ならんと心うれしく存、いそぎ参り候処ニ、是ハ格この外之事なり、私ニは頃日兵法ハやめ申て、し申さんからなり不申、御断ニ存申スといふて帰らんとせられければ、安藝殿無理ニ引留、かならずと被望申候故、次兵衛殿被申候は、左様ならしはし申そふか、まんだ怪我ニ而もいたし候而は、迷惑ニ存申候と被云候、安藝殿、夫は少も苦しふなし、かならずと被申候、私か打申そふ事ハ心元な御座り申せ共、して見申そふといふて、庭に出、数本出て居候木刀の中ニ而、一番ちいさき木刀を取、左り右ニおして木刀をこゝるミ、直に立て、木刀を下段ニ持てかゝられ候得は、右之鎧武者、将机々すつと立て寄来ル、次兵衛殿打尺ニなつて、下段之木刀をすつととんぼうにとり、打んとせられ候時、鎧武者柱を両手に持、次兵衛殿打るゝ木刀を、頭のうへニ而請留んとて、乳通二横ニ持たる柱をずつと頭之上にさし上うけんとする時、右之柱、面頬のよだれかけにあたり、よたれかけはつと上之方にあかりける時、其間二次兵衛殿、右之者ののとふへに打込、のどぶえつんと打切、血くわつとわき出、うつふしにたおれ死にけり、段々気付等くわせ候得共、急所故相果候、次兵衛殿、ケ様なる怪我かありそふに存申た故ニ、御断申上候得共、是非と被仰候故、にかゝ

しひ事を仕申たと申され候得は、安藝殿至極残念之模様二面被居候由、藤五左衛門殿御咄有之候、

一何某とやら申人、山路次兵衛ハ兼而すき間のなき男なれば、うしろからも脇からも打れんものなり、いつそ油断之有をうかがひ居候処二、或時次郎兵衛殿右之者の所に行、まどの下にすはり被居候得は、亭主戸板を持てにわかに押詰、さあ次兵衛殿二而もうこきはなる間敷といひし処二、次兵衛殿そこまとのつきはりを取て、戸板の下四五寸すいて居る処を、真横二拂打二、毛すねをわるゝ程こくりければ、亭主左りのかたにすたとたおれ候を、次兵衛戸板をつきはなし被出候由、藤五左衛門殿御咄有之候、

一重位公に或人行而、示現流と申すはいかなるもにて候哉と、尋申候得は、重位被仰候ハ、示現流といふは、大切ものゝ刀を能とき、能刃を付て、針金を以鞘留をして、人に無礼をいわす、無礼をせず、礼儀正しくきつとして、一生刀をぬかぬものなりと被仰候由、

愚云、ケ様二慎て居る上に、自然のがれさる事の到来せば、鞘も柄もみぢんにくたけて、おのつから當る筈也、

一重位公二或人行而、示現流と申すはいかなるものにて候やと尋候得は、示現流ハ何様之ことありても、刀をぬがが示現流なりとおしへられ候、其者うたがはず、ぬかんと落着致し居候処二、或時途中二而、何者共しれす刀を抜て振来る、漸々近ク寄れ共、何にしても刀をはぬかんとと思ひきわめて居候処に、すてに三尺四寸之間に振来り候得共、夫共刀をぬがすおさまり居候処二、すてに此方頭二はたと刀を打かけ、扱もあたま

は打わらへたと思ふて見たれば、向之者二ツになつてたをれける、そこにて我かあたまはわらへたと思ふたと、扱もふしきに切たりと、初て夢の醒たるよふ二有之、そこで示現流は刀をぬがんものと被仰候味はひ、扱も奇妙不思議、誠二難有しと、弥ふかく信仰いたし候由、

重位公御歌に、

待もすなかる心もさたむな味ハ敵より出るもの也

と被仰候は、真に此心なるへし、石原市助殿咄に、堪忍ふくろハ自分やふるゝものにてハなし、人々やふるものなりといわれし由、是もこの意味なるへし、

一重位公御咄に、示現流ハ数千ひろのがけの上に、春駒の片足二て立、春風にむかつて、天にあおひでいなゝひて居る意味なりと被仰候を、或者聞て、ケ様く^(重方)と大肥前公咄候得は、いやいやそふしたものでハなし、数千里の大野原二くさ打くひて居る者であるよと被仰候由、

愚云、或人このことを語りて、重位公のとより、大肥前殿の咄ハおとなしきよふなりといひし、不案ながら我云、此ふたりの御咄ハ、尋し人の其意味に通するよふにといふために被仰たるなるへし、慮外ながら、いなゝく物でもなく、くさくて居るものでもなかるへし、重位公は、向の人すゝまん気味ある故に、いなゝく様之ものと、気をすゝめんために被仰たるなるへし、それを聞たるもの、示現流ハすゝみきつてたけたる意地の物と、すゝむ方計二一偏に片よりて、気勝二落入処ある故、それをおさへぬために、くさ打くひて居るものと被仰たるなるへし、此二人の御咄、いつれかまし、いつれ

かおとりたるといふ事ハ決してなきなり、いなくも草くて居るも一ツ事なるへし、其弟子を一片ニかたおちにならんよふにとのおしへなるへし、示現流の本意を被仰にてハなし、おく露の色かへぬまと被仰候処、能々工夫あるへし、此處取違へそふな御言葉故、憚をかへりみず、御心易ニまかせ、せんさく申入候、能々心ある人ニもきかれて、我れか工夫非ともあらハ、御おしへ偏ニ願入候、

一 大肥前殿御弟子之衆、稽古に参り候時、其方共か木刀を見せよとありて見せらるゝに、すこし簾相ニあれば、兵法するもの、ケ様な気のいらん事をするものか、示現流といふは、極々ねんを入れて能けづり、其上をとくさを以、能々けつこふにみがきあけ、ふきそゝりして、兵法をする時は、みぢんに打折てするもので杜あるに、此よふな簾末な事をしてと、御しかりなさるゝなり、そこで弟子之衆極々念を入、とくさみがきにして持て出るなり、大肥前殿、又其木刀を見せといふて見させらるゝ、切々輕薄な、この木刀くらのものに心を留て、すりみがきをして何之役ニ立事か、只打わつたまゝでも、つんく地獄迄も打通すよふにする物であるよと、御しかりなさるゝなり、また簾相ニして行ハ簾末なりとしからるゝ、是肥前殿之御心ニは、弟子共よひ方ニもわるい方ニも、一片にかた落にならぬよふニとありて、如此被仰候也、弟子共御意味をさとらず、肥前殿ニはとふいふ事もしれん事を被仰人ぢやといひよし、

一 大肥前殿、弟子兵法をする時、うたんとすれば左之肱出る、わり共か兵法ハ左之肱か出からよくない、出ぬ様に打と被仰候、弟子共肱の出ぬよふに、肱をひしと胸につけて出ぬよふにして

打、いやく、なお肱か出て能ない、おりが打て見しようといふてなさる、左の肱を殊之外前ニ出してうたせらるゝ、こう肱の出ぬよふに打物ぢやと被仰れ共、弟子共どふいふ事とも一切さとらずとなり、肱の出所、口傳、大肥前殿ニは、人の一偏ニかたよりてかたまる事かきらひニて、其御咄、或は高く、或はひきく、或はしろく、或はせまく、一定してきわまることなし、神流不思議なれば、更ニしるものなかるよし、

一 大肥前殿御咄に、示現流の師匠ハ、野ニも山ニもおしへる物であるよと、被仰候よし、

愚云、能心を留てこまかに心をつけなバ、皆師匠あるべし、万事大形にして打すぐる故に、適々手を取りおしへられても更に益なし、能々心を付へき御咄也、

一 大肥前殿被仰、我身ハたとへば舟なり、世上ハ大瀬原なり、夫故心の船頭たましを入れて、からだの舟に櫓槳をして、油断なくのらねは、またたきの間に□□ため舟打わると、油断するなどと、與々御咄有之由、藥丸殿被咄候、

一 黒田納右衛門殿孫十兵衛殿被語候、おんぢよふなどか兵法ハ、あぶなふなき兵法なり、面共打くづし、腕なと打切るよふな事ハなき事也、怪我をすると云からハ、それ切の兵法也と、我等へ被語候、

一 黒田納右衛門殿となり、肥後道清といふ休捨流の師匠共する鍛術者あり、或時納右衛門殿所ニ行、互ニ仕て見ぬとてせられしが、道清木刀をかつきに取てかゝられしを、納右衛門殿、かつきたる木刀にかつとのられければ、道清かゝりもならず、引もならず、うこく事ならずおられ候由、

一東郷藤十郎殿、嶋津仁十郎殿御毛江被參候時、仁十郎殿被仰、藤十郎わりの示現流をするといへ共、仕て見ねは上手下手はしれんはづと、立合をして見よふから立と被仰候、藤十郎殿、是ハつかもない事を被仰候、夫は中々御なりなさるものにてハなし、夫ハ御やめ被成よと被申候得は、いや口でいふた計てハしれん、して見ねはならんと被仰候、さらは左様之事ならはするに不及、先私か打て御目ニかけ申□□□□この打か私か打のよふにあるなり、仕て見申そふ、私打を御見なされよと云て、木刀を取、ひざし柱のすぬげの大こぶの出で居るを、あひと打たれければ、大こぶつけねへんとかけてとぶ、さあ、あなたの打かこのよふにあるなら、仕申そふ□、先打て御見被成よといはれければ、仁十郎木刀を取り被打候得は、はしきかへりて似もせず、金剛力を出して何へんも打候得共、中々かけず、いやく是ハなるものでハなしといふて、立合ハやめられ候由、大田金兵衛殿甚座ニ被居、能見て隈元氏へ被語候由、平太殿我等へ被語候、

一東郷藤十郎殿、倉岡江御行被成候砌、倉岡郷土中村正左衛門と申人、藤十郎殿旅宿江見へ申には、未平の打を落着不仕候付、何卒御おしへ被下候様ニ申候得は、藤十郎殿、成程して見しつから、明早朝木刀一結、此方之様ニ持て来と被仰候故、翌朝六刻前藤十郎殿旅宿江参りかゝり候得は、藤十郎殿は最はや起、たばこ盆を殊之外つよくたゞき候得は、正左衛門殿きて□と胸ひしげるよふに□□□□も行、参上申上申といひ候得は、あゝ正左衛門、はやかつたと被仰候付、門江かがり□□□を申上候得は、藤十郎殿、あれは其方ハまだ平の打ハ合點かいかんか、

其木刀□にやれといふて、直に立、さあ出せと被仰候付、則木刀を両手に取り、立んとする所ニ、いなひかりのよふに聲もかゝらず、両手くひをひしくと打込れ候故、則木刀を取落しかしこまり候得は、正左衛門平の打おはゑたかと被仰候、成程落着仕候と申上候、本之座ニ歸りて両方之手を見候得は、両方共□□ほきと手くびを打おられ候由、夫故□□其手役ニ立たず、當分其□職をいたし、其身は手折れ故、其職もならず、大浦源左衛門殿横目勤にて、倉岡のおさへ役ニ被差越候砌、毎日程咄二来、藤十郎殿御蔭ニ而平の打の味をおほへ候とて、手の折れ八千も心にかけず、却而夫をたのしみにして居候よし、大浦氏我等へ咄申候、

一酒方^(二男)大蔵兵衛殿、舍弟の高城^(重方三男)仁兵衛殿江、只□□長ケ□□丈計の鬼が、霧嶋□□□□棒を打かゝらハ、いかゞ可致哉と被仰候、仁兵衛どの、いか様ニ考ても工夫ニ不及、或時□□之肥前殿江右之訳被尋候得は、肥前殿^(重利)答に、左様なあふなき場所ニはおらんものであるよと被仰たる由、仁兵衛殿、後ニは元喜と申たる由、大肥^(重方)前殿之三男^(重利)なへほう肥前殿の三番目の弟ニ而、高城之養子に被行候由、

一黒嘉原可山、或時甥之黒嘉原小藤次殿を呼付、兵法稽古をいたさせ、稽古相済候跡ニ而被仰候は、世間ニ出で、人か兵法杯しろふと□□□□曾而するものでハなし旨、心外□□一□□□すなと被仰候由、小藤次殿後ニ太郎兵衛と申候、我等江直に咄有之候、

一何某とやらいひし人、我其名をわすれ候、其人江戸出立之前、伊藤仙右衛門殿子息、餞別として右之人、川俣作圓殿兩人を被

招候處に、親千右衛門殿出候而被語候は、初そことは近々旅
ニ御出之由、夫ニ付而、我此前示現流を習ひ置候、肝要之事□

□□□□傳授可致、初先爰元出立無之内、昼夜能御親父之顔
を見て、かたたる、顔付ハこふ、わらわる、顔付ハどふ、あそ
こにはあざがある、何かあると、能々氣付て見置て、我家之内
ふみ出し、道中・船中・江戸詰中□□□、無分別者ありて、無
礼無辭儀をしかけ候時、残念ニ思ひ事をはたさんと思ふ時、右
之親之顔を能考て見るへし、其かたたる、様子、わらわる、様
子、あざや何か能心に見ゆる時は、勘忍して事をはたす□□□
□□□、又其以後、右通無礼をしかけ、いひかけした時、腹立
て可相果といふ時、又親之顔付を考え見るへし、何程考へても
口にくらしくなりて、どこがどふ共心に見へん時、其時可打、
ちがふものていさかい、いかなる地獄之底迄も打通すべし、何
程腹立ても、親之様子を見ゆる時はうたん事なりと、聞たる事
あり、そこ元もこれを能御心掛被成よといわれ候由、川俣作圓
老直に御咄ニて候、右伊藤千右衛門殿事、七月廿五日之暮元、
福昌寺之下にて、河野伊太夫殿と中人を敵討被申たる人之由、
愚云、浮直之人を切はづしてハ、はしたげんくわのといふは、
まだ顔の見ゆる内に、ちらつと腹立のまきれ思ひ入たること
なくして、□□□から□□□而こく相見得候、何程腹立候而も、
顔の見得ぬ所迄堪忍をしつめたる上ニ而、やふれ候ハ、か
りにもあやうき事ハなかるへし、此所能々可工夫事肝要也、
一東郷与助殿、燕飛を被成候時、かつきを左右の指の先ニ而持た
れ候付、すこし木刀つきかり候ハ、つひあへそふに見得候
故、人々出しをする時、拂打ニ而右之木刀を打おとさんと思ひ、

すでに拂ひこまんと思ふ頭に、もはやひとと打こまれ候故、打
落すことならざる由、

實勝先生書簡

改年之為御慶、預御礼忝奉存候、於鹿兒嶋茂無吳儀被成御越年
候由、目出度不過之奉存候、於爰元も拙者御同前之至候、定而
可被出御精与察申候、随分無御油斷御執行尤候、乍塵外、私右
躰を書載せ候、兵法之儀、胸之切所先題一候、胸切れ敵ニ打向
候得は、向の骨ハおのつから切れ可申候、手わざ不相達候得は、
左様存候而も志迄二候、然其心の地ばん相定、致執行所題一候、
右ニ付而、心のすま共一所に成候得は、間ニは取違、佛道兵法
ニ成候人、此前り段々有之候、此旨能々御工夫可被成□□□とる
所、出家杯之じやすをもみねん佛を唱へ、こつくに成候而も、
なづまさる所迄之事と、右躰相考、是ハ似たるもの、別意味ニ
成候、ためしもの、しばらく首を切られ候時、のかれさる所落着
いたし候に同事と存候、當流の旨を得る所、向之敵之首をあや
し、後二ねん佛と存候、何ヶ度茂氣前能御そだて御執行尤候、
わさの儀心之供ニ而候、たとへハ百人供廻りを召列候へ、一心
不宜むちむとう成人ニ而候得は、供廻之者共及事候得は、はら
くになり、老人も氣ふく不致候、依之、當流も如是也、胸に
いたり候而も、手わざ無之候得は、存念不相届候、手わざ相達
候而も、一応すまず候得は、百人之供之如一念不違候、然は、
手わざ・心共に双方ひやうどうに被成候處、人々皆為存事候得
共、心さへ能そたてめれば、手わざは執行次第、下人之供ニ召
列、存候俟召仕候如く、不相替候、兵法も向之太刀よりこらヘニ
氣先通り候得は、おのつから敵は土くれのことくに存候、依之、

問怪見怪、此上能々御がつてん□□被成候、敵近付時、氣先向
之太刀二不構、先へはやく出□□通候処也、見怪之道理は目二
見るやいなや、敵はぬかばひの如く、かるふく見る所之意味、
敵をいきをつかせず、早相仕まう處なり、右之趣兼而御がつて
ん可有之とは存候得共、我ものに仕成ス所能々御執行可有之候、
私親へ各へ、ケ様二申越候段、折を以御咄可被成候、
歌にいはいはく、

なきなそと人二はいふて有けるが心とは、如此こたゑん
私作

羽ぬけ鳥たゝんとすれと力なし向峯さきはいつも替らん
右二首之歌、一首ハ誰歌二而候、一首ハ名歌二而候、御口夫可
被成候、爰元何そ不相替候故、書中大かた申入候、拙者二も来
月末かた二は地方相仕廻、帰宅可仕哉と相考申候、其節貴面旁
可申入候、恐惶謹言、

東郷^(実勝)藤十郎
在判

三月十三日

愛甲清藏様

山崎金左衛門様

児玉藤右衛門様

田原鉄之助様

愛甲愛右衛門様

追而申入候、土めくらかち、やみの夜に土めくら馬にのり、
出るむちをさゝけて、いちもくさん二かけちらす所面白味
也、當流も我が胸をきらし、心なきものになりてかゝれば、

我有て敵なし、此意味心えて敵をはろはすと、歌にも相見
得たり、能々得心可被成候、此心かつてん不被成方茂於有
之、親二御尋可被成候、

右兵法之話は、從 師匠家要秘之儀も餘多書載置候故、左様之所
ハ御□□之方、他言他見御用捨可有之候、

明和四年

十二月吉日

竹迫藤四郎

東郷重位關係文書（鹿児島市史所収分）

東郷重位書狀

1 本隼人佐宛

貴札具令拜見候、彼岸之御祝言として、玆敷一種送り被下候、忝存候、連歌千句も近日中成就可申候、御小瘡御養生候て御指出候ハ、彼一儀成就可申候、又高崎殿書物判仕候、手次・問書・きりくとき合三卷持申候、御請取有へく候、恐惶謹言、

二月十四日

重位(花押)

本隼人佐さま

東郷肥前守

2 某宛

猶々爰許へ玆敷毎月・荒巻ニツ迄被下候、過分至極候、又々燕飛稽古人衆書立拜見申候、一段と日出度存申候、可然御稽古被成候ハ、いか程成とも御指南有へく候、貴台ハ能時分御稽古被成候、今者我等一圓に無伝候、はなしなとも中々不申候、各々表を涯分御稽古迄候、余流極位ニまし申へく候、少も無別儀候、日本国之兵法くらき事なく候、御心やすかるへく候、以上、

其後者不申通御無音能過候間、是ヨリ可申入与存候処、尊書忝存候、其他御無事之由、先以目出度存候、次当流之表稽古之人衆書立被下候、則被覽候、一段目出度存候、入組之儀にも無御座仁へハ、涯分御指南尤ニ存候、表ヲ能御稽古候ハ、余流ニ負儀有間敷候、於江戸兩度立合共候、老躰にて無用之儀御座候へとも、是非共と所望之仁御座候間、一氣味仕申候へ者仕合能候、国本之外間雖申候、以貴面様子申入候へく候、恐惶謹言、

八月九日

報殿

東郷肥前守 重位(花押)

3 岩本清左エ門尉宛

(封紙上書)

東郷肥前守

岩本清左エ門尉様

参貴報

重位

尊書拜見仕候、一儀問書之事承候、逐々調可申候、不洩御執心之由承及候、随分味共申入へく候、御料番御持進有之、大事成本にて候間、卷本仕候、此方へいか程も御座候、其方之料番進進申候、近日中調可申候、明朝よりも御隙之時分御光儀有へく候、次第二はなし可申候、恐惶謹言、

神無月六日

重位(花押)

4 岩本宗兵衛尉宛

思召寄御伏難有存候、其地毎日御辛勞之由承及候こそ無比類儀ニ候、爰元無替儀、若年之衆一儀稽古事々□□承及候、我等此頃痰氣然々無之候、覺悟之前二候、乍去養生ハ無油断仕候、是ハ大まよひたるへく候、總而ハ子とも取持申ニ付如此候、肥前守其元へ罷居候、御奉公方油断不申様御異見頼存候、各々御宿所別而御無事ニ御座候、少も御念遣入間敷候、余々其元の御逗留長々敷候間、分而御帰宅被成へく候、待申候、我らも何とやら可申候、各々御頼之書物打立、恐惶謹言、

六月十七日

重位(花押)

岩本宗兵衛尉殿

貴報

5 岩 清左宛
(封紙上書)

東郷肥前守

岩 清左様

参人々御中

重位

貴札具拜見申候、扱者山川へ御逗留候儀不存候て、状にても不申入、背本意候、連々一儀之興之儀、御法度之儀候へとも御執心不淺候条、以時分可申入候、當時者先稽古等も止申候間、不及是非候、上方より此月分頃者到来二も有へく候、其時分より稽古初可申候、其節先一段成就有へく候、世間二知不申候様御嗜有へく候、猶々以書面可申候、恐惶謹言、

六月廿四日

重位

6 有川平右衛門宛

以上

尊書忝存候、先日爰許御来儀忝存候、為御礼罷出候へく候共、御他行候条申置候、當時不罷出候、近日中御帰帆之由候間、兵少老可被仰進之時出合頼存候、次右近允一儀御成就一段目出度存候、御舎兄□御執心候儀御尤之儀候、四郎兵衛殿へ御談合有へく候、其後者涯々様子申入へく候、為御存候、恐惶謹言、

卯月十八日

有川平右衛門

人々御中

東郷肥前守
(花押)
重位

7 伊地知四郎兵衛宛

尊書忝存候、先日者早々御尋過分至極二候、御夢想之歌扱々殊勝二奉存候、類歌多々御座候、我々も歌ヲ草案申候、明日必々書付

進上申へく候、彼一儀気味御増進之様子驚入申候、万々以貴面可申候条、不及細筆候、恐惶謹言、

七月四日

重位 (花押)

東郷肥前守
重位

伊地知四郎兵衛様

参人々御中

8 珙阿尊老宛

已上

当春之御吉慶重疊多幸々々、仍御手前御初候哉、承度存候、次者彼村尾正左工門尉殿一儀被成度由候、近頃御辛勞ながら御指南有へく候、少も別儀有間敷候、様子ハ久富半五左工門尉殿にて承候、猶以貴面申入へく候、恐惶謹言、

正月廿七日

東郷肥前守
重位

珙阿尊老

参人々御中

9 珙阿弥尊老宛

以上

改年之御吉慶珙重多幸々々、永春中可申談候□彼大浦伝左殿・西郷万左工門殿一人之咄大望之由候、近頃乍大儀、涯分御談合有へく候、余者以貴面可申入候、佳事、恐惶謹言、

正月廿日

東郷肥前守
重位 (花押)

珙阿弥尊老様

参人々御中

10 珙阿尊老宛

川上与兵衛尉

測辺又左衛門尉

宇都宮長右衛門尉

山口孫左衛門尉

辺牟木利右衛門尉

井出籠三介

伊地知長兵衛尉

右之七人一儀談儀大望之由にて、貴老へ引付候へと被仰候間、墨付式段まで御談合可被成候、以上、

西二月九日

東郷肥前守(花押)

弥阿尊老

参

11 弥阿弥老宛

覚

崎元久右衛門尉

酒匂弥六

松永寛右衛門尉

浜田彦左衛門尉

白石弥兵次

萩原勘左衛門尉

曾木三次郎

染河才兵次

鍋倉金十郎

溝口舍人助

前夜申入素衆
青山六左衛門尉
鳥丸

亥三月廿二日

右人衆一儀之咄大望之由被申候、御大儀ながら御談合有へく候、乍不申二段までたるへく候、次二我等事草気なとも出合不申、日々罷出候、近辺御通之時分、御立寄有へく候、恐惶謹言、

三月廿八日

東郷肥前守
重位(花押)

弥阿弥郎

参人々御中

12 東郷重位覚

覚

野元佐介

有馬休右衛門

児玉喜之介

折田伝介

伊東源右衛門尉

三坂次右衛門尉

以上

13 東郷重位覚

覚

染川善左衛門尉殿

大迫喜右衛門尉殿

上野大蔵丞殿

財津左伝次殿

染川木工左衛門尉殿

參 四月二日

東郷肥前守(花押)

玆阿弥老

參

14 田中玆阿弥老宛

追而 御前之出合能様ニ御取合奉頼候、竜伯様御氣相も、い
ま分にて御入候へ、被召立へく候、目出度事此上有ましく
候、以上、

御無事ニ御上京被成候哉、目出度奉存候、

諸大名衆へ御立合一儀被遊候やと心遣候、

御船元々 野太郎右殿にて被成 御意ことく、示現流御許之人衆
へ出刀切味大方談合申候、皆々秀次第かきりなき由被申上候、

又吉様御兵法拝見仕候、一段見事に被遊候、御許之手教之内御
不合懸之分細々申上候、殊之外御得心にて候、

一竜伯様御不例氣大事入御なされ候而、我々式迷惑及申候、然者
昨日よりちと御氣もかろくおはしまし候間、今分にて入御候ハ
、可被召立候、扱々目出度事此上有ましく候と、上中下共祝言
申上候、

一ミヤこの数寄之様子、涯分々御覽被成候て御下向有へく候、爰
元にて稽古申へく候、

一かこしまいづれも御無事に入御なされ候由承及候、是又御心遣
入ましく候、定而今月中ニ御下向たるへく候条、以貴面方々可
得尊意候、自七介殿・くほ七兵衛・大稻殿、いづれもく若衆
中へ御心得奉頼候、以上、

六月六日

東郷藤兵へ
重位(花押)

田中玆阿弥

參人々御中

15 玆阿弥老宛

覚

法元孫太郎

三代宗右衛門尉

藤井助四郎

林鐘六日

右三人一儀咄望敷由被申候、涯分可被成候、為其一書如此二候、
以上、

亥六月六日

玆阿弥老

東郷肥前守

重位(花押)

16 玆阿弥宛

(封紙上書)

玆阿弥様

參人々御中

東郷肥前守

急度申入候、順風能出船申候、從上方細々申入へく候、弥十郎事
万事頼存候、次佐土原四郎右衛門尉殿一儀稽古有度由、貴老へ引
付申せとうけ給候条、書中如此候、涯分御熟談尤ニ存候、若衆御
稽古疎略ニ無之様御下知可有之候、又猿掃部様・神戸五兵衛・日
監さまへ御心得頼存候、恐惶謹言、

六月七日

東郷肥前守
(花押)

17 田中玆阿弥老宛

覚

郡山衆 有川少左工門尉

成尾万右工門尉

同 同七介

小山田衆 竹下徳介

むかさ衆 白高与竜

亥ノ九月九日

右之人衆一儀稽古有度由被仰候、以誓帝御談合尤ニ存候、以上、

亥九月十一日

東郷肥前(花押)

田中玆阿弥老

参

18 本田伴兵衛尉宛

尚々其元御手前御奉公肝要ニ存候、貴老御孫様へも御奉公御油断無之様御心得可被下候、貴老御屋敷近辺罷通之砌ハ、かならず見舞申候、御屋作見事ニ首尾申候、御内肝煎之儀、誠にふしきにて候、それよりも御礼能々可被仰候、我等孫共興行一儀支候ハ、涯分御指南有へく候、少も私之儀有ましく候、表なども貴老むかし御稽古御辛勞被遊候、其旨少も違不申様御指南有へく候、種々人之利口私之儀を被成候とも、それにかまひなく昔之筋召通り有へく候、此度因州様御文にも、まこと有之歌にて文を被遊候、然者たくミ事ハ悪かるへく候、以上、

其後御左右不承候、定其地御仕合所残有之間敷候、目出度奉存候、若出合共候ハ、可然様に御取台所仰候、此方貴勞御家中一

段御無事ニ御座候、少も御念遣人間敷候、爰元堀より上三大火事候へとも、御屋敷ハ少御念遣無之候、貴勞様あたりもさへき不申候、川上^(久國)因幡守様被之一儀之文ヲ被遊候而被下候、切々御文牒と申、古事など面白引被成候、前之大竜寺被遊候ニツ之文より面白とて、皆々当流執心之衆者書写被申、誠に寄特成儀難申尽候、我等ハ殊之外草臥申候、此後彼一儀私事無之様御南指允候、恐惶謹言、

卯月五日

東郷肥前入道

重位(花押)

本田伴兵衛尉殿

参人々御中

19 大野左近將監宛

御懇札具拜見仕候、誠に忝奉存候、旧冬出兵共ニ而、寺領之時分兩度預尊書、過分至極候、則被召出如前御奉公仕候、本望存候、貴老様御筋氣此頃如何様御座候哉、時分柄と申、御養生御油断有間敷候、次ニ上様其節御通路御息様御差出被成候而、御仕合共無残所由其間得候、御大慶此上有間敷候、殊之外御盛人之由承及、一段目出度存候、將又一儀^(舊入忠政)撰州老於宿所被成始候、年罷寄見物罷成間敷と申候得とも、是非共御意有之候間、罷出見物申候、昔各之被遊候ニ相替、若手之人數手前める候、我ら存生之内さへ最早いな物ニ罷成候、後年者形も有間敷候、草の陰ニ而心氣晴事なく、成仏不定迷惑ニ存候、古手之人衆六七人召仕候、ちと氣茂晴レ万々以貴面可申入候、恐惶謹言、

二月七日

東郷肥前守
重位

大野左近將監殿
參尊報

(以下三通藥丸家文書中)

20 示現間書警噓奥書

示現間書警噓

(略)

右一卷雖為秘密、任御懇望進覽之、聊他見有間敷也、若後年当流
執心之仁於有之者、以誓紙之旨御免許尤候也、

寛永三年

二月吉日

藥丸大炊兵衛尉殿
參

東郷肥前守
平重位(花押)

21 二札佐渡守宛

猶々

度々御狀被下候、誠ニ忝奉存候、我等事先月罷出、如早晚御奉公
仕候、可易御心候、又書物之儀承候、無失念調進上可申候、次其
元へ若衆たち御心得玉ハるへく候、御息さま御手前被遊候を拜見
申度候、爰元ハ大隅守殿儀二付、一儀今程用捨之趣御座候、定此
月末より稽古可有候歟と存候、又唐津之中江新八郎殿子息、去年
十二月しあひ被仕候、両度打勝申候後者、白刃ニ而しあひ、相手
をしつめられ候、名譽仕満足申候由、此比新八殿狀をつかハしに
ても、当流面目九州への外聞ニ候間聞せ申候、恐惶謹言、

六月六日

東郷肥前守
重位判

二札佐渡守様

22 本隼人佐宛

如尊書、昨日者善吉和尚御忌日ニ而候間、水なと手向申候、只今
は見事成一種送給、御志不淺候、次昨夕助七郎殿御手前拜見申候、
切々御器用之儀驚入申候、無双之御上手にて御入候半と存事ニ候、
將監殿・十左エ門などの模様ニ候、御稽古さへ被遊候ハ、後々
ハ御上手たるへく候、我等跡ニも可思召合候、何れも若衆手前拜
見申候、さりとてハ能御指南被遊奇妙ニ存候、夜前如申入候、余
り木刀越申候、是一ツ笑止ニ候、意ハ識ニ伝へ、識ハ心ニ伝する
事秘密習ニ而候、無心にしてつよく切出、内ニ意ニ伝へ、識ニて
よハく切出、内ニ心ニ伝へつよく切出す、是当流之題目ニ而候、
能々此道をも示被成候て、末世迄も無相違様御指南尤ニ存候、恐
惶謹言、

九月六日

本隼人佐殿

重位判

東郷肥前入道

二 東郷重位宛書狀

1 島津忠恒^家書狀

今度ハ供候て令満足候、然者先度之書物はや相納候哉、承たく候、
猶此使可申候、かしく、

青春十日

忠恒

東郷藤兵衛尉

2 島津忠恒^家書狀

猶以自筆申候也、

態申候、兵法之事、兼日申候ことよく、秘密可有義尤候、今程者みなく、心安き様に覚候哉、免候衆にも不残教候てハ不可然、此兵法之外別儀有ましきと畏心中よりいよく、かんし入迄候、猶口上申候、かしく、

季春十七日

忠恒(花押)

忠恒

東郷藤兵衛尉

3 島津忠恒家書状

今度奇特なる事候て、丸目一流之兵法見物候、別儀なくいよく示現流たのもしく、月二日を添候やうに明かになり候、彼示現流之事、猶々かくし候てハの事にて候、丸目流之事も、誠二ふかくしきたしなミと聞き候、其心得尤候、もの語可申候間、早々参候へく候、かしく、

二月廿八日

東郷藤兵衛

忠恒

4 某書状

態申候、ちさかたなをこしらへ度候、然者尺之事、如何候て可然と思候哉、尺を書付可給候也、

六月廿二日

東郷長門守

与

5 福町尚助起請文前書

起請文前書之事

示現類ひやうはうきひ他見他言申間敷候、

右之旨相背折者、日本国中大小神祇別而八幡・愛宕之御はつを申かうむり可申候、以上、

卯月十九日

福町七郎右衛門

尚助(花押)

東郷肥前守様

6 寺田勝介起請文前書

起請文前書之事

示現類ひやうはうきひの事、御相伝預申候事、忝奉存候、此上他見他言仕間敷候、

右之旨於相背二者、日本国中別而八幡大菩薩・愛宕之御はつを申かうむり可申候、以上、

元和八年
卯月十九日

寺田勝介(花押)

進上
東郷肥前守様

島津家老連署知行宛行状

引付

高百石者

右者東郷肥前守殿へ、此中八木三十斛ツ、為御加持被給候、右之返地九十石又十石者、此度為加増、合百斛可有支配候、別而御奉公被申間、如此者也、

寛永十一九月廿八日

(伊勢貞昌)
兵部少輔印

左近將監
(島津久渡)
彈正太衛

(有能)
山田民部少輔殿

(有能)
高橋伊豆守殿

(久清)
新納加賀守殿

7 堀某外三名連署書狀

一東郷重位老事、次男之故知行少も無御所持、自分之御堪忍候之處、於京都示現流兵法相伝被成之旨、中納言様人御耳、被召出被遊、御相伝為御師匠別而難有儀共為有之由候、依其御知行度々拝領御座候事、

一重位老・(肥前殿・藤兵衛殿迄三代者、当流首尾能御相統二而、中納言様・大隅守様・薩摩守様・修理大夫様被遊御相伝、別而御信向之御事二候、諸士弟子衆茂可為數千人候、何れも尊敬二

而無比類兵法、江戸并他國へも無其隠候、藤兵衛殿未男子無御座候、乍然向後出来可申与存候、又者養子をも可被成候間、後

年二者相伝可有之候得共、可為中絶儀笑止二存候、就其染川長

兵衛殿器用二被仕由候条、弥被掛心候様二被仰渡御指南御座候

而、藤兵衛殿後見二御取立、後年藤兵衛殿家二相統有之候様二

御心得肝要二存候、重位老事兵法故二御取立、御高恩之一筋二

候處、致中絶候得ハ非本位意候、我々迄残念二存候事、

一長兵衛殿儀、身上逼迫故内儀をも養兼ね、門より井出籠新左衛

門殿へ被遣置候處、当四月暇を為被出由候、長兵衛殿者当日武

五郎右衛門殿より、朝夕を被相統由候、右之仕合二有之二付、

染川殿跡職被統儀難成候条、養子連返候而田舎之栖をも可仕由

二候、彼養子之儀、源之丞殿へ藤兵衛殿より東郷惣兵衛殿を以被仰入候刻、斟酌二被存候へ共、後年ハ知行三拾石可被遣由被仰断、又者銀老貫眼被遣落着之由、惣兵衛殿被申候、如御約束之高三拾石被遣、身上落着御座候而可然候、右之外二も、御加勢御座候ハて不叶儀者御心付可有之候、菟角藤兵衛殿分可被添御心儀と存候、左候へハ、長兵衛殿最前川上十郎左衛門殿養子之刻、此中之内儀彼方二而縁与有之候得共、十郎左衛門殿離別二被申、家村長右衛門殿息女縁与有之候、然処川上殿養子連返以後、肥前殿より井出籠殿江被仰断、重而縁与有之、最旦子供御座候、如此之一筋二候、又者子細も無之由候、然時者内儀事立帰、被遣夫婦可然存候事、

右之旨内々承、笑止二存候、我々事對御方無別心候、世間批判も如何二候、依其存寄申入候、於御納得者満足二存候、已上、

戊戌六月八日

堀四郎左衛門

別府式部左衛門(花押)

東郷喜兵衛(花押)

和田讃岐

東郷藤兵衛殿

三 東郷氏支族系圖

東郷氏支族系圖

東郷実乙就予修撰系圖、夫東郷氏本出

桓武天皇之裔、太郎光重之男曰武藏守実重、実重初来于本藩、領

薩之東郷、因氏焉、実重六代曰太郎左衛門尉氏重、氏重之長子曰

四郎重勝、重勝不嗣世統、次日薩摩守右重承世統、次日右衛門佐

重將、次日三郎次郎稱瀬戸口氏、此則瀬戸口氏之祖也、三郎次郎戰死而無嗣、庶弟九郎統兄之後、自是至世々連綿本支百世、子孫後多改東郷氏、肥前重位亦其裔也、而美乙藏古譜三卷、共世系不接統、詳略有異同、又摠旧記、天文二十三年乙巳九月、太守義久公攻隅州岩劍城、此時瀬戸口藤兵衛勤御幡役、以年次推之則疑是重位之父也、雖然家乘之所載無所徵、故並不取之、敢不妄誣爾夫戴籍損壞猶無所考信、何必美乙之系圖、往々而皆然、蓋以不知為不知、既出于聖訓、故至重位上世則姑闕如、以俟之識者云々爾

天明二年壬申十一月

本府太史本田親札撰

印

平姓

東郷氏支族系圖

○重位

弥十郎 藤兵衛 長門 和泉 越前 肥前 隱居之後亦

自称重位、

○永祿四年辛酉誕生、

○天正中

太閤秀吉公堀起平閩西築聚樂城於京師、而朝四方之侯伯、

此時我 義久公亦朝之、因留滯歷年矣、重位亦從 公在京

師、當此之時有一道人、自閩東來而談劍術之妙有味、重位

亦自少壯好學擊劍、因就道人受其技術、天正十六年戊子

六月也、而朝習暮思大得其妙理、於是道人亦感重位之技之

速詣其奧義、同年十一月、遂授所伝無余蘊之印可也、号其

技曰天真正自顯流、道人始曰赤坂雅樂助、初稱後為僧稱善

吉和尚、永祿十年丁卯生於常陸國、慶長十一年壬寅九月五日死、享年三十六、法名開善寺大居士、京師天寧寺四世之

住僧也、和尚受此流于金子新九郎、新九郎受之十瀬与三左

衛門、与三左衛門參龍於常陸州梶取大明神得神助、而美始此流也、

○重位得此術独自秘而不敢輒授人、雖然、有其美者其名不可

掩也、終達 太守家久公之間、慶長九年甲辰二月、召重位

試技、有東小太郎者、業待捨無二劍、此時公師之、使重位

對之、重位操木刀直擊仆之、既而召重位於 御奥、以木刀

与重位、公自持白刃臨之、重位對之自若神色不變、公大感

之、以此日所佩之副刀冷工藤州佐藤氏所長二尺六寸一節、刃之伸影與無天德觀世音菩薩之九字、手自賜重

位、賞其技之到妙所、又賜御杯辱使重位為 公之師也、重

位年四十四矣、自是類蒙恩眷焉、

○慶長十九年冬、前右大將秀賴卿集天下亡命之士、輿撰州

大坂之城、与

大相国家康公相拒、我 家久公亦応

大相国之命出師、十二月五日、公之軍至于日州美津津、

時武井利兵衛齋 秀賴卿之書於來、美津津本陣徵兵、公

不応、使重位且別府信濃景親縛之、又遣景親護致之駿府也、

○重位侍 義久公 義弘公之御前者數也、或 而公書所自詠

之和歌以賜之、一日義弘公召重位曰命曰、汝以自顯流授

家久公、家久公亦篤信此道既久矣、今也猶有得意之態、

實是汝之力也、賜之以賞汝之功、乃賜采国光九寸之短刀、

○家久公參觀于江都、将至于伏見、遡河在舟中、時本郷伊予

義則・重位侍舟中、公之舟独進而從者之舟未及、与加藤

肥後侯之臣某等之舟相過、某等之舟所繫之繩、將渡越 公

之乘舟之上、舟子切為兩截、某等大怒出舟中上陸、奪取

公之乘舟所繫之繩、以自陸引之、以迫近之也、事將及危殆、

重位乃出舟中直向之、公止之、既而從者之舟悉追至焉、竟事不至于危難也、其夜至于伏見則召重位曰、今日之事幸不及難也、如不得已則衆寡不敵、公之意既決、當視其渠魁之者擊而殺之也、重位乃曰、命曰、如臣等更無他意、隨手而悉殲之爾、爰暇擇敵者乎、於是公大感即賜副刀一口、治江國傳是書、長一尺三寸、刃之形如蓮之花因命曰、此副刀能堪斷剛、公平日所自受今賜之、宜延而佐子孫也、後當肥前重利之時、嗣君綱久公好利刀、因命獻之、無幾、嗣君薨于江都、公大漸禱病于愛宕神、納之祠中、歷年後伊勢十兵衛貞冬請神藏于家云、

○元和八年夏、重位在于江都、柳生氏之高弟福岡七郎右衛門・寺田勝介請立合、重位固辭再三、遂不得命矣、因就国老伊勢守貞昌問此事、如何、貞昌聽而許之、乃重位執木刀對之、兩人亦執木刀相尋進、重位皆擊仆之、兩人服其能、即奉盟書為重位之門人、其盟書云于今、福岡氏者重位所擊之癥痛而經三日死去、此事達公之聽、公深感悅之賜副刀體江一口、以賞之也、

○三原伝左衛門重隆、就天流鎧術之師得其技之妙所、百無一失、家久公令重位試對之也、重位雖辭讓不得命矣、乃立執木刀對之、伝左衛門一不能中于重位也、公亦大感悅之、

○当 家久公之時、乱世之余習未除、是故凶暴叛命之徒頗多焉、公命重位或有就家擊殺之者、或有過於途殺之者、其多至于十數人矣、重位一莫所誤也、其中橋口小藤太為凶暴之最、遣重位且鎌田左京政德往擊之、賜重位以則光之利刀、

重位以此刀立擊小藤太仆之、其刀之利無并比者、以事聞于公、因又命令還之也、

○補坊泊地頭職、又賜宅地一區於御城下、二反三疊、七七部半

○家久公年或二或三、光臨重位之家、又賜田千石、重位有所思、因拜賜其中四百石、以六百石還奉之也、重位老退之後公時臨有命、賜田百石以為余年之供養、其恩眷之涯至于如此、

○当重位生前、家久公使画工図画其形、公親書重位所詠之和歌及其法号為掛物、以賜之、使子孫每歲首会徒弟、始習技之日掛之坐上、以伝無窮也、今年首所掛於壁上則是也、
○重位年八十三病篤、太守光久公自臨候之、重位雖甚衰、已改衣服將出臥內拜之、不能起行、故重位臥床褥、親戚持床褥出之於御前、有懇命之至又談此流之深秘、公詰、因奉獻信国之副刀一口、其曉重位死、于時寬永二十年癸未六月二十七日、法名能字俊芸菴主、葬于府下南林寺、

女子

為北郷次郎兵衛之妻、生一男後離別、

女子

和田讚岐正貞妻

○重方

弥十郎 藤兵衛 肥前

○慶長九年甲辰誕生、月日不母松木伊予女

○重方亦授受乃父之原流以授徒弟、光久公亦自壯歲之時、召重方習練之、時或臨重方之家如先君家久公之時云、

○為町奉行・郡奉行、且補父子相繼坊泊地頭職、

○重方之為郡奉行、此為郡奉行之始也、此時邦内田野不開、

土地荒蕪、故雖 御判物之高猶損十萬石焉、重方為郡奉行

勤勞墾田、無幾田野大辟 御判物高全開墾、而剩二萬四千

余石、是重方之力也、於是 光久公召重方於 御前、賜享

応、且賜田二百石以賞之、此間實自慶安二年至万治元年、

○重方有宿志創建小寺、安善吉和尚及重位之牌于此、門人及

其余之人士附助之者若干人、而取重位法号之字号能学寺、

在府下武村之内、其寺今見存矣、

○万治二年己亥八月七日死、享年五十六、法名雄山州英庵主、

葬于南林寺、

女子

堀田郎左衛門興延妻、

○重利

弥十郎 藤兵衛 肥前

○寛永元年甲子誕生、月日不可考、母別府主殿重芳女、

○奉事 光久公 嗣君綱久公、且得重位以来所伝之原流、以

奉授於 綱久公、公時或 臨不異乎先時也、亦恩養類至

其中、拜賜備前兼光之御刀一口、

○為御兵具奉行吟味役、

○転補坊泊・内之浦・羽月・野田・隅州山田等之地頭職、

○元禄三年庚午五月二十四日死、享年六十七、法名天柱明真

庵主、葬于南林寺、

女子

川上久右衛門久峯妻

○母同上、誕生年月不可考

景吉

大藏兵衛

○寛永十三年丙子十一月五月誕生、母同上、

○為酒匂利左衛門景明養子、

女子

伊勢六郎左衛門貞増妻

○母同上、誕生年月不可考

重貞

与八 兵衛 彦兵衛 仁兵衛

○寛永十六年己卯誕生、母同上、

○為武宮内左衛門重宗養子、

重次

善助

○寛永十九年壬午誕生、母同上、

○延宝六年戊午七月三日死、享年三十七、法名了山龍心居士

女子

初嫁猿渡仲右衛門信高、後去再嫁中江八右衛門貞時、

○母喜入休右衛門久守女、誕生年月不可考

女子

福屋助左衛門兼貞妻

○母同上、

女子

○母同上、

女子

本田次大夫親興妻、

○母同上、

女子

五代舍人友保妻

○母同上、

○實滿

初重治 弥十郎 藤兵衛

○寛文十二年壬子七月七日誕生、母同上、

○延宝八年庚申二月二十八日、初拜謁 太守光久公、献御太

刀馬代二種一荷、高崎四郎兵衛能冬為奏者、

○為 太守綱實公之御側御小姓、後免、

○実滿壯歲之時、遇家之不造、僻处平辺土、宝永二年乙酉九

月二十二日、有 命賜御切米三十石、且宅地一区於府下、

而作習技之場屋、以賜之、国老川上式部久重使高橋七郎右

衛門種周伝之、同十一月二十八日終始、十二月二十八日習

場且居室成焉、実今所居天神馬場宅地云、翌年正月五日有

習技始、因 命国老島津大藏鑒臨焉、

○宝永七年庚寅五月九日、 太守吉貴公召実滿於築地茶亭、

欲 上覽我技術、於是実滿詣于茶亭、白燕飛歷次至初段二

段為之、以備 御覽、亦因家例献樽酒且御肴、奉謝之、国

老島津將監久当、比志島隼人範房召実滿有懇諭之言、且於

御前賜御通酒、所携之門第六人并賜御通酒、

○享保十六年辛亥十一月十一日、 太守繼豊公亦有 命召実

滿於同所、有当流之 御覽、実滿携子弟且門人數輩詣之、

各為燕飛、二男実勝独代乃父之老至二段目為之、実滿於終

為持掛長木刀二段之中煎之打爾、此時有 優命從輕、献御

肴一折奉謝之、至実滿及門人悉賜御通酒、

○享保十八年癸丑九月十日死、享年六十一、法名物外院一運

良機居士、葬于南林寺、

位照

初重矩 弥十郎 長門之助 藤五左衛門

○元禄七年甲戌正月二十八日誕生、母比志島孫右衛門義時女、

○宝永六年己丑十二月十八日、献御太刀馬代二種一荷、奉拜

謁 吉貴公、堀甚左衛門興昌為奏者、

位照雖為嗣嫡、有故不承家之統、

○安永九年庚子五月十日死、享年八十七、法名奇鋒院達道伝

心居士、

実勝

藤十郎

○元禄十二年己卯八月十四日誕生、母同上、

○宝歷六年丙子四月二日死、享年五十八、法名法元院義山良

勇居士、

俊方

後藤左衛門 平六

○宝永三年丙戌五月二十四日誕生、母二階堂源右衛門行家女、

○為伊集院為兵衛俊陳養子、

（假紙）
○寛保元年辛酉八月晦日死、法名大雲全海居士、

実賢

(張紙)

初藤弥左衛門 後善助

○宝永六年己丑五月十一日誕生、母同後方、

○安永九年庚子三月二十五日死、享年七十一、法名諦良院自
参觀然居士、

長兵衛

(張紙)

○山伏之名長山 上同大長 正德五年乙未七月八日誕生、
母上同、

○実叻

弥八左衛門 藤右衛門

○正德元年辛卯七月十日誕生、母竹下寛右衛門種昌女、

○祖父実満請以実叻為嗣、享保八年癸卯九月二日、国老島津
木工久武下 命、使村田九郎左衛門經武許請、

○享保十三年戊申八月十五日、献御太刀馬代二種一荷、奉拜
謁 繼豊公、鎌田源左衛門政昌為奏者、

○同十八年癸丑十一月四日、国老樺山主計久初下 命、使小
林中太兵衛政一承祖父実満之後、同十二月十三日、献御太

刀馬代二種一荷奉拜謝之、島津求馬久教為奏者、

○宝曆三年癸酉十一月八日、 太守重年公於御広庭茶亭今改外
初 上覧 当流、実叻率門人若干人奉備 上覧事、同祖父
実満之時、

○明和二年乙酉九月十七日、 太守重豪公於同所有 上覧事、
同宝曆三年之時、

○安永四年乙未八月六日請隠居、

○実乙

弥十郎 藤兵衛

○元文三年戊午十月七日誕生、母野村勘兵衛良昌女、

○宝曆二年壬申五月二十八日、献御太刀馬代二種一荷、奉拜
謁 重年公、桂太郎兵衛久中為奏者、

○安永四年乙未八月六日、国老喜入主馬久福下 命、使村橋
左膳久昌、從父実叻之請為家督、同十月十五日、献御太刀
馬代二種一荷、奉拜謝之、島津又七郎久実為奏者、

良貞

藤五郎 源右衛門

○寛保元年辛酉七月十五日誕生、母同上、

為川崎源右衛門良記養子、
実辰

弥八郎

○寛延三年庚午十二月十五日誕生、母同上、

実與

善十郎 弥十郎

○明和五年戊子八月二十二日誕生、母佐多休左衛門直矩女、
○安永八年己亥八月十五日、献御太刀馬代二種一荷、奉拜謁
重豪公、新納四郎久宝為奏者、

実

小藤

○安永二年癸巳二月二十九日誕生、母同上、

「女子
(張紙)
安永四年乙未十一月二十一日誕生、母同上、」

示現流關係諸記錄（旧記雜錄所収分）

東郷重位文書

1 兄玉四郎兵衛尉宛

『真本兄玉氏家藏』

任御懇望、自流無残所御談合申入候事、諸天も御照覽之前二候、聊他見他言有間敷事肝心候、若々此流大望之方於有之者、以誓詞御許可被成候、御失念之儀共可預御尋候、仍手次之状如件、

慶長三年

瀬戸口藤兵衛尉

極月初八日

重位（花押）

兄玉四郎兵衛尉殿

2 兄玉筑後譜

『兄玉筑後守伝』

慶長九年甲辰二月、慈眼公命東郷重位、与東新之丞關創於前、重位克之、公觀大感、乃学其技、寵遇日隆、而重位門弟莫出實相右、由是實相亦辱 公知、遂得被 恩俱為親密臣焉、

3 重位弟子太刀合書

『重位弟子太刀合書』

兄玉筑後殿事ハ重位公之一之弟子ニ而候処ニ、再起・三太刀・燕飛などの様な事ハ得せぬ人のよし、其いはれハ木刀を取られそといつても、正日に打なる人ニ而、兼而さまゝ習ひ候事は皆なし也、まん誠の我は胸一ツて打れ候ゆへ、手よふ形よふの仕かたハ無之候よし、重位公の御歌に、

師もわすれ我も忘るゝ心こそ誠の道をあらわしにけり

とあり、筑後とのゝ兵法直ニ是也、又御歌に、

六ツ敷習ひもて行其奥にぬしなき太刀の味は有なんとあり、筑後殿兵法、ぬしなき太刀にて有之たる筈也、

4 島津忠恒書状

『家久公御譜中』

「正文在島津左衛門久道」

猶々はんかた必く、かしこ、

示現流ノ兵法之事、一覽有度事候間、我々事ハ新学ニ人然々不存候、殊にししやうなと、申事、身喰々て候へともくるしからず候哉、左やう二候者可申候、猶以面談申候へく候、かしこ、

「朱カキ」
「慶長九年」四月一日

忠恒（花押）

より

（又カ）
吉殿

忠恒

5 島津忠恒書状

『家久公御譜中』

「正文在島津左衛門久道」

此木刀不可然候へともたせ候、然者案文之事承候つるまゝ書付進之候、折々書ハそれにて、御認候へく候、又雨中こひしくちとく入来待存計候、

「朱カキ」
「慶長九年」四月三日

より

（常久）
又吉殿

忠恒

6 島津惟新 書状

「義弘公御譜中」

「正文在東郷肥前」

猶々其許にて、方々の茶湯ニ被相候ハんと、從是浦山敷存計候、乍不申入念當世のもやう見及、下向あるへく候、河野伊右衛門尉へも辛勞之段、右之通念比ニ申度候、

今度陸奥守殿致御供、別而辛勞之儀察存候、然者肩衝之蓋ニツ引せ可被下之由、龍伯様御意候条、かたつき式ツ指上せ候、ふた之事、貴所調達憑存候、為其用一書候、同袋之事、平左衛門尉へ談合候而是又調儀憑入候、恐々謹言、

「朱力牛」

「慶長十年秋」 卯月三日

惟新

東郷藤兵衛尉殿

7 慶長十年国分衆中(抄)

○東郷藤兵衛尉 子肥前 其子藤兵衛

8 詠社頭祝言倭歌(抄)

「国分宮内澤氏藏書」

長門守重位

千とせふるまつの木すゑや久かたの

雲井のつなのやとりなるらむ

慶長十五年五月二日 和歌会

『正会紙之順、公 忠俊 玄与 宗親 久正 永温 宗察

栖幽 豊信 元綱 重位 与進 住房、題書違候故略写し候

付、為見合書付置也』

9 東郷重位和歌

「小根占園林寺由緒按書」

一慶長十五年、小根占江 龍伯様御光儀之時、當寺江御成被遊候御詠歌御短尺并御供衆之短冊、于今格護仕候、左ニ記之、古寺の砌の松に風ふれてさながら法の声を聞かな

重位

10 古高帳(抄)

從国分之移衆

高百五拾七石三斗六升六合

やしき四ツ

東郷長門守殿

(表紙ニ、「慶長拾五六年之高帳ニ而候由、米良隼人殿所持之高帳ニ書付有之候故、此段書留置也」)「或本ニ慶長十八年高帳ト有之」

11 元和六年薩隅日三州一所衆并鹿兒府衆中高極之帳(抄)
高三百二十四石 東郷越前守殿

12 賦何船連歌(抄)

元和十年二月十二日

猶きかまほしはつ敦公

つきくにかたること葉のはてもやハ

軒のあふちそさかりすぎぬる

月のころ見はや小草の露の色

ちいさき舟を引すて、をく

重位

重位

重位

重位

重位

陰高きやまのあなたや里ならん
おもハす秋のまたきたつ空

賦何人連歌

まさりもて行秋のすゝしさ
散しけるまゝに木の葉の色ハおし
身をしる雨に袖はぬれつゝ
もとめよるなには堀江のとまり船
あたしとて命を思ひくたすなよ
真木たつ陰は秋をよそなる
あふかひもたゝなつの夜ははかなしや
ぬるともよしや梅かえの露

重位

重位

重位

重位

重位

重位

重位

重位

重位

13 島津家久譜

「家久公御譜中」

同(寛永三)年六月三日、家久従大坂使川上式部太輔久國・蒲池備中入道・東郷肥前重位、令國家之政事於在國之家老、且降自書花押之書、如左矣、

14 島津家久書状

「御文庫四拾八番箱中」・「家久公御譜中ニ在リ」

猶以如此談合者いつも有之事候へ共、臆而又わけもなく成行候事、前々、渚底候、於今度之儀者、少も向後不相替様分別肝要候、

今度國家之肝要、於爰元談合申付、其趣川上式部太輔・蒲池備中入道・東郷肥前守ニ申合遣候、細々被聞届、日夜入精以相談可被

相調事、不可有油断候、餘々百姓町人諸浦之者共、疲はて國茂荒はつる軀之由聞届候、其上他國の商人茂、噫不可然故出入無之、諸廻船も不有付由、自國他國之失外聞候、此等之趣、今度談合所へ申聞、此中之法度少々相改候、就中唐船之噫、去年自江戸申遣候筋相替、唐人共致迷惑候つる由、天下之批判笑止絶言語候、國中之百姓商人共有付、他國人なつき候やうにてこそ、國家も目出可為繁榮候間、萬事以其心得、今度談合之趣、少も無違變、堅可被相守候也、謹言、

六月三日

家久(花押)

下野守殿

喜入撰津守殿

「寛永三年ト張札アリ」

15 某覺書(抄)

「御文庫拾七番箱廿一卷中」・「家久公御譜中ニ在リ」

覺

一川上式部太輔殿・吉利下総守殿・蒲池(備中)入(道)殿・東郷肥前守殿下着被申候事、

16 島津家久袖判条書(抄)

「御文庫三番箱四卷中」・「家久公御譜中ニ在リ」、

覺

一先日於大坂、諸事國中之様子談合申付、以川上式部太輔・蒲池備中入道・東郷肥前守申遣候趣定相達、其段無緩可被申渡候事、

17 鹿兒島亭歌会 (抄)

「御文庫拾七番箱廿二卷中」

於鹿兒島御亭御歌会之事、(家久以下三十五人の末尾に)

東郷肥前守

18 懷旧連歌 (抄)

寛永六年六月廿二日

懷旧之連歌

はのかなる西日ハ雲にかた分て
文の返しをいつがみてまし
言の葉の色浅からぬましハリに
さけは悲しきさをしかのこゑ
寒帰る谷の下水幽にて
深山のおくを立出ぬめり
それとしも寺のいらかのあらはれて
かりの名残は浅からすこそ
狩人の帰りつくせる岡辺に
涙に文字もきゆる玉章

重位
重位
重位
重位
重位
重位
重位
重位
重位
重位
重位

19 三原重長譜

『三原飛騨守重長譜中』

寛永六年己巳七月、御家老島津下野守久元・喜入撰津守忠政・伊勢兵部少輔貞昌奉 公盟戴、頃日 公賜久元室書、鑑録 皆機蜜事無世知者、初重長好学聯歌、得以辱 公知為親昵臣、故匪趨陪筵明娛風月、同東郷肥前守重位等恒候惟輿、至若機蜜亦莫不與聞、

云事見古文可觀以考也、

20 島津家久消息

「写本三原氏家藏」
「寛永六年七八月頃カ」
「御妹於下サマ」
「いも」
「消息」
「いゑ久」

夜せん御せうそこのとをり、くハしくうけ給候、下野守殿「香詞」せいのとをり御入候ハてハにて候、江戸にても兵部「伊勢」へ申、内儀とも御入候する事を、たんかう可申候、誰とても人の心はこゝろくにて候間、心中の事をうけ給候へばこそおちつき申候、いらひとも別儀有ましく候、人くちいろくかやうに申候間、うけ給たる事候ハ、いくたひも可申候、三人あひやく人の事にて候間、こゝろくと見え申候、たんかうなりにて候すると思ひ候、世上とりさたまなる事にて候、さて内儀をうけ給候ハ、「三原飛騨守重長」ひた守さてうけ給へく候、又々、かしく、「東郷肥前守重位」ひせん守

21 某覚書

覚

一御分國中諸士知行物成之儀、平田狩野介殿・東郷藤兵衛尉殿を以被仰下候、爰本致談合候次第二指出し候間、何とそ年内中二被相済候様二与中江申渡候、巨細者別紙二て申候事、
一上落之時、分限之衆高式千石与に候て自船之由、其許之衆被申候哉、其段談合申候事、
一五百石取四人二而合式千石之自船、此人数四十人程之乗船、十

二端之関船作立并加子雇賃、飯米迄二銀子四貫目之入目之由候、高巻石二付式勿巻分八里之出銀二候、本出銀二相加へ、とても調間敷由、各被申候、御物之此中入来る物を御引合候而、御借銀返弁方江可被成との御談合二候間、先御借銀大形御なしよせなき内、知行方其外御扶持之御詮申出間敷由、所被仰出也、

寛永七年八月七日

22 伊勢貞昌書状(抄)

「家久公御譜中ニ在リ」 亂合誤ナシ

一東郷肥前守事、是も當時御留守奥方へひたと相詰御奉公被仰付候、藤兵衛尉事者表方之御奉公仕、是も父子面々ニ相勤候、可難成候間、毎年米三拾石ツ、可被下由被 仰出候、當時上知行共候時分、如此御扶持被成儀、如何敷様二候へ共、無余儀被召仕衆、身上落着候へハ、咲止ニ 思召候間、如此 御意之旨候条、以此趣御談合候て可被仰渡候、今度上知行二付、知行米二よらず半分ツ、上り候儀者、何も同前候、可為御沙汰候、是又為御存候、

23 某寛(抄)

「寛永八年ならん」

一御分国中諸士知行物成之儀、平田狩野介殿・東郷藤兵衛尉殿を以被仰下候、爰許致談合候次第二指出し候間、何とそ年内中二被相済候様二、与中江申渡候、巨細者別紙二可申候事、

24 天寧寺請取状

「真本見玉氏蔵」

請取

小判金八両

右者、東郷肥前守殿「重位」為御音信被遣候、慥ニ請取申候、御国本

へも以書状御禮可申上候、以上、

「寛永九年」
申七月六日

天寧寺(花押)

仁禮右近將監殿御使

伊東志摩承殿

まいる

25 寛永九年高帳

寛永九年高帳与

三百七拾石

東郷肥前守殿

26 島津家久書状(抄)

「家久公御譜中」 「正文在島津左衛門久道」

一東肥事、たひく申候つる、二右衛門尉にて申候、肥前へも被尋候哉、定而存分共可申承候様、當世ハ誰もくかたきあしく候、東肥事ハ、さりとてハ左様有間敷とおおもひ候、さりながら、たしかにふしんなる事共御入候ときハ、如何心中難計候、せいし共可申候、きくとく候てこそ、何之みちにも可申候事、

27 寛永十三年薩州鹿兒島衆中屋敷御檢地帳(抄)

新堀々下

下屋敷二反五畝

東郷肥前守殿

28 川上久国外二名連署状(抄)

一久志本殿其元江不被着前簾、以書狀申入候、黃門様あなたこ
なた江被申請候儀、御遠慮可入候由、細々申入候つる、其趣も
伊東仁右衛門殿を以、東郷肥前殿・児玉筑後殿江被仰達候由、
定 黃門様可被聞召之与存候、御氣色ハ定次第二可為御快氣候
へ共、承及たる分ハ、中々當年此元へ御参府ハ罷成ましき御
様跡之由候間、弥可為其分候、然処ニ御心易御慰かちニ御座候
など、何方よりも此方江被達 上聞候ハ、笑止之儀ニ候、
もはや久志本殿ハ此飛脚其元へ可致参着時分ハ、被為上儀も可
有之候得共、縦被為上候跡ニ而も、当年中ハ萬其御心持人可申
候、春二成候へハ御狩之時分ニ而候条、ちと御狩などへも御上
り之様ニと被申衆も可有之候得共、狩と申儀ハ殊外御達者ニ候
ハてハ不罷成儀ニ候、名之高キ事候間、自然左様共候ハ、狩
ニさへ御上り候など、御取沙汰も候へハ、御為可患候、久志本
殿逗留中ニハ式部殿へ被仰理、余程御氣屈候間、ちと何方へ御
心易所へ御出候て、晝御休をも被成度之由被仰候ハ、久志本
殿も定御養生之為ニ被伸御氣儀ニ候条、一段よく候ハんと社可
被仰候間、左様ニ御理候て御出候ハ、少も後 のたゝりに
も成申ましき候、此御心理内々御分別人可申候、長々之御事候
間、御内取計被成御座候間、御氣詰り可申候間、次第ニ御氣
力付申様ニ候ハ、御心安所江ハ、余世間江響不申様ニ被伸御
氣儀ハ、尤左様ニ可有候、從隣国茂其元江者、不斷人を可被付
置候、江戸之御目付儀不及申候、不可有御油断候、

29 伊勢貞昌書狀

「御文庫拾八番箱廿九卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

今度以御条書被 仰聞候内、別而御念入可申儀、細々口上ニ雖
申達候、御病中不被聞召届儀も有御座、又若あひにて被聞召候
ハ、たがひの申落承ちがへも可有御座と存、以書付致言上候、
一けんさニ付北郷殿跡之儀ハ、又八様へ可被仰渡候、式部様へ
御定之儀御恨之由、被思召との御事ニ御座候由、是ハ誠御女儀、
又ハ分別之不至人の申事を被聞召ての、御あく心たるべく候、
其故ハ 又八様御事ハ 薩州様へ御さし次に御座候、然処、
北郷殿へ跡を被成御次候ハ、はるく御位下可申候、適 守
護之御さし次ニ御むまれ被成、過分ニ御位御さかり候ハん事ハ
非本意候、如此之儀を以、北郷殿へ跡之儀を 又八様への御心
あて無御座候つるよし罷成儀ニ候ハ、被仰理度儀ニ御座候、
萬一左様之儀御直談なども可有御座時ハ、是非被仰達、御心も
ちもほとけ候やうニ候へハ、どなたの御ためにもよき御事ニ御
座候、北郷殿ハちと御分限にて御座候、左様之儀を余程うらや
ミ被成儀も如何御座候、 惟新様ハ 龍伯様の御さし次に御
座候つれとも、真幸七か処御持被成候、北郷殿ハ從前代之大分
限にて、其時分之儀ハ 惟新様より二そうはいほとも分限にて
候つるとこそ、北郷殿ハ小身ニならせられ候へ、もとくハ於
御分國、薩摩・大隅・日向相そろへ御領候時、北郷殿ニ御なら
ひ候衆ハ無御座候つる、 惟新様ハ伊東ニ御さし合候て、久敷
さかひめに御住城候て、朝夕敵ニ被成御取合、大事ニ合戦共被
成、伊東之衆歴々を、残すなく御うたせ候て、終そのいたみに
て日向御手ニ入候間、日向半分をも可被進儀にて御座候つれと
も、右ニ如申上候、北郷殿よりハ御少分限にて御座候つる間、
左様之儀も御分別ニ入申事ニ御座候、

一又八様へ、加治木惣別被成御付たる由、世上之取沙汰ハ御座候
つれ共、おもてむきよりとかく御沙汰無之候間、如何与存候処、
今度被仰聞奉得其意候、先以目出度候、就其申上事ニ御座候、
かちきの惣高 又八様へ被付進候、尤以御使可被成御内談候つ
れ共、御心持有之儀にて、先急ニ被仰渡候由、薩州様へ以御
使被仰入可然候ハん哉、從 又八様も御斟酌ニ思召候へ共、
黃門様御意之儀御座候間、先御領掌被成候由、以御使被仰上御
尤奉存候、御国之儀ハ向後 薩州様被成御存儀ニ御座候間、少
二ても御兄弟様太刀御知行被進儀ハ、御内談にて相濟申様ニ御
座候而、目出度奉存候、左様ニ御慰勲ニ被成候ほと、後々たか
ひの御為能可有御座と奉存候事、

一又八様へ猶以御知行被進度候由御尤候、左様候ハ、今いかほ
と可被進候哉、今度加治木へ高を付被進候而、大かた二万石ニ
も及可申候哉、先二万石ほと二成御申候て可然御座候ハん哉、
最前一万石被進候、其後加治木ニ罷居候直之衆を御付被成候、
今度又高を付被進候而、いかほと御知行之高あかり申候哉、い
また二万石ニ足不申候ハ、其上を被進、先二万石ニ成御申候
てハ如何可有御座候哉事、

一薩州様へ御國を被成御讓候てより、黃門様御隱居分二万石も
御もち被成、其御跡次として、右御知行を 又八様へ被成御讓、
當時 又八様之御跡を、宝壽院殿へつかせ御申候而ハ、いか、
のよし御意候、これハよく御思案入可申候、黃門様之御跡ハ
薩州様にて御座候処、又 黃門様之御跡と可有御座儀、如何ニ
奉存候、其故ハ、御代々御家を被成御次候、御嫡子へ御ゆつり
候て後、御隱居分之御知行其まゝにて、御嫡子へ參候、此儀ハ

大身小身共二古今相定たる儀ニ御座候間、御新法之様ニ御座候
而ハ、彼是後々之御為、如何ニ御座候間、又八様へ猶以御知
行可被進と 思召候ハ、只今之御知行之高を被聞召合、二万
石ニ成御申可然御座候ハん哉、二万石ニ御成候儀ハ、過分之御
事にて御座候、惟新様ハ最前ハ三万石にて御座候つれ共、か
ちきへ御上り候てよりハ、二万石ハ 黃門様御蔵入ニ被相加、
一万石にて御内外共ニ被成御調候、如御存諸事結構ニ相調申候、
又八様御事も、二万石にてハ諸事可然相調申候哉之事、

一宝壽院へ 又八様御跡を可被進由御座候へ共、右ニ如申上候、
又八様ハ今之御知行不相替候時ハ、又八様御跡被成御次儀ハ
有御座ましく候間、是も今ちと御知行可被進と 思召候ハ、
当知行千五百石之上ニ今千五百石被成御加、三千石ニも成御申
候へハ、今之一はいニ御成候、御子様たち殊外御小身之御衆
あまた御座候間、左様之御衆ニも御知行被進候ハん間、御知行
入可申、左様候ハ、薩州様御くら入過分ニ引入可申候間、
公儀御調も亦可難成候間、其御心持も可有之候哉、御袋様など
ハ可成ほと御知行可被成御持やうにと、可思召候へ共、それハ
一かたの御分別にて御座候、又八様御事ハ御別腹にて御座候
間、向後御兄弟之御間も如何可有御座哉と諸人存候、是ハ人之
氣遣尤ニ御座候間、又八様御為をおほしめし候ハ、いかに
も御身上を御引入候やうに御心もちにて、薩州様へよくく
御奉公可被成との御心中を、ねてもさめても無御忘やう二との、
くれく御意見が御身のために候、御知行などの儀ニ何かと被
思召、向後之儀を大形ニ思召候而ハ笑止奉存候、いきりやうな
との沙汰候ニ付ても、たかひに御うたかひおこり可申候よりな

との申分、まこと二ても偽二ても笑止千萬なる御事二て候、これもはや世上二皆申ふらし候、かやうの時分、御知行を過分二被進候ハ、御分別不達様諸人可存候間、右二如申上候、先二万石はとにて可然御座候ハん哉、よく御思案尤二奉存候、如此御おんミつの儀を承、もより申たると、思召被仰聞候儀、あさからさるかたしけなさにて御座候、就其、近比似相申さぬ理口共申上候、ばちをあたり可申と奉存候、今度けんさに御たり候儀ハ、世上二かくれ無御座候間、御ふくろ様よりふかくとせしをなされ、色々取沙汰申やうに御聞付候て、御おとろき被成候、少も薩州様などへ御あくい無之候、向後弥左様之御心もち有之ましきと御申二てハ、いか、可有御座候哉、又八様ハ去年諷方之於御前、皆々せいひ被仕候、是非二血判可被成よし被仰候て、各同前二被遊候、これも一段之御分別にて御座候、又去々年、黄門様被成御上落候時分、我等もかちきへ参候て、從彼地致御供候、其時、又八様之御座所へ、わさと我等をめしよせ被仰候ハ、先年御袋様御あく心之儀共候つる由、其沙汰候、其段ハいかやうにも候へ、又八様ハ少も無御存儀候、向後弥被對、薩州様御別心有御座候間敷由、委數御念入申候儀を被仰聞かんじ奉存候、其段罷上候刻、委薩州様へ申上候、又八様御分別ハ一段御おとなしく御座候、弥其御心もち不被成御忘様二、被仰候て御尤二奉存候、御間あしく成申候ハぬやう二、薩州様御前之儀ハ、委可申上候、今までハ少も左様之御心持無御座候、於其段者可御心易候、此旨可然之様可御披露候、恐々謹言、

「朱力キ」
「寛永十四年」

伊勢兵部少輔

二月九日
貞昌（花押）
東郷肥前守殿

30 華林寺秀庵書状

「愛甲氏文書」

尚々其身存分之様子、大方我等迄被申遣候、後々之儀為之由候へハ、各為各御存知候、直書御一覽之後、彼親所へ御遣候而御見せ可被成候、

熊用飛札令啓候、仍昨日爰元江愛甲次右衛門殿参詣候、然者、今日禪定参有度之由二而、案内者憑被申候間、即申付候、然処、今度立願旨趣ハ、此度、黄門様長々御不例之儀、笑止千萬二奉存候、就夫、為御生替二夜三日禪定二参籠由候而、御（^キ）之内二籠被申候、前々度取出之類、且又社人之類、其内二入候而御幣帛など指置候事ハ有之由候、平人なと々様二候事無比類候、其上若神火等も候ハ、可為夫迄之旨、從禪定被申下候、定三日之儀候間、追付成就二而ハ可有之候得共、当分御神火重々御座候条、今日淺御座候はんも不存間、前以申入候、為御存候、急之候文脉大方二候、恐惶謹言、

「寛永十四年」
潤三月十一日

「霧島座主」
花林寺
秀庵（花押）

東郷肥前殿
「重位」
児玉筑後守殿
「利昌」
「平田」
大久坊
「宗如」
参人々御中

31 愛甲廉次書状

「真本在愛甲藏記」
「香林寺」
御座主様

愛甲次右衛門尉

廉次

申上候、みちち参とて、案内者申請候へとも、二夜三日参籠申候御願二而候、左様ニ申候ハ、無理ニ御留可被成与存候而、いつわり申上候、真平御免あるへく候、上様御定くう一参候ハ、拙者も無事二下向可申候、其刻彼是可申分候、恐惶謹言、
「寛永十四年」
壬三月十一日

「寛永十四年」
壬三月十一日

廉次（花押）

尚々神火ニ合申候ハ、御生かわり可為条、鹿兒嶋へ左様ニ可被仰上候、以上、

32 島津家久条書

「載兄玉利昌譜中」「家久公譜中ニ在り正文在島津圖書久見トアリ」

寛

「家久公也」
「永々病氣」ニ候故、万事を指置一方ニ養生候間、各諸事可被入念事、

「今ノ御家跡」
「評定所之諸沙汰」延々ニ候而、不事済由候、近年ハ事も多候ニ付年寄衆使者なども余多相加候処、或誰之留主、或誰之煩なと、

候て押移、傍輩中之挨拶を専ニ、私かましき儀第一にて、國之評儀者第二第三候かと、諸人沙汰候由、不可然候事、

一借銀方之儀者無案内之事ニ候、為其國を預置候条、各一途可有談合候事、

一藏入之被申付やう緩々ある由候、百姓々しつかれ入候由聞及、無心元候、一途可有談合候事、

一藏入之被申付やう緩々ある由候、百姓々しつかれ入候由聞及、無心元候、一途可有談合候事、

一口事沙汰之儀、人二より人之存分早々相違、小身之者共ハ兼々不申達、いつまでも其分ニ候由、風聞候事、

一番緩候由聞通候事、

一何事茂老中衆用捨かちニ而候由、相聞得候事、

以上

「寛永十四年」
七月二日

右、兄玉筑後守共・東郷肥前守殿ニて被仰出候由ニて、此方へハ新納右衛門佐殿を以彈正殿・民部殿・左衛門佐殿より承候事、

33 台所御書院寛

「兄玉家蔵」

寛

一御膳所衆之事、

一御食いれ之事、但巷人罷居候者差合御座候而不罷出候、

一鳥目三貫文者平山対馬守殿取替被申候、

但鬼塚源太左衛門殿内儀へ被給候、

一鳥目貳貫文者、大坊存堯坊へ取替之事、

一御曹子様御たひ、御袋御たひ之事、

「寛永十四年」
十二月廿九日

台所御書院

東郷肥前守殿

兄玉筑後守殿

参

34 兄玉利昌譜

「兄玉利昌譜中」

寛永十六年己卯五月二十日、遂病卒、年六十七、葬于興国寺、法号寿山源量居士、而世相傳、其在世時、自命画工写其真像、請重位先生、題之歌云、

35 児玉利昌詠草

『児玉氏家藏掛軸』
天地をふきわかつ風にをく露の
いろかへぬまそわかすかたなる

寿山源量居士

36 東郷重位書状

『真本児玉氏家藏』

五百疋御茶とふのためにもたせ候、
さてもく、我等かきハをこそ筑州を頼可申与、頼母敷存候而罷
居候処、我よりさきに立せ給ふ事、誠にく力をおとし申候、此
後者世になからへても、誰を頼可申かと心細く存候、御徳様さこ
そ御なけきにて候覧、御心得得頼存候、恐々謹言、

五月廿日
「寛永十六年」
「時年三十九歳」
「利実」
「時年三十九歳」
「重位（花押）」
「時年三十九歳」
「東郷肥前入道」
「児玉四郎兵衛尉殿」
参人々御中

示現流關係諸記錄

1 本藩人物誌抄

一東郷安房助重治入道弓伴 子孫 東郷十左衛門 瀬戸口藤兵衛重為二男也、

朱一又弥七 元龜三年、我兵松島ニ航シ、進テ下大隅荒平ヲ破ル、

是時伊地知朝重・伊集院久春同前軍勞他ニ殊ナリ、天正年中

唐船暖相勤、武辺之譽有之、内之浦・山川・久志秋目等之地頭、

瀬戸口氏ニテ候処、天正年中嫡家源七郎重虎之免許ニテ東郷氏

ニ改名、朱 十五年泰平寺御供、天正十六年 竜伯公初テ御上

洛、御供之内ニ瀬戸口与助アリ、朱 文禄中高四百石、其子十

左衛門重恒、高江・山川・山田等之地頭、朱 寛永九年人数賦、

重恒騎馬二人、卒廿三人、鉄砲二、槍十二、弓一、

一東郷肥前守重位 瀬戸口与助子孫 東郷重兵衛 子孫 東郷重兵衛 瀬戸口藤兵衛重為三男

也、永禄四年於鹿兒島誕生、朱 兄ト共ニ東郷ニ改ム、天正六

年耳川合戦ニ初テ罷立候、藥丸壹岐親分ニ相頼參候由、天正年

中在京砌、示現流剣術善吉和尚ヨリ 俗名赤坂雅集、落陽 南無天親親提 皆伝イタ

シ、其後 家久公御師匠被仰付、御高四百石・御腰物 在瀬戸ノ九字 五カ

リ拝領被仰付、隠居之節百石被下候、泊地頭、天正十六年 竜

伯公初テ御上洛、御供之内瀬戸口藤兵衛ト有之、寛永廿年未六

月廿七日卒ス、年八十三歳、法名能字俊芸庵主 瀬戸南林寺南ノ 方山進ニアリ

牡丹 重位

イツハアレトケフ一シホノ花盛アカメ色香ヲ深見草カナ

紅葉 同

山陰ニ見ユル紅葉モケフコソハ今一シホノ詠ナリケリ

落葉 同

行ヤラテシハシヤスロフ山陰ノ袖ニ問ナクモ散ル木ノ葉カナ

旅 同

又今宵草ノ枕ヲムスヘトヤカネハ聞ヘス雲カ、ル山

題シラス 同

直キ世ニ罪モナキ身ノイカナレハカク山カケノスマヒナルラン

同

サユル夜ノ夢ニ疑フ心カナイツカクレ家ノ内ニ来タルト

同

稀人ヲ尋□ニ時ノ移リ果テ池ノ蓮ニ秋風ソフク

神祇 同

鴈ノ鳴ク秋待ヘタル松陰ヤ神ノ心モ住吉ノ里

題シラス 同

古寺ノ砌ノ松ニ風吹ケハサナカラ法ノ声ヲ聞哉

○文之集跋兵術書後

代羽林殿下 日之記ナリ 慶長九年甲辰仲春、使藤兵衛揮劍、其

揮在自得ル其妙出自然トアリ、

○重位ハ古風ヲ慕ヒ、儒仏ノ道ヲ学ヒ、茶事及ヒ和歌マタ春蘭

秋菊ヲ画ヒテ精神ヲ筆端ニ得、マタ柳下ノ鍛ニ巧ニシテ、夜

ヲ以日ニ繼キ得ルコトヲ務テ、タ、一芸ニ名アルノミナラス

多芸ニ名アリ、

○竜伯公初テ御上洛被遊、聚楽ヘ被成御座候節、重位御供ニテ

上京イタシ、善吉和尚ヘ示現流致懇望候事一寒暑ニシ得其奥、

○東郷肥前守重方 弥十郎 藤兵衛 重位子、慶長九年生、母ハ松元伊予守女、

坊泊地頭、町奉行、光久公御師匠、高二百石被下置候、万治

二年卒、年五十六、建立龍學寺、世 入道休半云也 一瀬戸口安房介重治 与助、弥七 重位也 重為二男、朱 依嫡家免許、

兄弟共ニ東郷氏ニ相改候、

2 諸家大概抄

一平姓瀬戸口氏は東郷氏の庶流にて、東郷十左衛門先祖・同氏藤兵衛先祖は兄弟にて候、瀬戸口藤兵衛子にて候、兄は瀬戸口与介後に安房介と申候て武辺の誉在之、後に地頭職被仰付候、弟藤兵衛後に肥前守重位は、在京の時分善吉和尚に示現流兵術致相伝候、

3 諸郷地頭系図抄

川辺郡坊泊

東郷肥前守重位 正保二年九玉社鳥居再興ニアリ、

東郷肥前重方 明暦三ノ二月より同九年迄、

東郷藤兵衛重利 後肥前、御兵具奉行・吟味役、

始羅郡帖佐

東郷肥前重利 御兵具奉行・吟味役・帖佐地頭トアリ、

肝属郡内之浦

東郷藤兵衛重利 後肥前、御兵具奉行・吟味役也、明暦三九月

十六日より岸良地頭なり、

出水郡野田

東郷藤兵衛 寛文七年二月三日より『定』、

始羅郡山田

東郷藤兵衛重利 後肥前、御兵具奉行・吟味役也、寛文八年九

月十日より『定』延宝三年迄、

伊佐郡羽月

東郷藤兵衛重利 寛文二年七月四日『定』

4 三州御治世要覽附録年代記抄

寛永二十年癸未

六月廿七日、東郷肥前守重位死去、八十五、能学俊芸庵主、

萬治二己亥

八月七日、東郷肥前守死去、八十二歳、重位之嫡子、二代目、兵

法達者、

延寶六年戊午

七月三日、東郷善助死去、兵法者ニ而候、法名了山龍心庵主、

宝永二年乙酉

四月十四日、東郷与助殿死去、南林寺ニ葬、兵法者ニ而候、法名

即安活心大居士、

宝永七年庚寅

五月九日、於築地御茶屋、東郷^(重治)藤兵衛父子三人兵方被遊 御覽候、

藤兵衛だし郷田源助、

享保十七壬子

二月、東郷^(重治)藤兵衛殿宅へ、嶋津^(久壽)左衛門殿家来豊田五郎右衛門と申

者致推参候付、藤兵衛殿弟子伊地知清右衛門殿兵法ニ而、豊田を

被打候儀及披露、藤兵衛殿・清右衛門殿逼塞被仰付候、豊田も同

前、

5 称名墓志抄

○東郷肥前守重位 南林寺南の方山涯にあり、初名弥十郎、藤兵

衛、長門守と云ふ、本と瀬戸口氏、後に東郷氏に改む、京都天

寧寺四世善吉和尚に示現流剣術を皆伝し、慈眼公御師範を勤む、

高百石を賜ひ、薩州泊地頭職に補す、既に隠居して又百石を賜

ふ、寛永二十年癸未六月廿七日、能学俊芸庵主、八十三、嘗て
公示現流の極意を詠せよとの上意ありし時、

天地を吹分つかせにおく露の色かへぬまそ我姿なり

紅葉の歌のうちに (西海拾玉)

山かけにみゆる紅葉もけふこそはいまひとしほの詠なりけり
行やうてしばしやすろふ山陰の袖にまなくもちるこの葉かな

門人児玉利昌へ贈る文の中に

なをきよに罪もなき身のいかなればかく山陰のすまいなるら
ん

古寺の砌の松に風吹けはさなから法の声をきくかな

○東郷肥前守重方 父肥前守重位の右にあり、初名弥十郎、藤兵衛といふ、父の業を継ぎ、(光久)寛陽公の御師範を勤む、慶安中初て郡座を建てたる時、重方に郡奉行を命じて規範を定らる、菱刈孫兵衛重教・汾陽次郎右衛門光東等と謀りて、新田貳万四千石を開く、公之を賞して盛膳を賜ひ高二百石を賜ふ、重方植物の数を詠歌に作りて時節を知らしむ、坊泊地頭、後に町奉行、

万治二年己亥八月十日、雄山妙英庵主、年五十六、

○東郷善助 肥前重方の墓石脇にあり、示現流を父重位に受く、世に人斬善介と称す、延宝六年戊午初三日、了山龍心庵主、

○東郷肥前重利 松原山脇寺の南清滝川の脇卵塔中にあり、初名弥十郎、藤兵衛と云、父重方の示現流を受け、(光久)泰清公の御師範を勤む、御兵具奉行・吟味役、坊泊・内之浦・帖佐・山田等の地頭職、元禄三年戊午五月廿四日、天柱明真庵主、

○東郷藤兵衛重治 松原山洲崎にあり、五輪石なり、初名弥十郎と云ふ、父重利の示現流を皆伝し、伊集院直木邑に居住す、浄

(吉貴)国公の命ありて御城下に移り、御切米三拾石を賜ふ、享保十八年癸未六月初十日、物外院一運良機居士、(一本一運は一思に作る)

○東郷藤十郎実勝 父藤兵衛重治同前にあり、示現流を父に皆伝す、重治の二男なれとも家兄藤五左衛門故ありて家統を受けす、よて流儀を譲らる、宝曆六丙子四月初二日、法光院義山良勇居士、

○東郷善助実賢 父重治の墓同前にあり、重治四男にして示現流を学、後に小野村西の谷に住す、安永九年庚子三月廿五日、諦良院自参觀然居士、

○東郷藤兵衛平実乙 松原山洲崎先塋の側にあり、初弥十郎と云、父藤右衛門実防の業を受け、示現流中興なり、御目附物頭を勤む、文化元甲子十一月八日、得明院剣山活道居士、享年六十七歳と記す、

6 人物伝備考附録―掣剣の部

○東郷肥前守重位 初名弥十郎、藤兵衛と称す、京都天寧寺四世善吉和尚(天真正自顕流祖を十瀬与三左衛門尉と云、一伝して金子新九郎に至る、再伝して赤坂雅楽助に至る、即善吉和尚なり)に示現流剣術を皆伝し、藩主家久の師となり、門人業を受ける者又多し、家久田禄四百石を与る、薩州泊地頭職に補す、既に老を告るに及んで又百石を加増す、寛永二十年六月廿七日死す、年八十三、重位の子肥前重方、父の業を継ぎ藩主光久の師範たり、門人業を受ける者又多し、仕へて郡奉行と為り、新田貳万四千石を開き、功勞最多し、光久田禄貳百石を与へ其功を賞

す、後町奉行に転じ、諸所地頭職に補す、万治二年死す、重方の子肥前重利、示現流の業を父重方に受け、藩主綱久の師範を為し、門人亦多し、事へて吟味役に至、諸所地頭職に補す、元禄三年五月廿四日死す、重利子藤兵衛重治、父の業を継ぎ示現流を皆伝す、業を受ける者多し、藩主吉貴年俸三拾石を与へ、其家業を励まされしむ、享保十八年死す、重治長男家統を継ぐす業も亦受す、二男藤十郎実勝、父の業を継ぎ示現流を皆伝す、宝暦六年死す、重治四男善助実賢、父の業を受小野村西の谷に住す、安永九年死す、実勝の子藤右衛門重□、其子藤兵衛実乙、世々家業を受門人多し、殊に実乙に至ては示現流の中興なりと云へり、

7 西藩野史抄

元和元年乙卯

○春正月二日、家久公森江津ヲ発ス、本多正純カ臣福屋七助正純及ヒ山口駿河守直友カ奉書ヲ齎来ル、二將軍秀頼ト和平成テ関東ニ歸ル、依之諸國ノ軍國ニ歸ラシム、於是 家久公軍を班ス、先是 家久公イマタ美々津ニ在ルノ時、秀頼ノ使武井理兵衛来リ、秀頼及織田有楽・大野治長カ書ヲ齎来テ援ヲ乞テ止マス、於是別府信濃守景親・東郷肥前守重位ヲシテ、武井ヲ虜ニシテ大阪ニツカハシ、三原諸右衛門ニ達ス、時ニ和成ルノ後ニシテ二將軍関東ニ歸ル、諸右衛門天王寺ノ宮ニ至リ山口直友ニ告ク、東郷肥前入道、初藤兵衛、重位ト称ス、為人剛毅、幼ヨリ武芸ヲ好ム、長シテ洛陽ニ至リ、釈善吉ニ見ヘ劍ヲ学フ、名ツケテ示現流ト称ス、奥旨ヲツタヘテ歸ル、家久公ノ命ヲ奉シ東新

之丞（公ノ劍術ノ師、其術ヲ称シ待捨無二劍ト云）ト決セシム、重位コレニ勝ツ、公親ヲ刀ヲ取テ重位ヲウツ、重位木劍ヲ取テ是ニ合フ、公其芸ノ老タルヲ見テコレヲ師トス、酒ヲ賜ヒ又刀ヲ賜フ、恩遇日々ニ加ハル、禄千石ヲ賜フ、六百石ヲ辞シテ其余ヲ受ク、又宅地ヲ府下ニ賜フ（伝云坊泊地頭職ニ任ス）、大將軍家久公劍術ヲ好ム、柳生飛彈守ヲ師トシ、柳生氏カ徒福町七郎左衛門・寺田少助来テ重位ト勝負ヲ試ム、二士勝ツコトアタハス、於是二士重位ニ從テ学フ、大將軍重位ヲ召ス、家久公辞シテ曰、既ニ死セリ、是ヨリ重位江戸ニ至ラス、国ニ在テ生徒ヲ教授ス、世々業ヲ継テ家声ヲ殞サス（按ニ、重位子アリ、肥前重方ト称ス、芸ヲ伝ヘテ寛廟ニ師タリ、田ヲ開ク事二万余石、功ヲ賞シテ二百石ヲ賜フ、又坊泊地頭ニ任ス、其子肥前重利ト称ス、業ヲ継テ玄廟ニ師タリ、其子藤兵衛、其子藤五左衛門、其子藤右衛門ト称ス、今ニイタリテ武芸教授タリ、禄千石ヲ賜フ）、

8 盛香集抄

一東郷藤兵衛重位、善吉和尚に自現流を習ける起を尋ぬるに、金工又はまき絵の稽古に京都に登りて有ける時（東郷家傳には御奉行に付京都に有し時と云々）、善吉住居の天寧寺は重位旅宿の隣にて、常に善吉の小僧重位の所に立寄しが、或時我師曰、客は劍術に心掛有て奇特に思ひぬれ共、殊の外白人也、立木を打音にて是を知ると云ひしを、重位思ひけるは、我待捨の流に心を寄せ修行する事年余る也、然るに夫を白人とする者は是名師也、習ひて見ばやとおもひ、善吉に心安くなり劍術の咄を仕

掛けて見るに、能其理を明かすといへ共、我道に不非は其業をば不知とて教へざる事数月、重位思ひけるは、我此術を懇望し種々心ざしを盡せとも、彼我道に不非としておしへざれば無力、然れ共今宵までは行て見るべしと思ひ、廿三日の夜行て語るに、月の出で障子に移りければ、

にこりえにうつらぬ月の光り哉

といひ捨返りけるを、善吉呼返し、剣術に心差厚くして教へざるを怨みたりと見へたりとて、其夜よりおしへ初けるは冬の事也、翌年の夏は不残傳受して下りけるとかや、

9 薩藩旧伝集抄

東郷(実防カ)薩藩旧伝集抄

右先祖代より示現流剣術相伝仕来、御先祖様之内段々御相手をも相勤、格別なる師家に候間、以来江戸詰の節は、家督・部屋栖共に初詰より新番にて被遣、夫より応詰敷御取分も可被為在候、

右人数、寛政四亥十月廿一日被仰渡候、

一 東郷肥前守重位、寛永二十年六月廿七日死、年八十三才、墓所南林寺、位牌所荒田能字寺、法名能字俊云庵主、

一 東郷肥前殿は総郡奉行と被仰付、坊泊の地頭重位より引継に被仰付、支配被致候、然る処に、坊の住人に速水吉左衛門と申人無双の兵法数奇にて、肥前殿御宅へも節々罷出、兵法稽古仕候、或時肥前殿坊泊へ被為差入候、其節吉左衛門暖杯へ願出候は、今度御地頭御差入に付、何卒私へ御用聞被仰付度奉存候、御地頭様には兼々御心易被仰下候間、必私に可被仰付と頻に願申出

候、是に由て吉左衛門へ御用聞申付候、吉左衛門心中は、少の間有之候は、示現流の示に預度との念望にて、如此願候と也、然共昼夜共に役々相詰候て、終にも透無之候、然るに一乗院より請招被致候て、終日の御馳走にて夜入迄被為居候、其夜は月の限なく冷風吹出、肥前殿にも御機嫌能御座被成候、今夜御一宿被遊候へとの事にて、其夜は寺院へ御滞留被成候、右吉左衛門も御後に罷在候、住持并役々の者共も、御休可被遊の由申上候て追出候、吉左衛門爰そよき時分と存候て申上候は、扨肥前様へ申上候、私事数年御存知の通御流儀信仰仕候、何とぞ少々御示にも預度奉存候、鹿児島へ罷越候節は、御弟子中多く御出被成候間、難叶御座候、今度御差入に付御用聞願ひ相勉候も、此一儀申上む為にて御座候と申上ければ、肥前殿御聞被成候て、成程其方心中いはぬとてもよく知候そ、流石の奥意を語り聞すべしと有ければ、吉左衛門不斜悦び、御語被成候を今やくと相待けるに、肥前殿御寝入被成候様子也、吉左衛門扨も無情御事哉と恨み居けるに、肥前殿より吉左衛門と高声に被仰候へは、驚きて御答申候、寝入はせんやと被仰候、曾て寝入不申いつ御話被遊候やと存候に、貴公様こそ御寝入被遊候様子にて御座候と、奉恨罷候と申ければ、更に語り聞せぬ、或者か故郷を出、久々に帰宅するとて道を踏迷ひ、爰そと思ひしに深谷あり、細き丸木橋かゝつて、渡らむとすれば不叶して、如何せむと思ひ居けるに、向に声をかけて追出し追返し相戦ふ、よく見れば我が親也、扨も親と思ふ内に親を切伏して、左あれば不覚右の丸木橋を走り渡たる、親の敵を討得たり、其後二度と其橋を渡る事はならざりしと御語被成けると也、右肥前殿は上手にて、

二橋の意味をたゝの話を被成ける者なるへし、

一川上因幡久国の家来藤井四郎兵衛事は、示現流上手に致し候、

因幡殿へ殉死の契約申置、因幡殿死去の節供致しけると也、切腹の節跡より大山鉞持せ申候、切腹の場所へ暇乞に御出被成候、旁々申候は、若き時分は血氣に任せ、此山鉞にて首自殺を可致と存候て拵置候へとも、年罷寄ごうごう不自由にて其儀不相叶候、故に介錯人宜相頼申候、拙者には扇子拔、しは腹を扇子の蟹目にて声をかけて引廻す様子、中々目も当られぬ程すまじき様子也、然るを後より介錯致しけると也、

一篠崎覚左衛門殿は兵法教寄にて、折角修行被致候時分に、^(重方)大肥

前殿へ被申上候は、私事御弟子数百人の打出し仕候に、終に肥前殿の様に討人無御座候か、因幡殿家来の藤井四郎兵衛は、間々肥前殿の様にすまじき打を仕候と申ければ、肥前殿被仰候は、成程四郎兵衛は上手にするよ、然共風が悪敷と被仰候、又風には構わぬ也と被仰候、さ様に被仰候は、一偏に心得ざる様にとの思召也、覚左衛門殿事は後に入道して、正真と云しは此人也、

一大肥前殿より東郷与助へ被為問候は、示現流の意地はいかなる者と存候やと御尋被成候に、与助殿答て被申候は、春駒の□か氣を得て、幾尋もしれぬ崖の上片足踏懸、大空に向ひて嘶く様なる者と存候と被申候へば、肥前殿いやく草打食てをる者也と被仰候と也、

一山路次郎兵衛といふ人は、本田半兵衛高弟にして無双の手柄也、御屋形の下大垣の杭の頭を、馬にて早道二乗廻し、一ツも打はづさぬ人也、此山路氏、稲津亀助別て懇志の事有之候へば、山

路氏より此御恩報は兵法の指南可致の由被申候、兵法の奥を伝受被致候氣質よき人にて、肥前殿にも御氣に入、龜か兵法をみれば目か覺ると被仰候程に常々有之候、然るに久々打絶肥前殿へ不被参候、或時肥前殿へ罷出兵法仕御目に掛候へば、肥前殿一目御覽被成候て最早御見取、龜か兵法はやくせぬ、御方へか行て勝口を習ひたそふやくせぬと被仰候と也、

一東郷肥前殿植物の歌

井出溝は正月、初耕作は十一日に沙汰をなすへし、正月の十一日に木を植て、茄子・夕顔・あひなへをまく、早稲種子は正月中に落すへし、茶あんこしらへふらふ植なん、ひともじや午房に木瓜・麻芋や木わた・いちひに小黍・ゑこたね・胡麻・きひは夏の節より植るへし、大豆・小豆やんにく・けしにちしやは八月、九十月紅花・夏豆・高菜まく、麦・あん豆も同じ、折からとう芋やかふなは七夕にまく、三月は八月豆に黒豆や五月はんすに唐菜六月、四月より八月迄はふたなれとさくけをまけよ、ねきは八月、にら種子は七八月に蒔置て、三年に一度植直すなり、らつきやうは八月中に植るへし、高菜十月、冬瓜極月、京菜・小菜毎日種子を蒔ならば、四季に野菜の絶へる間もなし、木の下つちにはふきとせん、山きしの根に茗荷直せよ、木陰にはこんにやく芋を直すへし、露の落ちても種子となるなり、桜木は正月初十二月、梅は二月の中旬に接け、金柑は正月初接てよし、柿も正月二月前よし、りうきつや九年母みかん・梨子はた、正月中に接と知るへし、

神道流

飯篠長威

常陸の国の住人、鹿島大明神氏子也、年号月日何の年を不知、長威神前に参詣して、兵術の理を願心底、明神有出現向長威、汝多年兵術に志深に依り、巻物一卷あたへ玉ふ、披て拝見するに極意の数を尽せり、是を長威工夫して号神道流、其後長威の嫡子威近相伝也、

若狭守威近

常陸国の住人なり、威近嫡子威信相伝也、

若狭守威信

常陸国の住人、其後威信より同国の住人十瀬与三左衛門長宗相伝也、

十瀬与三左衛門長宗

常陸国住人、鹿島大明神の氏子也、年号月日何の年を不知、明神の社頭に三七日参籠して、兵術の妙理を得させ給へと宿願をなす、其祈る故にや明神有出現、四段の目録を与へ給ふ、是則天台の四観とも何字の四段とも此目録と云ふなり、名付て是を天真正自願号也、同国の住人威貞相伝也、

金子新九郎威貞

常陸国の住人なり、天真正自願此道を染心肝事年久、同国の住人赤坂弥九郎と云ふ人、十三歳の此威貞の門に入て此法を懇望す、奥儀教聞に至る、十九歳の十二月人を害して、國を退出して陸奥國に越出家し、曹洞宗門弟と成て善吉と云ふ、

赤坂弥九郎 雅樂助

常陸国の住人なり、十九年有子細、國を出て陸奥國に下り、出家して曹洞宗門と成号善吉、後に京都天寧寺に住す、天正年間薩州に東郷藤兵衛重位、天真正自願流善吉へ懇望、不殘天寧寺

に於重位へ善吉より相伝也、

東郷肥前重位 藤兵衛(劍術の極意をよめと被仰ける重位

天地をふかかへず風におく露の色かへぬまぞわか姿なる)

天正十六年六月中の五日重位上洛、京都於天寧寺善吉和尚より天真正自願流重位相伝也、家久公違貴聞、其比御師匠待捨無二劍東新之丞へ、大龍寺於御屋形立会被仰付、被掛上覽候、新之丞太刀少も出不申、重位打勝被成候、御師匠被仰付候、御腰物拝領且又御高千石拝領、内四百石頂戴六百石被差上置候、坊泊地頭職迄被仰付置候、

家久公以貴命、重位より文之和尚に談して、天真正自願流といふ文字を改め号示現流と云々、嫡子重方相伝也、

家久公御筆御繪重位絵像の掛物拝領、

大猷院様御取立の柳生飛騨守貞三の弟子、大猷院様御打出福町七郎右衛門殿・寺田少助殿より、元和元年春の頃、武州江戸於御屋敷重位へ立会望にて候へとも、天下衆の儀に御座候間、遠慮被成候へとも、強て再三望に付、伊勢兵部殿へ得差図重位立会被成候、兩人共に太刀出不申、重位打勝被成候に付、右の衆兩人重位弟子に相成候、右の衆重位家に格護被成置候、京都天寧寺へ善吉和尚之かたしろ木仏あり、

東郷肥前重方

光久公弱年の御時より、重方事流儀御指南被爲申上候、弥流儀繁昌仕、重方事重位引次に、坊泊地頭職・町奉行迄被仰付置候、嫡子重利相伝也、

東郷肥前重利

光久公御参勤の御供にて、重利事武州江戸御屋敷へ被爲相勤居

候処、大猷院様達高間、重位子孫にて可有之候、流儀可被遊上覽旨被仰出候に付、光久公被仰上候は、重位孫にて流儀相伝仕候へとも年若候、重位嫡子存命にて罷居候、国元より召寄可被備上覽旨被仰上候処、先重利兵法可有上覽旨被仰出、御日限相究候節、無程大猷院様御不例御坐被遊御他界に付、其儀無御座候、其後重利事綱貴公御兵法御師匠被仰付、多年御指南被為申上候、依之泰清院様被遊御光儀、備前兼光御腰物拝領、光久公より重利事早川名字御免被成候、件の重位子孫共余り相知候へは、何於他国も差支儀も可有之、向後於他国は早川肥前とも名乗可仕由にて、早川名字御免にて名乗被成候、嫡子重□相伝也、
東郷藤兵衛重（実助）

寛永二酉年、示現流稽古所造立被仰付、寛永三戌年正月五日、於新宅当流遺古老並門弟相揃兵法初有之時に、御家老島津大藏殿、寺社奉行樺山助太郎殿御出、床懸物家久公御筆御絵像の掛物、日和晴天兵法首尾能之有結、藤兵衛殿打出江田源助、

一御切米百五拾俵

東郷藤兵衛

右、先祖東郷肥前代善吉和尚より示現流兵法致相伝候処、家久公御伝授被遊、流儀御取立有之、其子東郷肥前、其子東郷肥前へ相伝、光久公・綱貴公御相手をも被仰付、御代々様別て御秘藏為被遊師家にて、御高拝領等為被仰付儀も有之候処、其子東郷藤兵衛に至致逼迫、辺土に引入罷在候処、示現流剣術諸人為稽古、鹿兒島へ罷移候様にと被仰付、寛永二年より御切米百五拾俵被下置候、

一穎娃主水・仁礼佐渡守とて鉢捨流の上手二人と申人の由、主水殿東郷重位へ立合に参り、被打付直に弟子付被致候由、其事を

佐渡守聞て残念に思ひ、加世田より夜内に穎娃氏へ来り申候、其方儀は当流にも頼母敷おもひ居候処、心交の儀無念至極なり、早速自分行て立合可致、いかなる上手にても、二度被打ても三度目差殺へく違は無之と被申候へは、主水殿、其方儀は取違にてはなく候哉、同じ傍輩を稽古の遺恨などをさしはさみ被申儀、武士の本意に非ずと被申候へは、佐渡守、成程左様にて候、左候は、私にも木刀にて可仕といふて東郷家へ被参候へは、児玉筑後殿一人被居候に付、佐渡守、私儀は重位と立合に参候、先其方と仕見可申といふて、被立合候へは、佐渡打出たるを、木刀より左の手打はなされ候へは、佐渡感心いたし、師匠と仕に不及とて是も弟子被付候由、

一東郷重位老へ上意打被仰付候、中納言様には御角櫓より御覽被遊候由、御櫓の下を科人通り候に付、重位老被考候は、君御覽の事候間、勝れたる切りをいたし入上覽へくと存しられ切られ候処、頭を打ちべき被成、あつと被思候処に、真二つに打わり、為被成由、直に御前に被罷出候、御意には勝れたる仕方と御意被遊候、重位被申上候は、未だ示現流あがり不申心にあか有之候、上覧の事と存じ一ぱいと欲心より、頭を切りへき残念なる事と被申上候、外には児玉筑後殿杯居られ候由、

既刊史料名

集	史料名	集	史料名
1	薩藩政要録	17	鹿児島縣地誌(下)
2	丁丑日誌(下)	18	薩摩舊士文章
2	"(上)	19	薩藩先公貴翰(乾)
3	薩摩国新田神社文書	20	"(坤)
4	一向宗禁制関係史料	21	小松帶刀傳・履歴・記事
5	薩摩国山田文書	22	小松帶刀日記
6	諸家大概別本諸家大概職掌紀原御家譜	23	新修薩摩島藩領國・郡・郷・村・浦・町附(上)
7	薩摩国阿多郡史料	24	"(下)
8	山田聖米自記	25	三州御治世要覽(三五三八)
9	明治元年戊辰戦役関係史料	26	桂久武日記
10	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説	27	明赫記
11	管窺愚考・雲遊雜記傳	28	要用集(上)
12	川上忠塞一流家譜	29	"(下)
13	本藩人物誌	30	桂久武書翰
14	薩陽過去帳	31	本藩地理拾遺集(上)
15	備家久公御養子御願一件抄	32	"(大隅國・諸縣國)下
16	鹿児島縣地誌(上)	33	江夏十郎関係文書(上・下)

鹿児島県史料刊行委員会委員

五十音順

唐鎌祐祥	県立視聴覚センター所長
川越政則	元南日本新聞社長
芳即正	尚古集成館長
小西四郎	元東大史料編纂所教授
五味克夫	鹿児島女子大学教授
犀川碓吉	元甲南高等学校長
塩満郁夫	鹿児島西高等学校教諭
晋哲哉	蒲生町長
竹内理三	元早稲田大学教授
畠中彬	錦江湾高等学校教諭
原口泉	鹿児島大学助教授
福満武雄	鹿児島新報社専務取締役
宮下満郎	鹿児島市維新ふるさと館囑託
山田尚二	西郷南洲顕彰館長

示現流関係史料

(鹿児島県史料集 第三十四集)

平成六年十二月

発行

鹿児島市城山町五十一
鹿児島県立図書館内
鹿児島県史料刊行会

印刷

鹿児島市下田町一八七九
衛ニッセイ印刷
電話 四三二六二七七

